

志木市の文化財 第38集

# 志木市遺跡群 16

城山遺跡第46地点

城山遺跡第55地点

2008

埼玉県志木市教育委員会



# はじめに

志木市教育委員会  
教育長 柚木 博

志木市を地理的に眺めてみると、北側は荒川低地、そして南側は武蔵野台地に位置しています。特に、この武蔵野台地から低地に移行する手前の台地縁辺部には、古くは旧石器時代から残された遺跡がベルト状に分布しています。

現在、当市では遺跡としては、14遺跡が登録されていますが、これらの遺跡からは、今まで実施された発掘調査により、数多くの遺構・遺物が発見されています。

そして、遺構・遺物がもつ情報を正確に解読することにより、昔の生活や当時の様々な技術を解明することにつながりますが、まだまだ完全に解明されたとは言えないでしょう。今後は発掘調査で得られた膨大な情報を如何に正確に読み取るかが我々に課せられた使命と言えるかもしれません。

さて、ここに刊行する『志木市遺跡群16』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成15・16年度に発掘調査を実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

今回発掘調査を実施した城山遺跡は、旧石器時代から近世にかけての幅広い時期の複合遺跡です。特に本遺跡内には、市指定文化財の『城山貝塚』があることで有名です。

具体的には、今回、第46地点と第55地点の調査が行われ、縄文時代前期から近世にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。特に、縄文時代前期の住居跡は、当市では2例目の発見につながり、城山貝塚との関連で今後研究が進むものと思われます。また、古墳時代中・後期の住居跡、そして平安時代の住居跡・溝跡なども発見されましたが、近世の道路状遺構1本が発見されていることにも注目されます。この遺構については、この地点から100mほど東側にある『館氷川神社』とを結ぶ古道の可能性があり、地域史を研究する上でも貴重な発見となりました。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことになりました。今後こうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

# 例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成15・16年度分の調査成果と平成14～16年度に発掘調査を実施した城山遺跡第46・55地点を発掘調査報告書としてまとめたものである。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。  
深井恵子 第2・3章第3～5節の遺構  
青木 修 第2・3章第2節、第4章第1節
4. 石器の実測及び観察表の作成は、(有)アルケリサーチ(代表取締役 藤波啓容)に依頼した。
5. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ(代表取締役 藤根 久)に依頼し、その結果を付編に併載するものである。
6. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・鈴木浩子が行った。遺構のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が、遺物のトレースは深井恵子が行った。写真撮影は青木 修が行った。
7. 調査組織

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	細田 信良 (平成12年7月～平成17年6月)
“	柚木 博 (平成17年10月～)
教育長職務代理者	新井 茂 (平成17年7月～9月)
教育政策部長	白砂 正明 (平成15年4月～平成16年3月)
“	杉山 勇 (平成16年4月～平成17年3月)
“	新井 茂 (平成17年4～6月、10月～)
参事兼生涯学習課長	土橋 春樹 (平成12年4月～平成16年3月)
“	宮川 英夫 (平成18年4月～平成19年3月)
生涯学習課長	大熊 章只 (平成16年4月～平成18年3月)
“	吉田 洋 (平成19年4月～)
生涯学習課主幹	金子 雅佳 (平成14年8月～16年3月、平成14年8月～16年3月)
“	醍醐 一正 (平成16年4月～平成18年3月、平成18年8月～平成19年3月)
“	内田 誠 (平成18年4月～7月)
“	今野 美香 (平成19年4月～11月)
“	大熊 克之 (平成19年12月～)
生涯学習課主査	佐々木保俊 (昭和61年4月～)
“	関根 正明 (平成9年4月～平成15年7月)
“	今野 美香 (平成15年8月～平成19年3月)
生涯学習課主任	尾形 則敏 (昭和62年4月～)
“	倉部 恵子 (平成14年4月～平成18年3月)
“	松永真知子 (平成18年4月～)
志木市文化財保護審議会	神山 健吉 (会長)
	井上國夫・高橋長次・高橋 豊・内田正子 (委員)

## 8. 発掘調査及び整理作業参加者

### ○城山遺跡第46地点

調 査 担 当 者	尾形 則敏
調 査 員	深井 恵子
発掘協力員	青木 修・遠藤 英子・鎌本あけみ・鈴木 浩子・高野 美子・ 星野恵美子・松浦 恵子・山口 優子・藤岡 智子 (早稲田大学)

重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）  
○城山遺跡第55地点  
調査担当者 尾形則敏  
調査員 深井恵子  
調査補助員 青木 修（平成15年10月～）  
発掘協力員 遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・高野美子・星野恵美子・  
松浦恵子・山口優子  
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○整理作業  
調査員 深井恵子  
調査補助員 青木 修  
整理協力員 遠藤英子・鈴木浩子・星野恵美子・松浦恵子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

荒井幹夫・井上洋一・上田 寛・江原 順・大谷 徹・加藤秀之・片平雅俊・  
隈本健介・栗岡 潤・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小林寛子・  
齋藤欣延・笹森健一・笹森紀巳子・斯波 治・鈴木一郎・高橋 学・照林敏郎・  
根本 靖・野沢 均・早坂廣人・福田 聖・藤波啓容・堀 善之・松本富雄・  
三田光明・柳井彰宏・山田尚友・山本 龍・和田晋治

城山遺跡第46地点（開発主体者 個人）

〃 （開発主体者 個人）

城山遺跡第55地点（開発主体者 個人）

## 凡 例

1. 本報告書で使用了地図は以下のとおりである。  
第1・2図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製  
第3図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行 株式会社ゼンリン
2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の場合は赤彩範囲を示すが、遺物番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示し、石器の場合は使用跡を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。  
J = 縄文時代の住居跡 H = 古墳時代後期・平安時代の住居跡 D = 土坑  
M = 溝跡 W = 井戸跡

# 目次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 平成15・16年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	7
第2章 城山遺跡第46地点の調査	12
第1節 遺跡の概要	12
第2節 縄文時代の遺構と遺物	16
第3節 古墳時代中・後期の遺構と遺物	21
第4節 平安時代の遺構と遺物	31
第5節 中世以降の遺構と遺物	38
第6節 遺構外出土遺物	51
第3章 城山遺跡第55地点の調査	56
第1節 遺跡の概要	56
第2節 縄文時代の遺構と遺物	58
第3節 古墳時代後期の遺構と遺物	59
第4節 平安時代の遺構と遺物	59
第5節 中世以降の遺構と遺物	71
第6節 遺構外出土遺物	75
第4章 調査のまとめ	78
第1節 縄文時代前期末葉の遺構・遺物について	78
第2節 古墳時代中・後期の土器について	79
第3節 平安時代の遺構・遺物について	81
第4節 中世以降の遺構について	82

図 版

報告書抄録

[付 編] 自然科学分析

I. 住居跡出土の炭化種実	87
II. 住居跡・土坑出土の灰試料	89
III. 住居跡・土坑出土炭化材の樹種同定	91

## 挿図目次

第1図	市域の地形と調査地点－平成15年度－（1/20000）	2
第2図	市域の地形と調査地点－平成16年度－（1/20000）	3
第3図	周辺の地形と調査地点（1/3000）	13
第4図	遺構分布図（1/150）	14
第5図	2号住居跡・355号土坑（1/60）	17
第6図	2号住居跡出土遺物1（2/3・1/3）	18
第7図	2号住居跡出土遺物2（1/3）	19
第8図	152号住居跡（1/60・1/30）	22
第9図	152号住居跡出土遺物（1/4）	23
第10図	153号住居跡・出土遺物（1/60・1/4・1/3）	24
第11図	154号住居跡・26号井戸跡・154号住居跡出土遺物（1/60・1/4）	25
第12図	156号住居跡（1/60）	26
第13図	156号住居跡遺物出土状態（1/60）	27
第14図	156号住居跡カマド（1/30）	28
第15図	156号住居跡出土遺物（1/4）	29
第16図	157号住居跡・遺物出土状態（1/60）	30
第17図	157号住居跡出土遺物（1/4）	31
第18図	155号住居跡・遺物出土状態（1/60）	32
第19図	155号住居跡カマドA（1/30）	33
第20図	155号住居跡出土遺物（1/4・1/3）	33
第21図	33号溝跡（1/60）	34
第22図	土坑1（1/60）	44
第23図	土坑2（1/60）	45
第24図	土坑3（1/60）	46
第25図	土坑出土遺物（1/3）	47
第26図	27・28号井戸跡（1/60）	48
第27図	1号道路状遺構・出土遺物（1/60・4/5）	49
第28図	遺構外出土遺物1（2/3・1/3）	52
第29図	遺構外出土遺物2（1/3）	53
第30図	遺構分布図（1/150）	57
第31図	土坑・出土遺物（1/60・1/3）	58
第32図	158号住居跡（1/60）	60
第33図	158号住居跡遺物出土状態（1/40）	61
第34図	158号住居跡カマド（1/30）	62
第35図	158号住居跡出土遺物（1/4・1/3）	63
第36図	159号住居跡（1/60）	64
第37図	159号住居跡遺物出土状態（1/60）	65

第38図	159号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	65
第39図	160号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	66
第40図	33号溝跡 (1/60)	70
第41図	356号土坑 (1/60)	72
第42図	356号土坑出土遺物 (1/3)	73
第43図	358号土坑 (1/60)	73
第44図	遺構外出土遺物 (2/3・1/3)	76

## 表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成15年度調査地点一覧 (1)	8
	平成15年度調査地点一覧 (2)	9
第3表	平成16年度調査地点一覧	9
第4表	城山遺跡第46地点の発掘調査工程表	15
第5表	2号住居跡出土石器一覧	19
第6表	2号住居跡出土土器一覧	20
第7表	152号住居跡出土遺物一覧	35
第8表	153号住居跡出土遺物一覧	36
第9表	154号住居跡出土遺物一覧	36
第10表	156号住居跡出土遺物一覧	36
第11表	157号住居跡出土遺物一覧	37
第12表	155号住居跡出土遺物一覧	37
第13表	33号溝跡出土遺物一覧	37
第14表	遺構出土の陶磁器・土器一覧	50
第15表	333号土坑出土の石製品一覧	51
第16表	遺構外出土の石器一覧	53
第17表	遺構外出土の縄文土器一覧	54
第18表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	54
第19表	城山遺跡第55地点の発掘調査工程表	56
第20表	158号住居跡出土遺物一覧	67
第21表	159号住居跡出土遺物一覧 (1)	67
	159号住居跡出土遺物一覧 (2)	68
第22表	160号住居跡出土遺物一覧	68
第23表	33号溝跡出土遺物一覧	69
第24表	土坑出土の陶磁器・土器一覧	74
第25表	遺構外出土の石器一覧	75
第26表	遺構外出土の縄文土器一覧	77



第27表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	77
第28表	住居跡出土の炭化種実一覧	88
第29表	住居跡・土坑出土炭化材の樹種同定結果	92

## 図版目次

図版 1	城山遺跡第46地点 1. 表土剥ぎ風景 2. 2号住居跡発掘風景 3・4. 2号住居跡 5. 152号住居跡 6. 152号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 7. 153号住居跡 8. 153号住居跡貯蔵穴
図版 2	城山遺跡第46地点 1. 154号住居跡 2. 156号住居跡発掘風景 3～5. 156号住居跡遺物出土状態 6. 156号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 7. 156号住居跡カマド遺物出土状態 8. 156号住居跡
図版 3	城山遺跡第46地点 1・2. 157号住居跡遺物出土状態 3. 157号住居跡カマド遺物出土状態 4. 157号住居跡 5. 155号住居跡遺物出土状態 6. 155号住居跡カマドA掘り方 7. 155号住居跡カマドB・C 8. 155号住居跡
図版 4	城山遺跡第46地点 1. 33号溝跡西側 2. 33号溝跡東側 3. 330号土坑・25号井戸跡 4. 331号土坑 5. 332号土坑堅坑部 6. 332号土坑主体部入口
図版 5	城山遺跡第46地点 1. 333号土坑堅坑部 2. 333号土坑主体部 3. 334号土坑 4. 335・336・339号土坑 5. 340～342・348・349号土坑 6. 343～346号土坑 7. 347号土坑・ピット列 8. 350～352号土坑
図版 6	城山遺跡第46地点 1. 27号井戸跡 2. 28号井戸跡 3. 1号道路状遺構調査風景 4. 1号道路状遺構（東から） 5. 1号道路状遺構（西から） 6・7. 1号道路状遺構掘り方
図版 7	城山遺跡第46地点 1. 2号住居跡出土遺物 2. 152～154号住居跡出土遺物
図版 8	城山遺跡第46地点 1. 156号住居跡出土遺物 2. 157号住居跡出土遺物
図版 9	城山遺跡第46地点 1. 155号住居跡・33号溝跡出土遺物 2. 井戸跡・ピット出土遺物 3. 土坑出土遺物
図版10	城山遺跡第46地点 333号土坑出土遺物
図版11	城山遺跡第46地点 1. 1号道路状遺構出土遺物 2. 遺構外出土遺物
図版12	城山遺跡第55地点 1. 表土剥ぎ風景 2. 357号土坑 3. 359号土坑 4. 158号住居跡遺物出土状態 5. 158号住居跡貯蔵穴 6. 158号住居跡カマド 7. 158号住居跡壁溝 8. 158号住居跡

図版13 城山遺跡第55地点

- 1・2. 159号住居跡遺物出土状態
3. 159号住居跡
4. 159号住居跡新旧壁溝
- 5・6. 160号住居跡遺物出土状態
7. 160号住居跡間仕切り溝
8. 159・160号住居跡掘り方

図版14 城山遺跡第55地点

1. 356号土坑堅坑部
2. 356号土坑（東から）
3. 356号土坑（西から）
4. 356号土坑（北から）
5. 356号土坑（南から）
6. 356号土坑主体部A
7. 358号土坑粘土出土状態
8. 358号土坑

図版15 城山遺跡第55地点

1. 359号土坑出土遺物
2. 158号住居跡出土遺物
3. 159号住居跡出土遺物

図版16 城山遺跡第55地点

1. 160号住居跡出土遺物
2. 33号溝跡出土遺物
3. 356号土坑出土遺物

図版17 城山遺跡第55地点

1. 358号土坑出土遺物
2. 遺構外出土遺物

図版18 出土した炭化種実

図版19 植物珪酸体

図版20 城山遺跡第55地点出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

# 第1章 平成15・16年度の調査成果

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km<sup>2</sup>、人口約6万8千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市域遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	60,990 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700 m <sup>2</sup>	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	45,100 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～後）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m <sup>2</sup>	林	古墳？	古墳？	なし	なし
7	西原大塚	163,100 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m <sup>2</sup>	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前）、中・近世	貝塚、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m <sup>2</sup>	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m <sup>2</sup>	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m <sup>2</sup>	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m <sup>2</sup>	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	10,700 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m <sup>2</sup>	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		463,090 m <sup>2</sup>					

平成19年12月20日 現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と調査地点－平成15年度－（1/20000）



第2図 市域の地形と調査地点－平成16年度－（1/20000）

名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡(12)、宿遺跡(14)、関根兵庫館跡(13)のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚の山古墳(6)、城山貝塚(9)を加えた14遺跡である(第1図)。

## (2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中道・西原大塚・中野・城山遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7(1995)年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第IV層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第IV層上部と第VII層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点と平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土しているのみである。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉(条痕文系)の10号住居跡が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡3軒(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2(1990)年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑も検出されている。特に西

原大塚遺跡では、住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡から、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土したことは、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

また、当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡から確認されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でそれぞれ1基を加えることにより、従来認識されていた集落跡と1つの単位的なまとまりをもって点在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土しているに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、現時点では西原大塚遺跡から継続し広がった集落跡ではない

かと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が検出されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかという見方が浮上している。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表する遺跡として挙げるることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆1点が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『<sup>たてむらきゅうき</sup>館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『<sup>かいこくざつ き</sup>廻回雑記』（註2）に登場する「<sup>おおいし</sup>大石



信濃守館しなののかみのやかたが「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」おおつかじゅうぎよくぼうについても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から掘立柱建築遺構4棟と人骨を伴う地下式坑が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要であろう。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

---



---

## 第2節 調査に至る経過

---



---

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木－池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く、開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺

第1章 平成15・16年度の調査成果

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m <sup>2</sup> )	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡	幸町3丁目 3163 他22筆	区画整理事業	2,751.00	-	H15.5.22~ 11.21	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
		幸町2丁目 3070 他14筆		595.00		12.2~ H16.2.9	
		幸町3丁目 3156-1		208.83		12.6~ 12.25	
		幸町2丁目 3026-1、4		120.37		H16.3.24 ~3.31	
2	城山遺跡 第46地点	柏町3丁目 2644-3・5	個人住宅建設	348.29	2.18	H15.2.28 ~4.30	後述 第2章参照
3	西原大塚遺跡 第85地点	幸町3丁目 3214	開発計画策定	458.26	4.15		盛土保存適用
4	中野遺跡 第62地点	柏町1丁目 1508-6	個人住宅建設	108.11	4.17		盛土保存適用
5	市場裏遺跡 第11地点	本町1丁目 2489-9	分譲住宅建設	89.49	5.7		遺構・遺物は検出されなかった
6	西原大塚遺跡 第86地点	幸町3丁目 3096-1 他	宅地造成	2,191.00	5.13		遺構・遺物は検出されなかった
7	西原大塚遺跡 第87地点	幸町3丁目 3116	分譲住宅建設	531.56	5.16		盛土保存適用
8	田子山遺跡 第84地点	本町2丁目 1686-8	個人住宅建設	101.53	5.20		盛土保存適用
9	西原大塚遺跡 第88地点	幸町3丁目 3136-3	個人住宅建設	70.72	5.27		遺構・遺物は検出されなかった
10	新邸遺跡 第8地点	柏町5丁目 3020の一部、3020-2	共同住宅建設	471.41	H14.6.7	6.16~8.6	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
11	西原大塚遺跡 第89地点	幸町3丁目 3235-1・2他2筆	個人住宅建設	235.96	6.26		盛土保存適用
12	西原大塚遺跡 第90地点	幸町3丁目 3133-17	個人住宅建設	59.39	7.22		遺構・遺物は検出されなかった
13	西原大塚遺跡 第91地点	幸町3丁目 3133-24	個人住宅建設	100.25	8.4		盛土保存適用
14	城山遺跡 第49地点	柏町3丁目 1137-12・13	擁壁工事	232.23	8.26		平成16年度に計画変更し、個人住宅建設に伴い発掘調査実施
15	西原大塚遺跡 第92地点	幸町4丁目 3377-14	個人住宅建設	100.00	9.4		盛土保存適用
16	城山遺跡 第50地点	柏町3丁目 2654-4	道路新設工事	199.54	-		盛土保存適用
17	城山遺跡 第51地点	柏町3丁目 2599-6	個人住宅建設	200.19	-		現地踏査9月16日 遺構・遺物は検出されなかつた
18	西原大塚遺跡 第94地点	幸町3丁目 3116-2、3117の一部他	耕地鍍取り、整地及びブロック土留工事	534.06	-		盛土保存適用
19	城山遺跡 第52地点	柏町3丁目 2654-7の一部	分譲住宅建設	300.42	10.14		盛土保存適用
20	西原大塚遺跡 第95地点	幸町3丁目 3158の一部	カーポート設置	23.57	-		工事立会い 10月24日 遺構・遺物は検出されなかつた
21	城山遺跡 第53地点	柏町3丁目 2654-5~7・12	宅地造成	771.53	11.12		盛土保存適用
22	西原大塚遺跡 第96地点	幸町2丁目 3038-1	共同住宅建設	172.86	11.26		盛土保存適用
23	西原大塚遺跡 第97地点	幸町2丁目 3076の一部	個人住宅建設	140.36	12.4		盛土保存適用
24	西原大塚遺跡 第98地点	幸町3丁目 3133-33	個人住宅建設	100.25	H16.1.9		盛土保存適用
25	西原大塚遺跡 第99地点	幸町2丁目 3048	農業用倉庫	82.81	H15.12.19		遺構・遺物は検出されなかつた
26	西原大塚遺跡 第100地点	幸町2丁目 3039-1、2、4の一部	個人住宅建設	217.86	12.24		盛土保存適用
27	中野遺跡 第63地点	柏町1丁目 1518-20、21	個人住宅建設	204.64	H16.2.2		盛土保存適用

第2表 平成15年度調査地点(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m <sup>2</sup> )	確認調査日	調査期間	備考
28	田子山遺跡第85地点	本町2丁目 1707-6	個人住宅建設	339.97	2.13		盛土保存適用
29	富士前遺跡第22地点	本町3丁目 1803-1	個人住宅建設	168.08	—		現地踏査 2月9日 遺構・遺物は検出されなかった
30	田子山遺跡第86地点	本町2丁目 1750-14	個人住宅建設	84.61	3.29		盛土保存適用
31	西原大塚遺跡第101地点	幸町3丁目 3162-1、2の各一部	個人住宅建設	114.25	3.25		盛土保存適用
合 計				12,428.40			

第2表 平成15年度調査地点(2)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m <sup>2</sup> )	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡	幸町2丁目3070-1・2	区画整理事業	114.00	—	5.27～ 6.11	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
		幸町3丁目3102-1		86.00		H17.2.14 ～2.18	
2	西原大塚遺跡第102地点	幸町3丁目3116-3・4・ 5、3379-3の一部	個人住宅建設	210.84	4.12		遺構・遺物は検出されなかった
3	西原大塚遺跡第103地点	幸町2丁目 3048	個人住宅建設	154.12	4.30		遺構・遺物は検出されなかった
4	西原大塚遺跡第104地点	幸町2丁目 3040-11	個人住宅建設	89.06	6.2		盛土保存適用
5	大原遺跡第4地点	本町4丁目 1016-7	分譲住宅建設	90.30	—		現地踏査 6月1日 遺構・遺物は検出されなかった
6	西原大塚遺跡第105地点	幸町3丁目 3119の一部	個人住宅建設	189.41	7.21		盛土保存適用
7	西原大塚遺跡第106地点	幸町4丁目3381-5、 3389-2の各一部	共同住宅建設 及び駐車場	768.00	7.26		盛土保存適用
8	城山遺跡第54地点	柏町3丁目 2629-3	個人住宅建設	122.70	8.11		盛土保存適用
9	田子山遺跡第87地点	本町2丁目 1746-7	分譲住宅建設	92.00	8.27		遺構・遺物は検出されなかった
10	中道遺跡第61地点	柏町5丁目 2986-4・8	道路建設工事	132.67	9.24		盛土保存適用
11	西原大塚遺跡第107地点	幸町4丁目 3377-20	個人住宅建設	102.76	9.29		遺構・遺物は検出されなかった
12	城山遺跡第55地点	柏町3丁目 2644-1	個人住宅建設	115.10	10.8	10.12～ 12.1	後述 第3章参照
13	西原大塚遺跡第108地点	幸町3丁目 3140-1	(仮称)志木市生涯 学習センター建設	2,071.73	10.21～25		発掘調査未定
14	田子山遺跡第88地点	本町3丁目 1827-8	共同住宅建設	110.49	11.4		盛土保存適用
15	西原大塚遺跡第109地点	幸町3丁目 3106-6	共同住宅建設	315.69	11.19		盛土保存適用
16	城山遺跡第49地点	柏町3丁目 1137-12	個人住宅建設	132.21	H15.8.26	H17.1.11 ～2.3	発掘調査は教育委員会が実施したが、報告書刊行は次号予定
17	西原大塚遺跡第110地点	幸町4丁目 3388他	共同住宅建設	1,927.41	H16 12.7・8	H17.2.14 ～3.10	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
18	西原大塚遺跡第111地点	幸町3丁目 3140-3の一部	消防団車庫建設	80.00	H16 10.21	H17.1.17 ～1.29	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
19	中道遺跡第62地点	柏町5丁目 2986-5～7	分譲住宅建設	626.99	11.25		盛土保存適用
20	田子山遺跡第89地点	本町2丁目 1733-19	分譲住宅建設	46.82	11.26		遺構・遺物は検出されなかった
21	馬場遺跡第3地点	下宗岡1丁目 1942-1	店舗建設	481.85	—		現地踏査 12月10日 遺構・遺物は検出されなかった
22	西原大塚遺跡第112地点	幸町3丁目3120、 3133-33の各一部	分譲住宅建設	212.20	H17 1.13		盛土保存適用
23	西原大塚遺跡第113地点	幸町2丁目3038-1・3・ 13の各一部	個人住宅建設	119.75	H17 1.21	H17.2.4 ～2.15	発掘調査は教育委員会が実施したが、報告書刊行は次号予定
合 計				8,392.10			

第3表 平成16年度調査地点

跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査である。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって初の大規模調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要がある。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数は逆に過去最高の8件を越え9件にのぼり増加したという現象が生じた。これは、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の保存を目的とした盛土保存を導入するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見せている。これは、平成5年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されているが、工事の完了により周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大されることが必至であろうと予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、平成15年1月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図るものであった。

平成15年度は、31件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調

査は1件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は2件である。なお、盛土保存を適用したのは18件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅17件、分譲住宅建設3件、共同住宅2件、宅地造成2件、区画整理事業1件、農業用倉庫建設1件、開発計画策定1件、カーポート設置1件、自転車置場設置1件、道路建設工事1件、擁壁工事1件、耕作鋤取り、整地及びブロック土留工事1件である。

平成16年度は、23件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は3件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は3件である。なお、盛土保存を適用したのは9件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅9件、分譲住宅5件、共同住宅4件、区画整理事業1件、道路建設工事1件、店舗建設1件、(仮称)志木市生涯学習センター建設1件、消防団車庫建設1件である。

註1 『館村旧記』は、館村(現在の志木市柏町・幸町・館)の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14(1727～1729)年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年(1486)6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

## 第2章 城山遺跡第46地点の調査

### 第1節 遺跡の概要

#### (1) 立地と環境

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めると、現況は住宅地を主としているが、小学校・神社・墓地などが存在することから、市内の台地上では比較的緑地を多く残している地区と言える。平成13年の第42地点の大規模開発以後、平成18・19年度には福祉施設建設に伴う第58・60地点の発掘調査が実施され、今後も開発計画は増加するものと見られる。

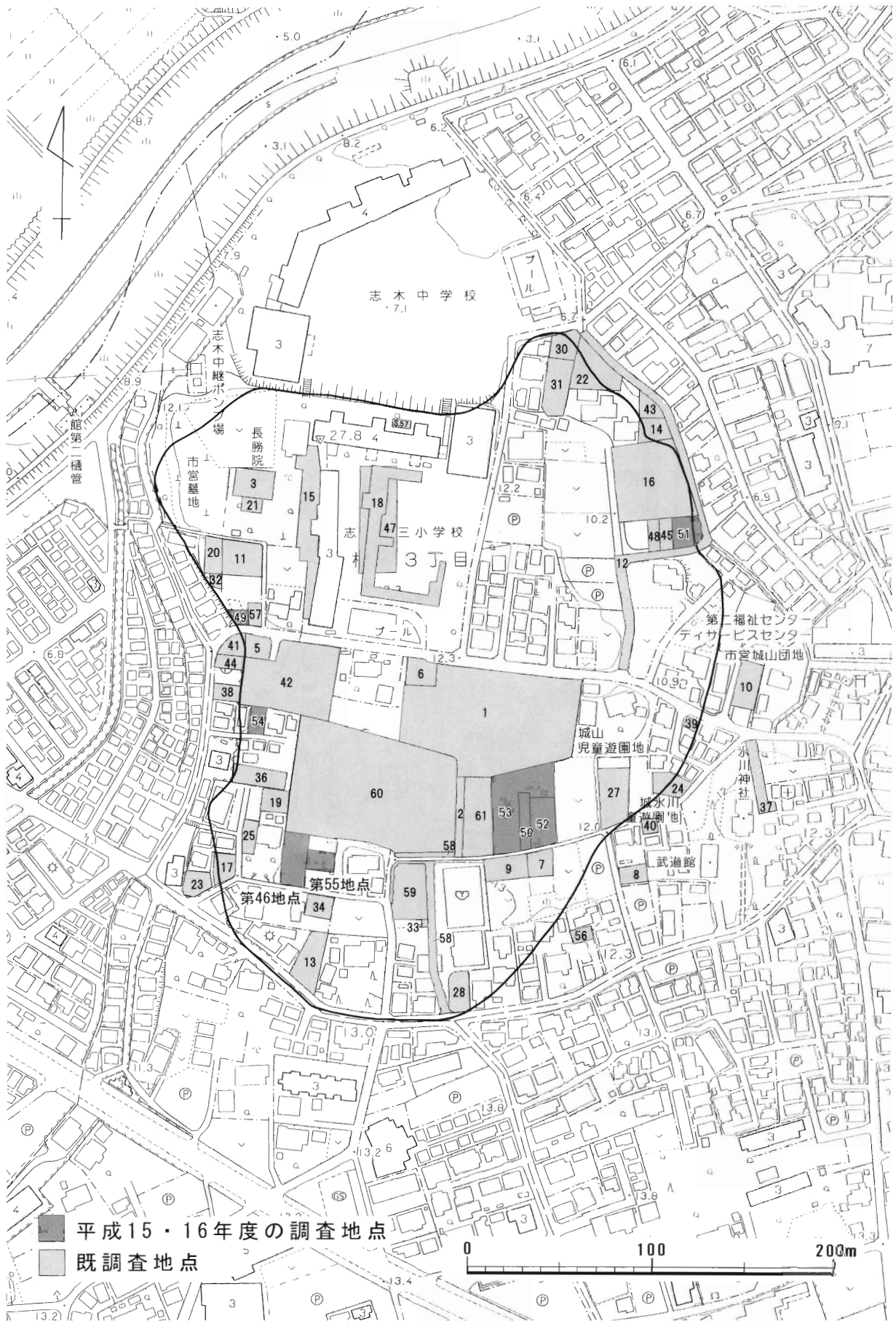
本遺跡は、今までの調査から、旧石器時代、縄文時代草創期～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

#### (2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成14年2月18日に実施した。調査区長軸ほぼ南北方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代後期のものと思われる住居跡3軒を確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、基礎底盤には杭を打ち込み地盤改良を行うため、計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

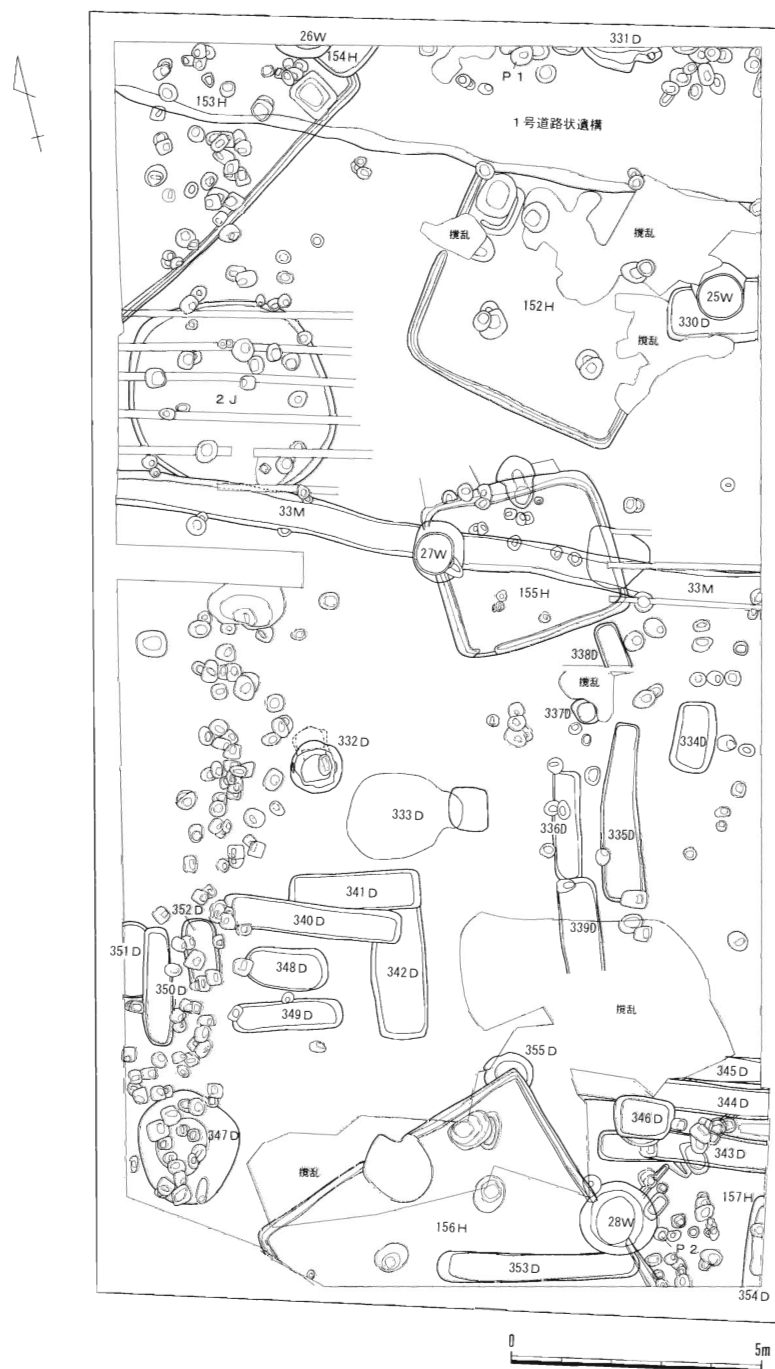
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第4表の発掘調査工程表に示した。

- 2月28日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。今回の調査は調査区を二分し、前半に調査区北半部、後半に南半部を実施する予定である。調査区北端から表土剥ぎを行い、北半部全体の表土剥ぎ作業を終了した。残土置場は南半部を当てることにした。
- 3月3日 人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区北端には道路状遺構（1道）が東西方向に延びており、その南側には古墳時代後期の住居跡や平安時代の住居跡・溝跡、中世以降の土坑・井戸跡など多くの遺構が分布していることが明らかになった。同日には1道の精査を開始する。
- 3月上旬 調査区北側の1道、古墳時代後期の住居跡（152・153H）、井戸跡（25W）、近世の土坑（330・331D）を中心に精査を行う。
- 3月中旬 溝跡（33M）西半部、縄文時代前期の住居跡（2J）の精査を開始する。153・154H、26Wの精査を終了する。
- 3月22日 25日まで調査区の反転作業を行う。
- 3月26日 人員導入による南半部の調査を開始する。
- 3月下旬 33M東半部、平安時代の住居跡（155H）の精査を開始する。33Mは155Hを切って構築さ



第3図 周辺の地形と調査地点 (1/3000)

平成19年12月20日現在



第4図 遺構分布図 (1/150)



れている。

4月上旬 中世以降の土坑を中心に精査を行う。そのうち、332・333Dは地下室の形態であった。特に333Dからは陶磁器・石製品・瓦など多くの遺物が出土した。

4月中旬 引き続き中世以降の土坑を中心に精査を行う。155Hの精査を終了し、156・157Hの精査を開始する。

4月25日 午前中、156Hのカマド実測・写真撮影を終了し、すべての調査を終了する。午後からは器材搬出作業を行い、片付け終了。

4月28・30日 埋戻し完了。

	平成15年2月	3月	4月
表土剥ぎ作業	2.28		
反転作業		3.22	
2 J		3.13	
1 道	3.3		
152H	3.4		
153H	3.7		
154H		3.13	
155H		3.27	
156H			4.14
157H			4.11
33M		3.13	3.26
25W	3.4		
26W		3.14	
27W			3.26
28W			4.10
330D	3.4		
331D		3.11	
332D			3.27
333D			4.1
334D			4.3
335D			4.3
336D			4.3
337D			4.3
338D			4.4
339D			4.4
340D			4.10
341D			4.10
342D			4.9
343D			4.9
344D			4.10
345D			4.10
346D			4.10
347D			4.11
348D			4.14
349D			4.14
350D			4.14
351D			4.14
352D			4.14
353D			4.16
354D			4.21
355D			4.23
埋戻し作業			4.28

第4表 城山遺跡第46地点の発掘調査工程表

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 概要

縄文時代の遺構は、住居跡1軒(2J)・土坑1基(355D)が検出された。2Jは出土遺物から前期末葉のものと思われ、当該時期の住居跡は本市では2例目となる。355Dについては、出土遺物はなかったが、覆土の観察より縄文時代の遺構として判断した。

### (2) 住居跡

#### 2号住居跡

##### 遺構(第5図)

[住居構造] 33Mに切られる。また、トレンチャーによって6本の溝状に攪乱されている。(平面形)不整形(隅丸五角形?)。(規模)径約4m。(壁高)残りの良いところで20cmを測る。(壁溝)検出されなかった。(床面)直床で、著しい硬化は見られない。(炉)地床炉。住居内の南東寄りに位置する。炉床部は被熱により赤化・硬化する。(柱穴)確認できなかった。(覆土)13層に分層される。

[遺物] 覆土中より土器・石器が出土した。

[時期] 縄文時代前期末葉。

##### 遺物(第6・7図、第5・6表)

##### 石器(第6図、第5表)

本住居跡から出土した石器は全点数30点で、実測点数はそのうちの接合資料を含め11点であった。

1は石核、2・4～8は剥片、9はR. F、10は片岩製石器、11は打製石斧である。石材は1～8が黒曜石、9はチャート、10は片岩、11は砂岩である。

##### 土器(第7図、第6表)

諸磯式や十三菩提式と思われる破片など、前期末葉を中心とした土器片が出土している。

12・13は早期条痕文系の土器片である。混入品。

14・15は、縄文のみを有する土器片で、14は羽状縄文。

16・17は半截竹管によって沈線文が施文される。

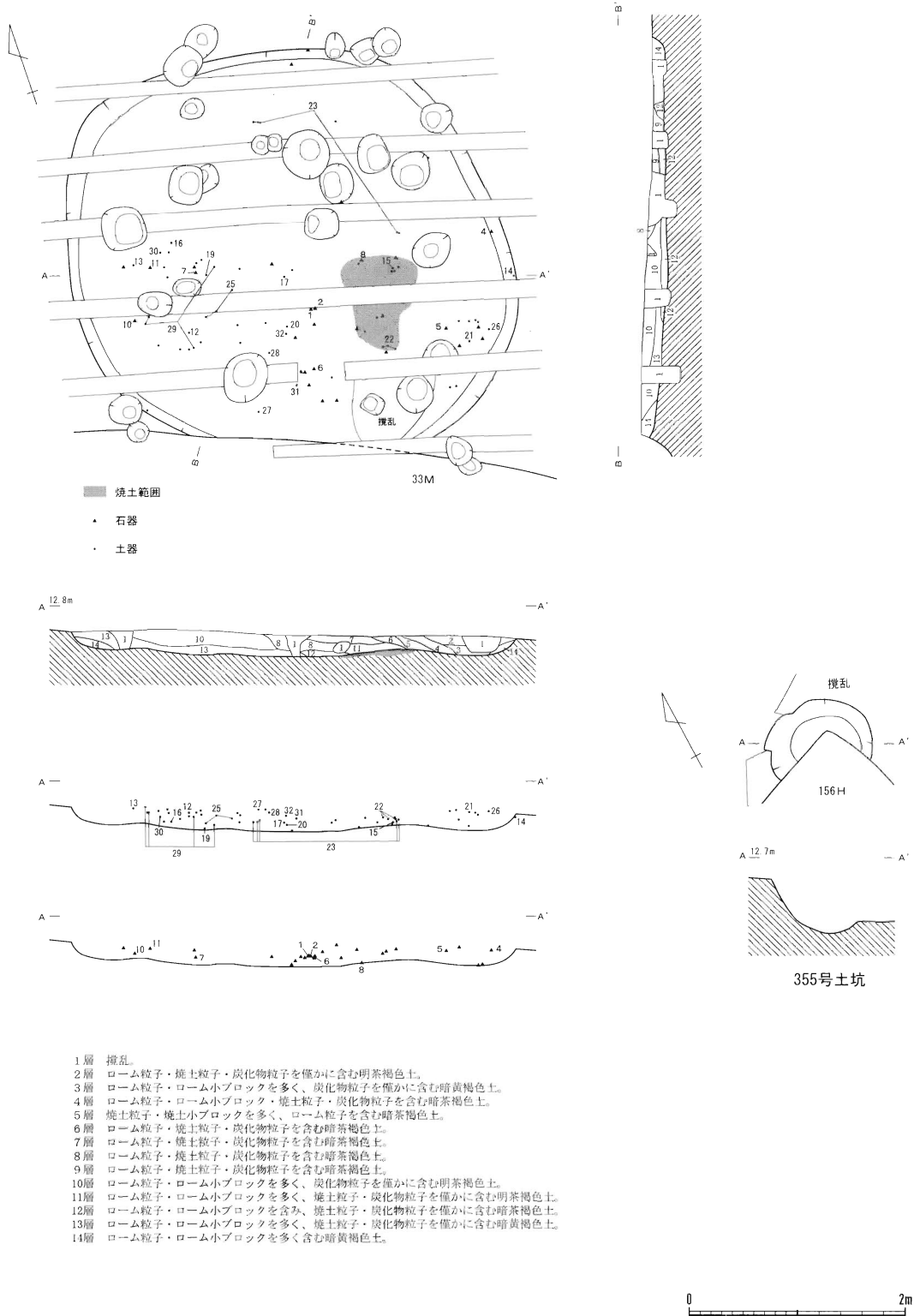
22は口唇部外面に隆帯を沿わせる。また隆帯で弧状文様を描き、その隆帯上に半截竹管によって連続した刺突文を施文する。

23・24は、縄文の地文に半截竹管の押し引きによって連続した爪形文が施文され、23には小さく三角陰刻文も施文される。

25は口縁部をやや幅広く肥厚させ、その外面に細く深い沈線で菱形の文様を描出し、その間を菱形や三角形に陰刻する。胴部は横位の半截竹管による結節沈線を全面施文し、部分的に竹管の幅と同大の三角陰刻文を施す。

26・27は小片で詳細は不明だが、半截竹管による沈線が密に施文され、前期末から中期初頭の所産と思われる。28は口縁部外周に深く深い沈線を巡らせ器面には横位の平行沈線を施文する。

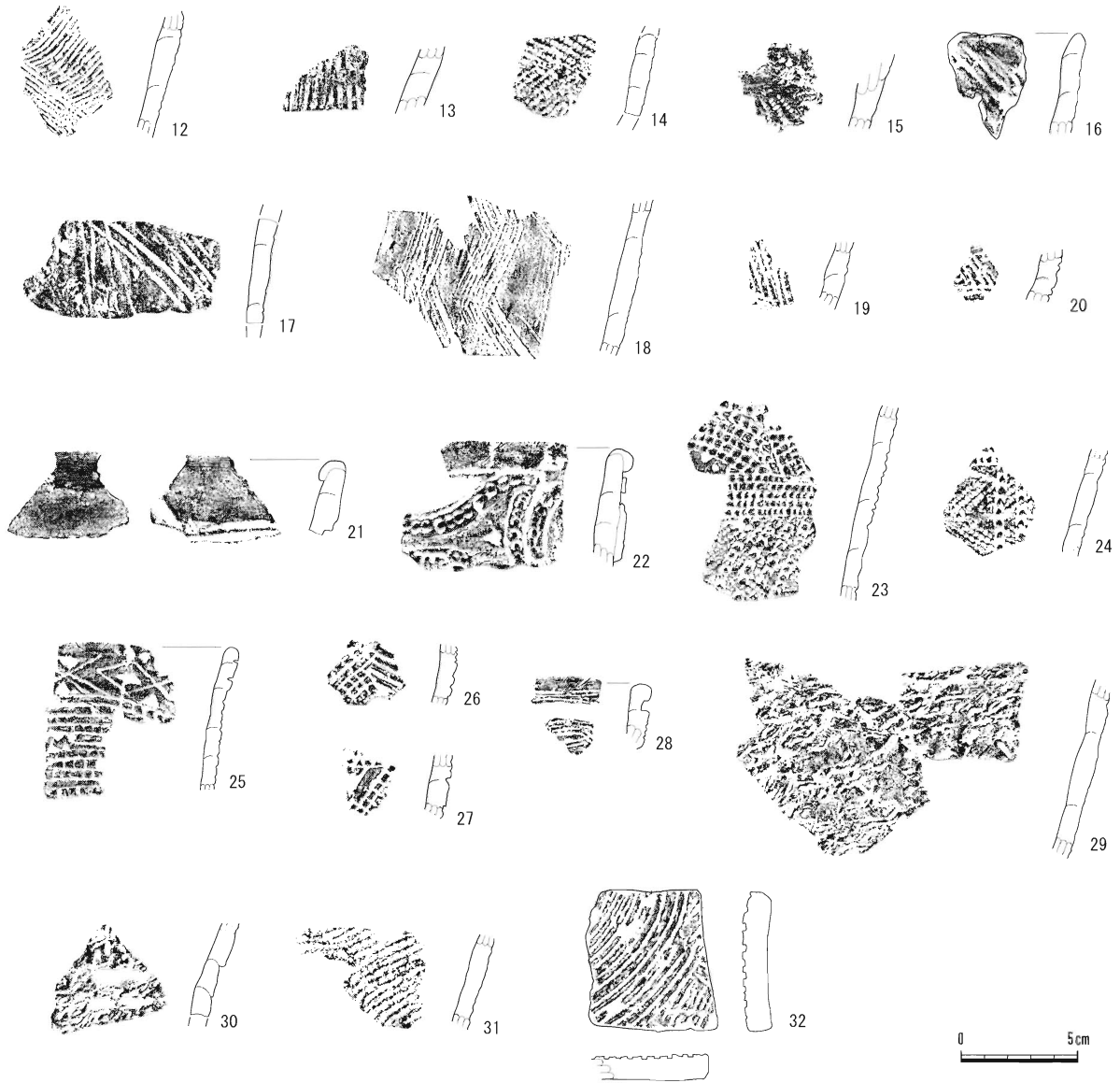
29・30は同一個体と思われる。輪積痕を残し、横位に結節文が施文される土器片である。土器型式は不明であるが、その文様の構成要素から考えて前期末～中期初頭の所産と思われる。31は中期前半の阿



第5図 2号住居跡・355号土坑 (1/60)



第6図 2号住居跡出土遺物1 (2/3・1/3)



第7図 2号住居跡出土遺物2 (1/3)

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	備考
第6図1	石核	黒曜石	21.12	23.10	24.87	11.5	完形	
第6図2	剥片	黒曜石	26.79	17.71	10.83	3.2	完形	
第6図3	接合	黒曜石	—	—	—	—		1+2の接合
第6図4	剥片	黒曜石	29.66	17.25	7.29	2.1	上部欠損	
第6図5	剥片	黒曜石	26.40	19.46	8.54	2.2	左側縁欠損	
第6図6	剥片	黒曜石	18.78	13.25	7.01	1.0	完形	
第6図7	剥片	黒曜石	18.14	15.10	3.68	0.5	完形	
第6図8	剥片	黒曜石	20.08	12.65	5.52	1.0	完形	
第6図9	R.F	チャート	21.84	30.66	8.75	4.6	完形	
第6図10	片岩製石器	片岩	67.38	43.93	6.49	27.9	欠損	
第6図11	打製石斧	砂岩	77.17	65.46	24.15	135.4	刃部欠損	

第5表 2号住居跡出土石器一覧

(単位：mm・g)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	胎土混入物					備考
			外面	内面		石	角	礫	砂	他	
第7図12	胴	貝殻条痕文	赤褐	褐	条痕文系			○	○	片	
第7図13	胴	貝殻条痕文	赤褐	赤褐	条痕文系	○			○	織	
第7図14	胴	L R縄文	明褐	灰褐	諸磯				○	白	
第7図15	胴	R L縄文	明褐	明褐	諸磯	○			○		
第7図16	口縁	半截竹管による沈線文／補修孔あり	暗褐	暗褐	諸磯 b				○		17と同一個体
第7図17	胴	半截竹管による沈線文	暗褐	暗褐	諸磯 b				○		16と同一個体
第7図18	胴	半截竹管による縦位の鋸歯状の沈線文	灰褐	明褐	諸磯 c	○			○		
第7図19	胴	平行沈線文	黒褐	黒褐	諸磯 c				○		20と同一個体か
第7図20	胴	平行沈線文	赤褐	黒褐	諸磯 c				○		19と同一個体か
第7図21	口縁	沈線／三角陰刻文／口唇部内側に折り返し	明褐	黒褐	十三菩提				○		
第7図22	口縁	口唇部外面に隆帯／隆帯による曲線文上に半截竹管による連続刺突文／三角陰刻文	暗褐	暗褐	十三菩提	○		○	○		
第7図23	胴	結節沈線文／L R羽状縄文／三角陰刻文	黒褐	赤褐	十三菩提		○		○	白	24と同一個体
第7図24	胴	結節沈線文／L R羽状縄文	黒褐	赤褐	十三菩提		○		○	白	23と同一個体
第7図25	口縁	肥厚させた口縁部に細沈線による菱形文／結節沈線／三角陰刻文	黒褐	黒褐	前期末～中期中頭				○	金	
第7図26	胴	半截竹管による沈線文／集合沈線	褐	褐	前期末～中期中頭				○		
第7図27	胴	半截竹管による沈線文／集合沈線／三角陰刻文	褐	赤褐	前期末～中期中頭				○		
第7図28	口縁	口唇部直下に太い沈線を巡らせる／集合沈線	黒褐	黒褐	前期末～中期中頭			○	○		
第7図29	胴	横位の結節文／輪積み痕	灰褐	明褐	前期末～中期中頭				○		30と同一個体か
第7図30	胴	横位の結節文／輪積み痕	明褐	明褐	前期末～中期中頭				○		29と同一個体か
第7図31	胴	L縄文	赤褐	黒褐	阿玉台	○			○	雲	
第7図32	—	土版か／長さ6.0cm・幅5.0cm・厚さ1.1cm・重さ51g／半截竹管による同心円状の沈線文／面取り加工／大型鉢の破片の転用品であろうか	赤褐	赤褐	諸磯 c ?				○		

※石：石英 角：角閃石 礫：細礫 砂：砂粒 片：片岩 織：繊維 白：白色粒子 金：金雲母 雲：雲母

第6表 2号住居跡出土土器一覧

玉台式土器と思われ、無節のL縄文を有する。混入品であろう。

32は半截竹管による同心円状の沈線文を有する土製品（土版か？）で、側面の3面はていねいに平滑に仕上げられている。残り一面は欠損しており加工の有無は不明である。大きさは6.0cm×5.0cm・厚み1.1cm・重さ51g。ごくゆるやかに湾曲しており、大型の鉢形土器の破片を転用したものと考えられる。

### (3) 土 坑

#### 355号土坑

##### 遺 構 (第5図)

[構造] 156Hに切られ、上面の多くを攪乱される。断面形は掘り鉢状と思われる。(平面形) 円形。(規模) 径約100cm。(深さ) 50cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察より縄文時代と見られるが、詳細な時期については不明である。

## 第3節 古墳時代中・後期の遺構と遺物

### (1) 概要

古墳時代中・後期の遺構は、住居跡5軒（152～154・156・157H）が検出された。住居跡の分布は調査区全域に広がっているが、全体に後世の遺構やカクランによる破壊を受けているものが多く、遺存状態は良いとは言えない。時期は153Hが5世紀中葉、154Hが5世紀後葉、152Hは7世紀前葉、157Hは7世紀中葉、156Hは7世紀後葉に位置付けられる。

### (2) 住居跡

#### 152号住居跡

##### 遺構（第8図）

〔住居構造〕住居の東側は1道・330Dと攪乱により壊されている。（平面形）方形。（規模）不明×4.70m。（壁高）5～16cmを測る。（壁溝）カマドを除いて全周すると思われる。上幅14～22cm・下幅5～8cm・深さ11～14cmを測る。（床面）住居中央部が、よく硬化していた。（カマド）北西壁に位置するが、ほとんど壊されているため詳細は不明である。（柱穴）支柱穴と思われるものが4本確認され、北側以外は重複形態をとる。（貯蔵穴）北西壁の北側に偏って位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は90×72cm、深さ52cmを測る。覆土は上層がローム粒子・炭化物粒子・白色粘土含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土ブロックを含む黒褐色土を基調とする。下層より土器片が多く出土している。南側に2～4cmの高さの凸堤が確認できた。（覆土）ローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕土師器坏・甕・甑、ミニチュア土器、ガラス小玉が出土した。その他、炭化種実（イネ・オオムギ・ムギ類）が出土している（付編参照）。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀前葉）。

##### 遺物（第9図、図版7-2-7、第7表）

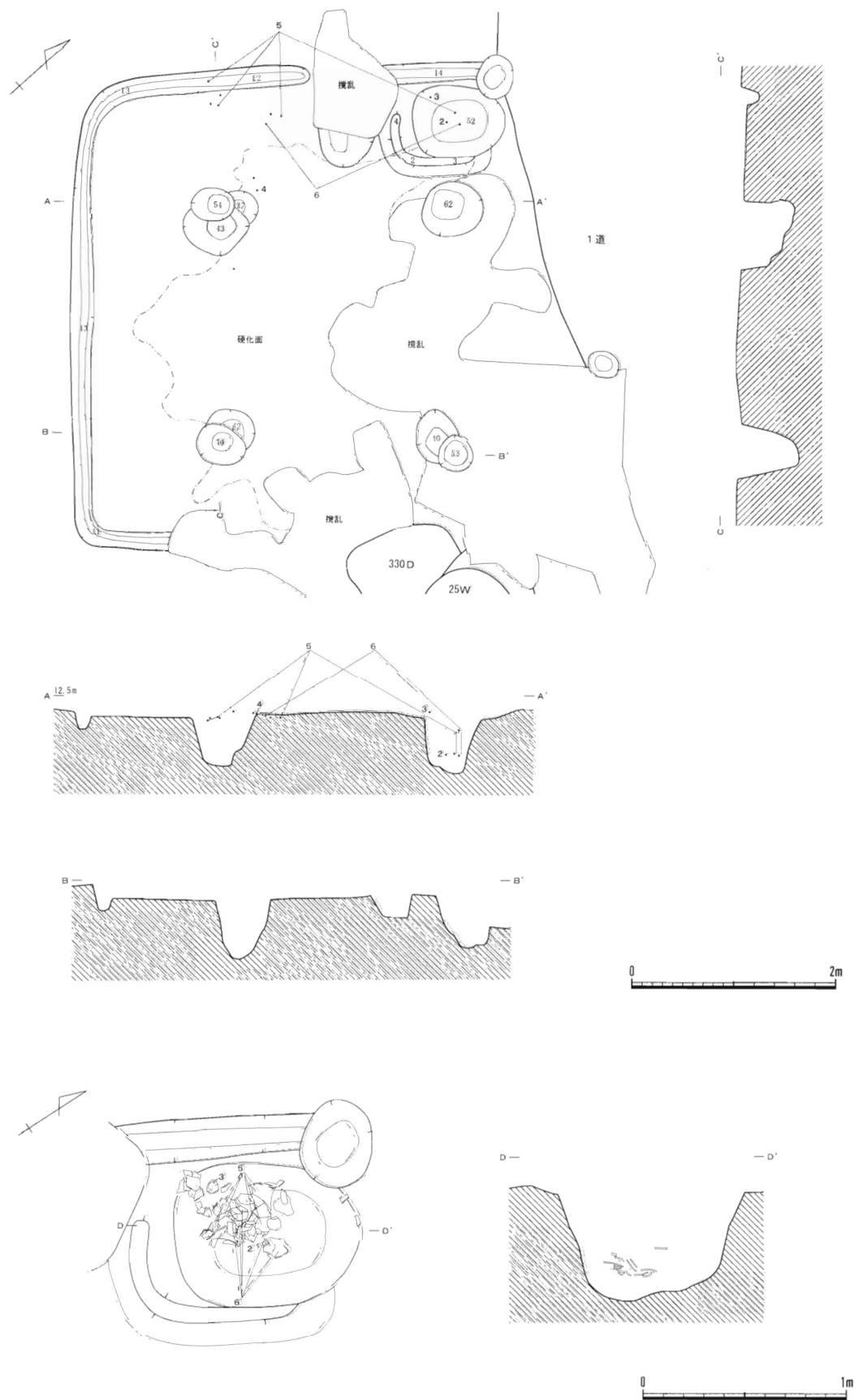
1はミニチュア土器、2～4は土師器坏、5は土師器甕、6は土師器甑、7はガラス小玉である。

#### 153号住居跡

##### 遺構（第10図）

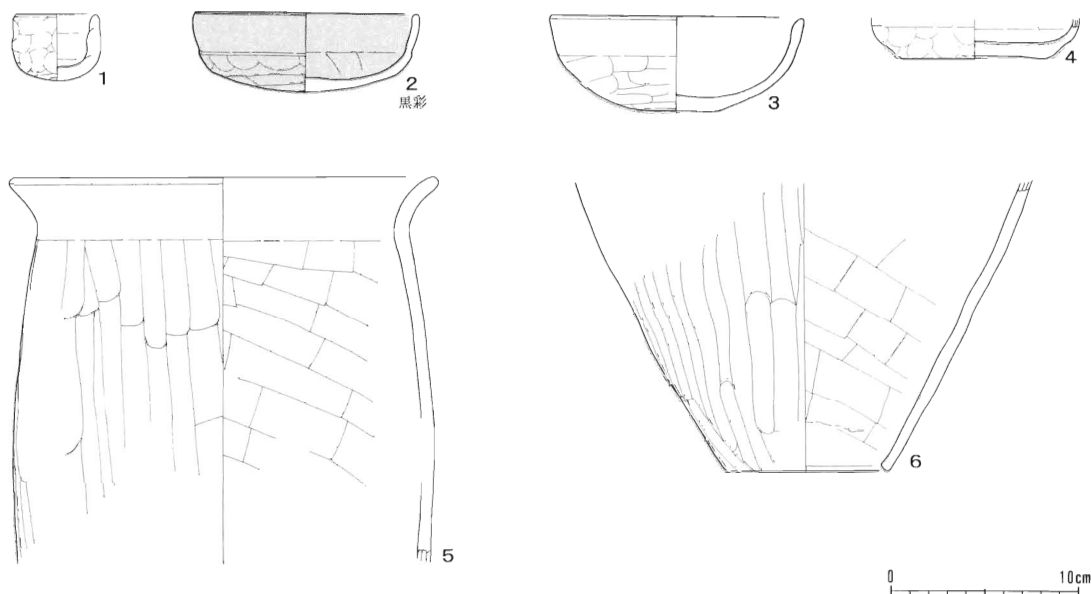
〔住居構造〕南壁以外は調査区域外であり、さらに1道・26W・154Hに切られているため、詳細は不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。（壁高）18～25cmを測る。（壁溝）確認できた範囲では巡らされていた。上幅16～20cm・下幅6～8cm・深さ8～17cmを測る。（床面）図示した部分がよく硬化しており、貼床は2～28cmの厚さで施されていた。（炉）調査区域北側の良く焼けた箇所が炉の可能性はある。（柱穴）ほとんどが後世の物と思われるが、貯蔵穴西側の重複した深さ43・48cmのものが支柱穴、その西側の深さ32cmのものが入口関連の柱穴と考えられる。（貯蔵穴）南東壁の東コーナーに偏って位置し、平面形は長方形を呈する。規模は80×70cm、住居床面からの深さ104cmを測る。覆土は9層に分層される。上部は1道により壊されている。（覆土）8層に分層される。

〔遺物〕土師器坏・埴・壺、土製品が出土した。



第8図 152号住居跡 (1/60・1/30)





第9図 152号住居跡出土遺物 (1/4)

[時期] 古墳時代中期 (5世紀中葉)。

**遺物** (第10図、第8表)

1は土師器坏、2は土師器埴、3は土師器壺、4は土製品で支脚であろうか。

#### 154号住居跡

**遺構** (第11図)

[住居構造] 大部分が調査区域外で、南コーナーのみの検出である。153Hを切り、1道・26Wに切られる。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 17cmを測る。(壁溝) 確認できなかった。(覆土) 4層に分層される。

[遺物] 土師器坏・壺の破片が出土した。

[時期] 古墳時代後期 (5世紀後葉)。

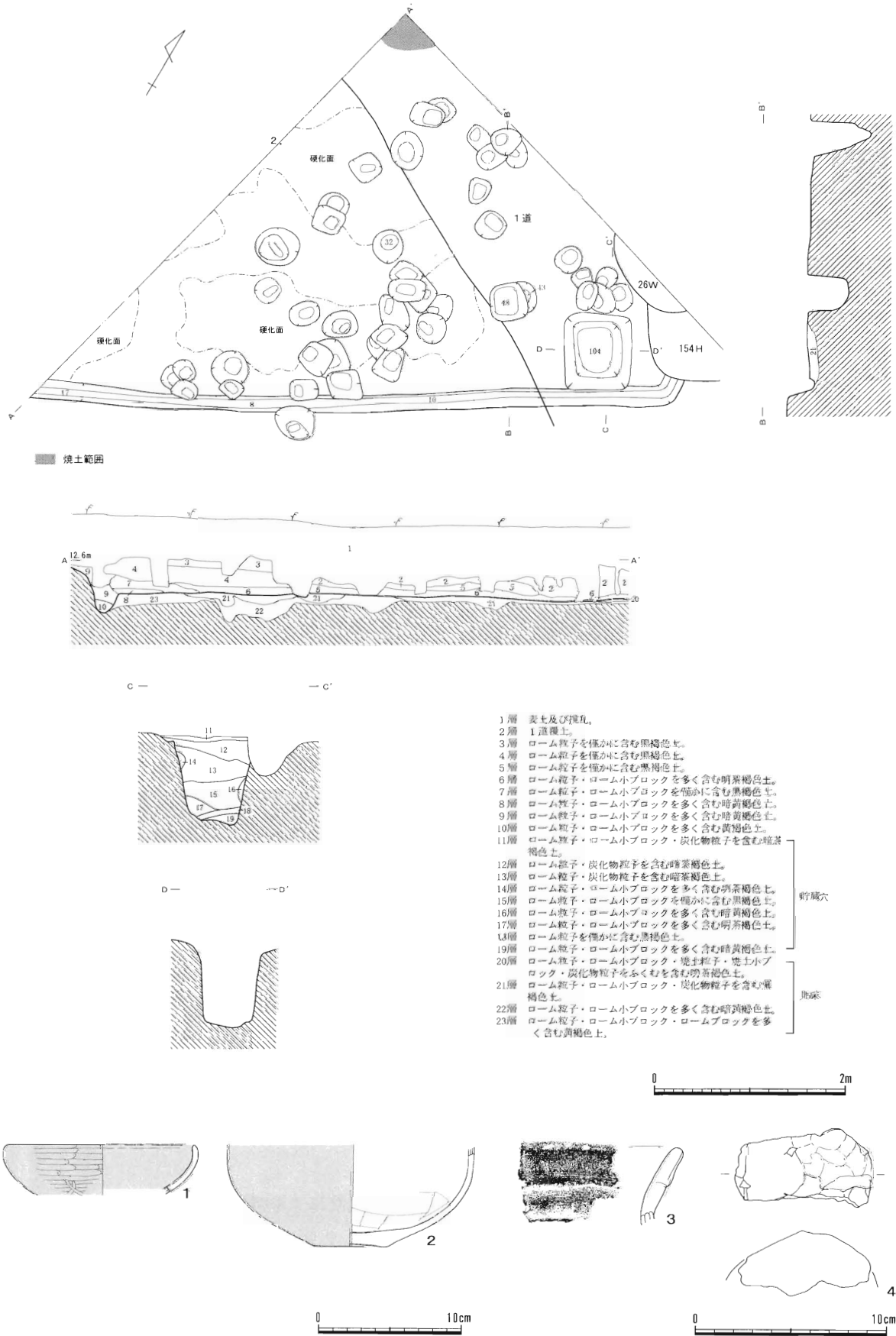
**遺物** (第11図、第9表)

1は土師器坏、2は土師器壺である。

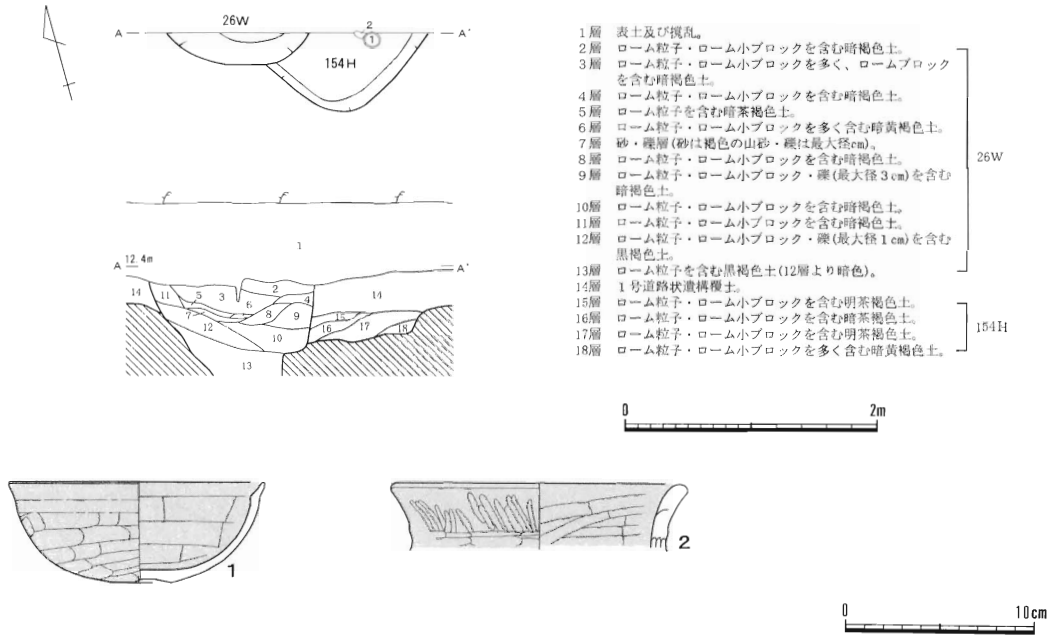
#### 156号住居跡

**遺構** (第12~14図)

[住居構造] 住居の南側は調査区域外であり、北側の上部は攪乱により壊されている。157H・355Dを切り、28W・353Dに切られる。(平面形) 方形。(規模) 不明×6.20m。(壁高) 残りのよい部分では56~61cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲ではカマドを除いて巡らされていた。上幅16~24cm・下幅6~12cm・深さ12~19cmを測る。(床面) カマド付近がよく硬化しており、貼床は2~12cmの厚さで施されていた。(カマド) 北壁のほぼ中央に位置し、主軸方位N-17°-W。長さ120cm・幅110cm・壁への掘り込み27cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に白色粘土を



第10図 153号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)



第11図 154号住居跡・26号井戸跡・154号住居跡出土遺物 (1/60・1/4)

被覆し天井部と共に構築されていたと思われる。一部赤化した粘土が確認できた。煙道は75°程の勾配で立ち上がっている。燃焼部は前面の掘り方を20cm程埋め戻してあった。(柱穴) 支柱穴は4本と思われるが、そのうちの2本のみが検出された。深さ59・67cmを測る。(貯蔵穴) 北壁のカマドと北東コーナーの中間に位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は86×62cm、深さ60cmを測る。東側に高さ2cmの凸堤があり、さらに深さ18cm・幅14cm程の段を有する。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 15層に分層される。貯蔵穴東側の床上から、柔らかい白色粘土が検出された。

[遺物] 住居全体から多数の土器が出土した。その他、炭化種実(モモ)1点が出土した(付編参照)。

[時期] 古墳時代後期(7世紀後葉)。

[所見] 北西コーナー付近から焼土が検出され、さらに覆土中から炭化材も検出されていることから焼失住居の可能性がある。

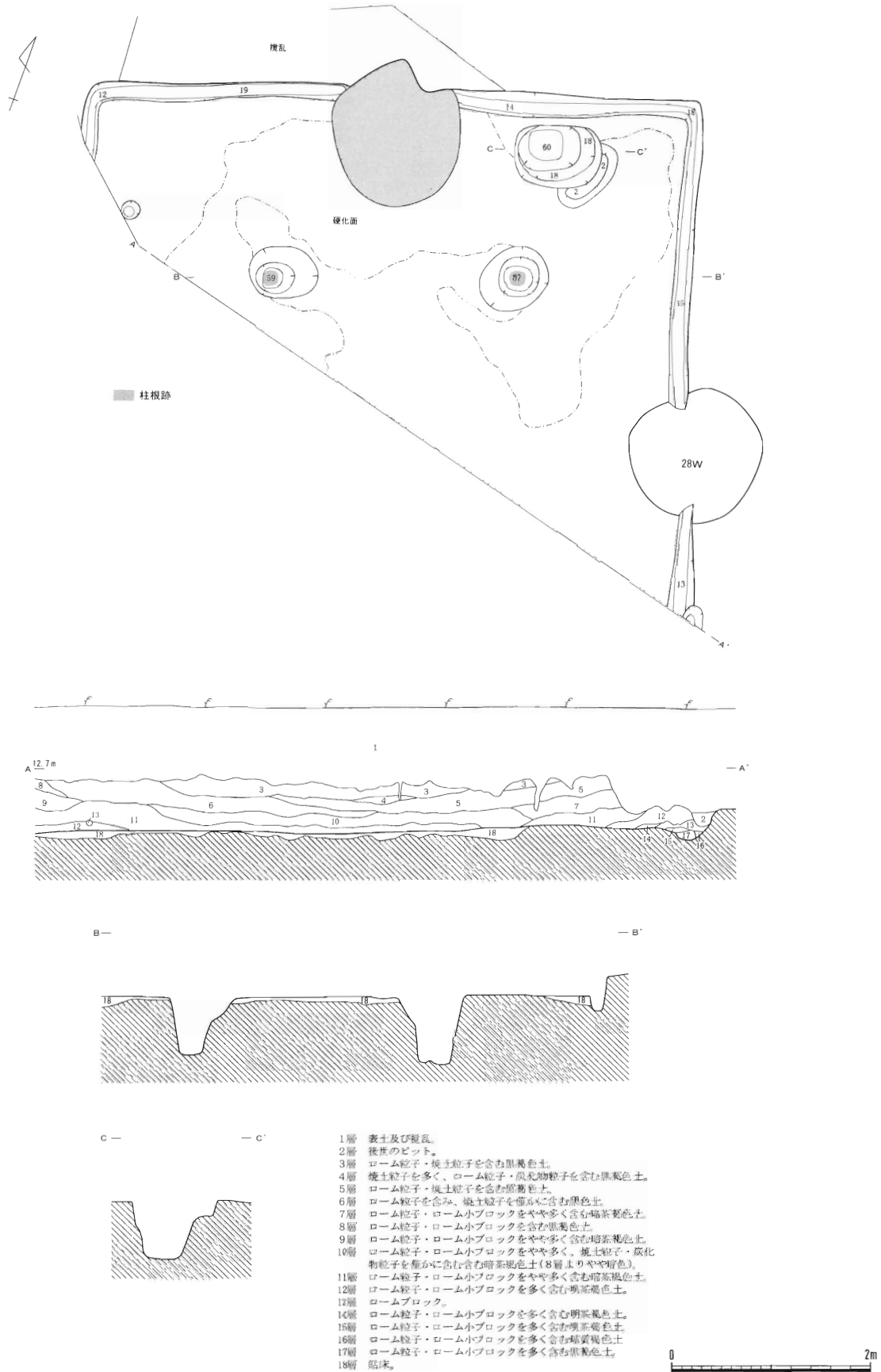
**遺物** (第15図、第10表)

1・2は土師器坏、3・4は須恵器甕、5～11は土師器甕、12・13は土製品(支脚)である。

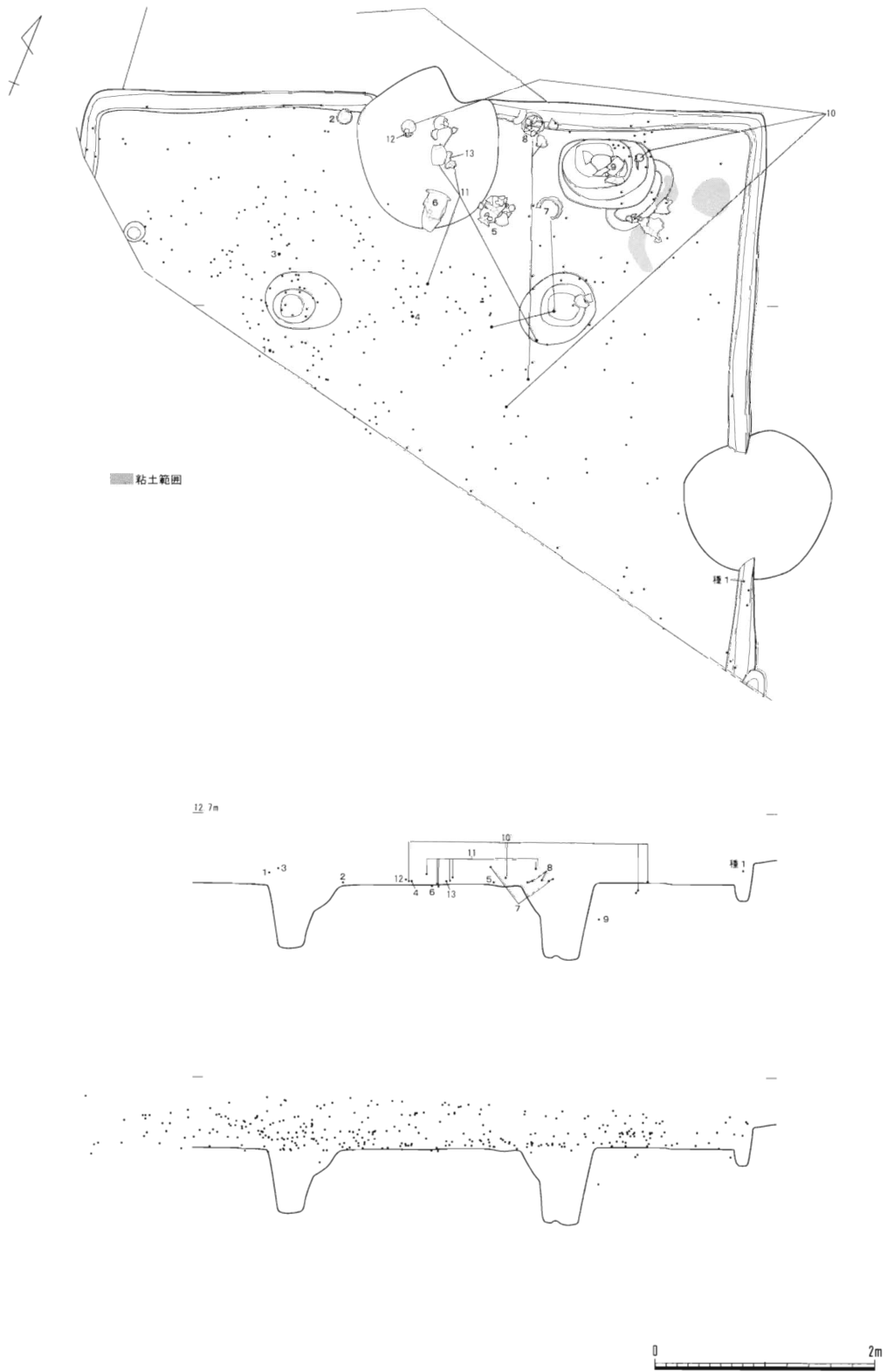
**157号住居跡**

**遺構** (第16図)

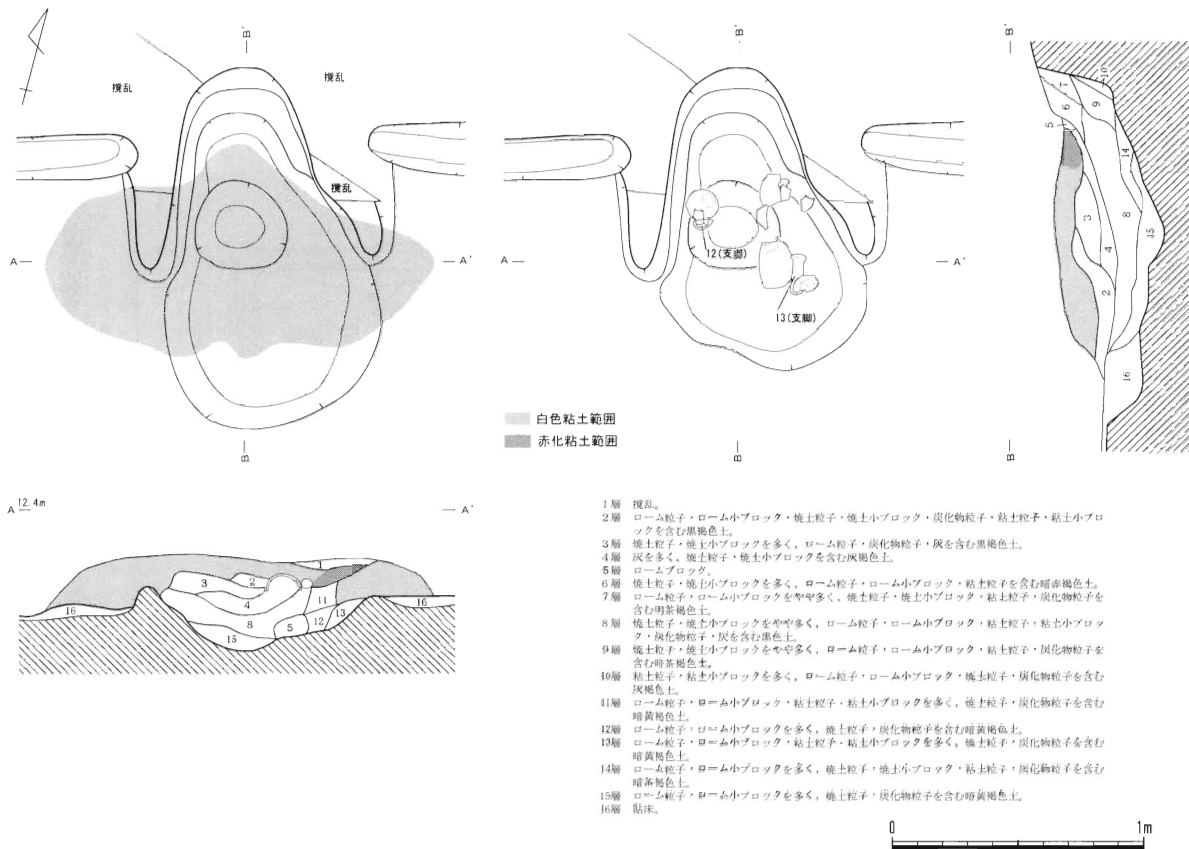
[住居構造] 南側は調査区域外であり、156H・28W・343・344・354Dに切られているため、詳細は不明である。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 27cmを測る。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅10～16cm・下幅5cm・深さ5cmを測る。(床面) カマド前面に硬化した面が確認できた。(カマド) 北壁に位置し、主軸方位はN-26°-W。後世の土坑に壊されており、詳細は不明であるが袖部はロームの上に粘土を被覆して天井部と共に構築されていたと思われる。被熱により赤化した粘土



第12図 156号住居跡 (1/60)



第13図 156号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第14図 156号住居跡カマド (1/30)

も検出された。燃焼部は良く焼けていた。(柱穴)ほとんどが後世のもので、主柱穴は貯蔵穴前の深さ63cmのものと思われる。(貯蔵穴)北壁の西側に偏って位置し、平面形は長方形を呈する。規模は55×32cm、深さ64cmを測る。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土を基調とする。(覆土)上層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。覆土中より炭化材が多く検出されていることから焼失住居と思われる。

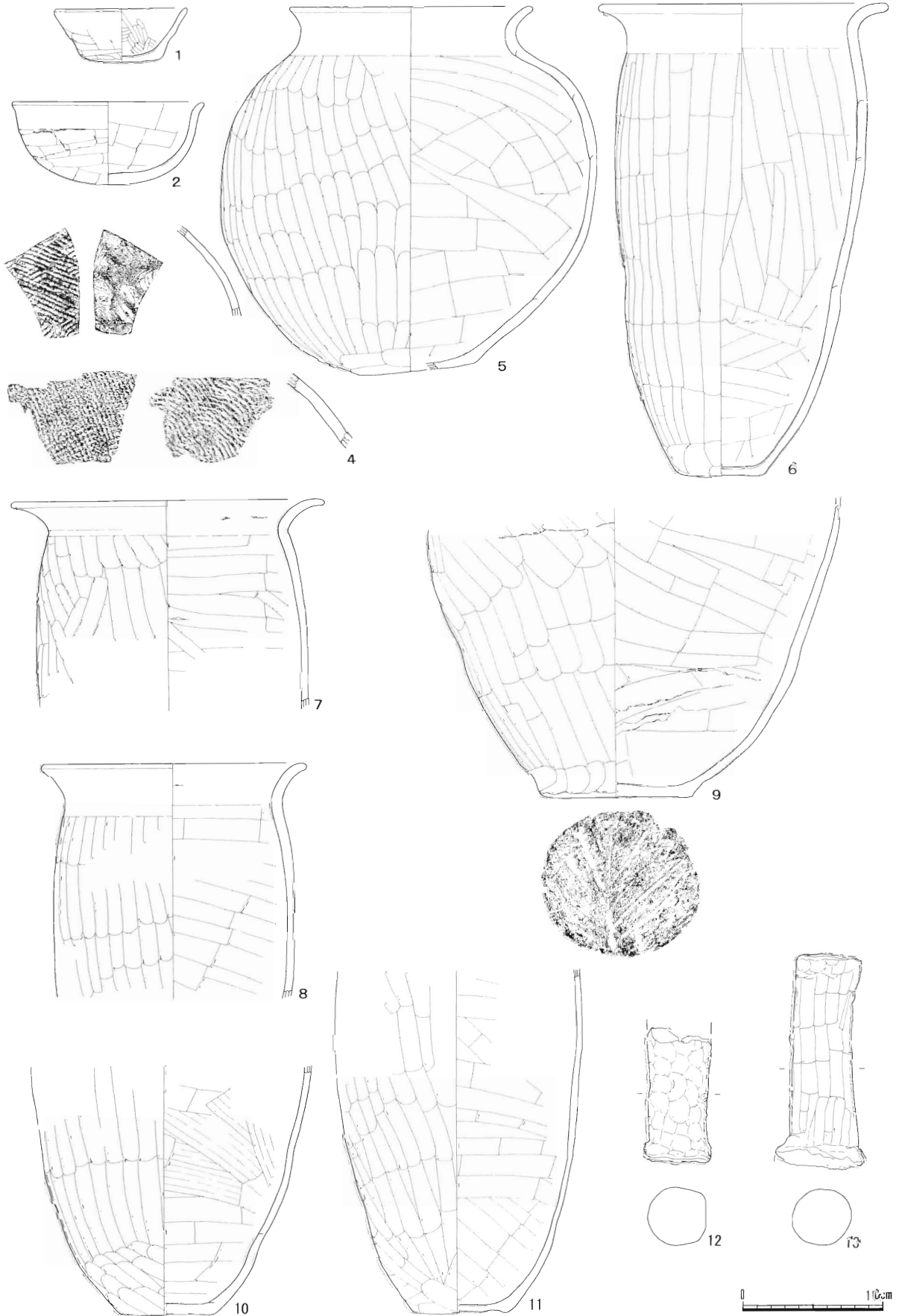
[遺物] 土師器坏・鉢・甕が出土した。その他、炭化種実(イネ・コムギ)・虫えいが出土した(付編参照)。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

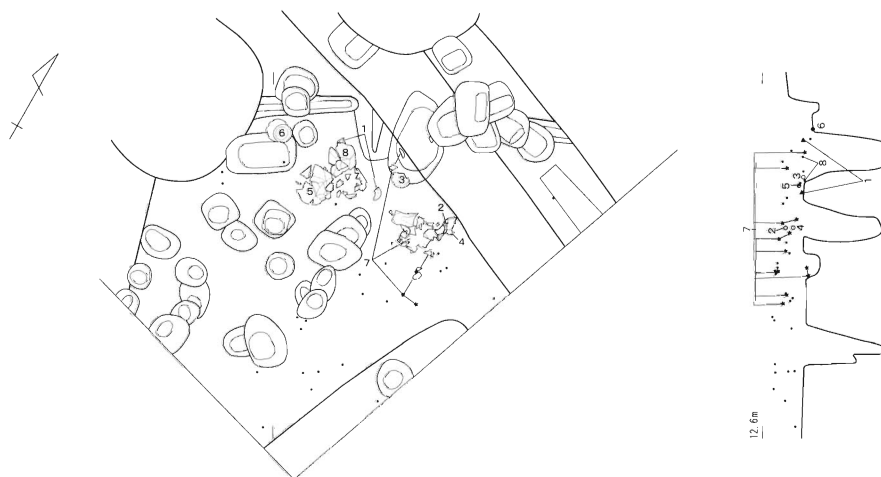
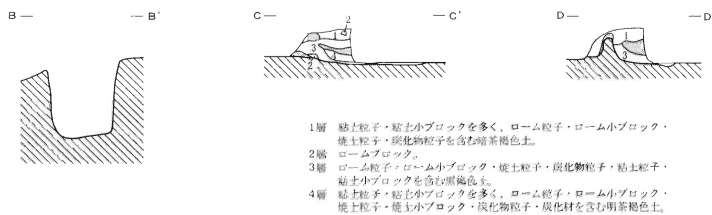
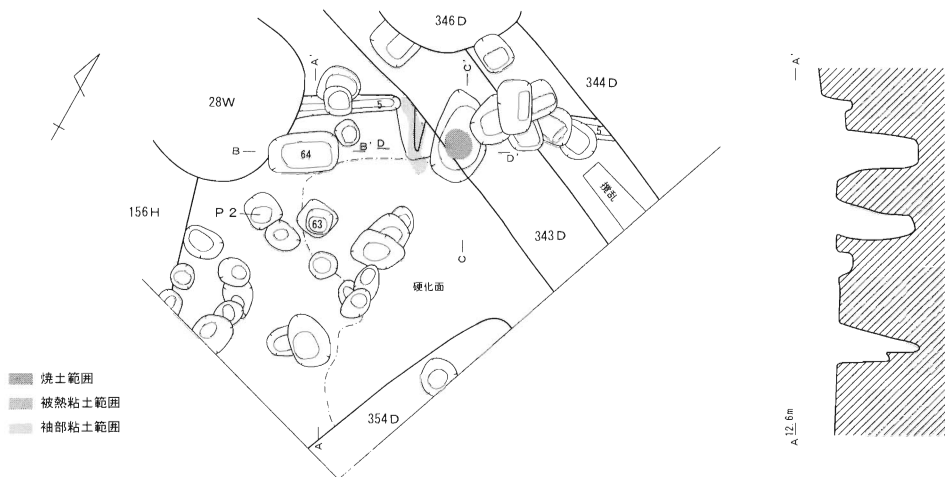
[所見] 覆土中より炭化材が多く検出されていることから焼失住居と思われる。

**遺物** (第17図、第11表)

1～4は土師器坏、5は土師器鉢、6～8は土師器甕である。

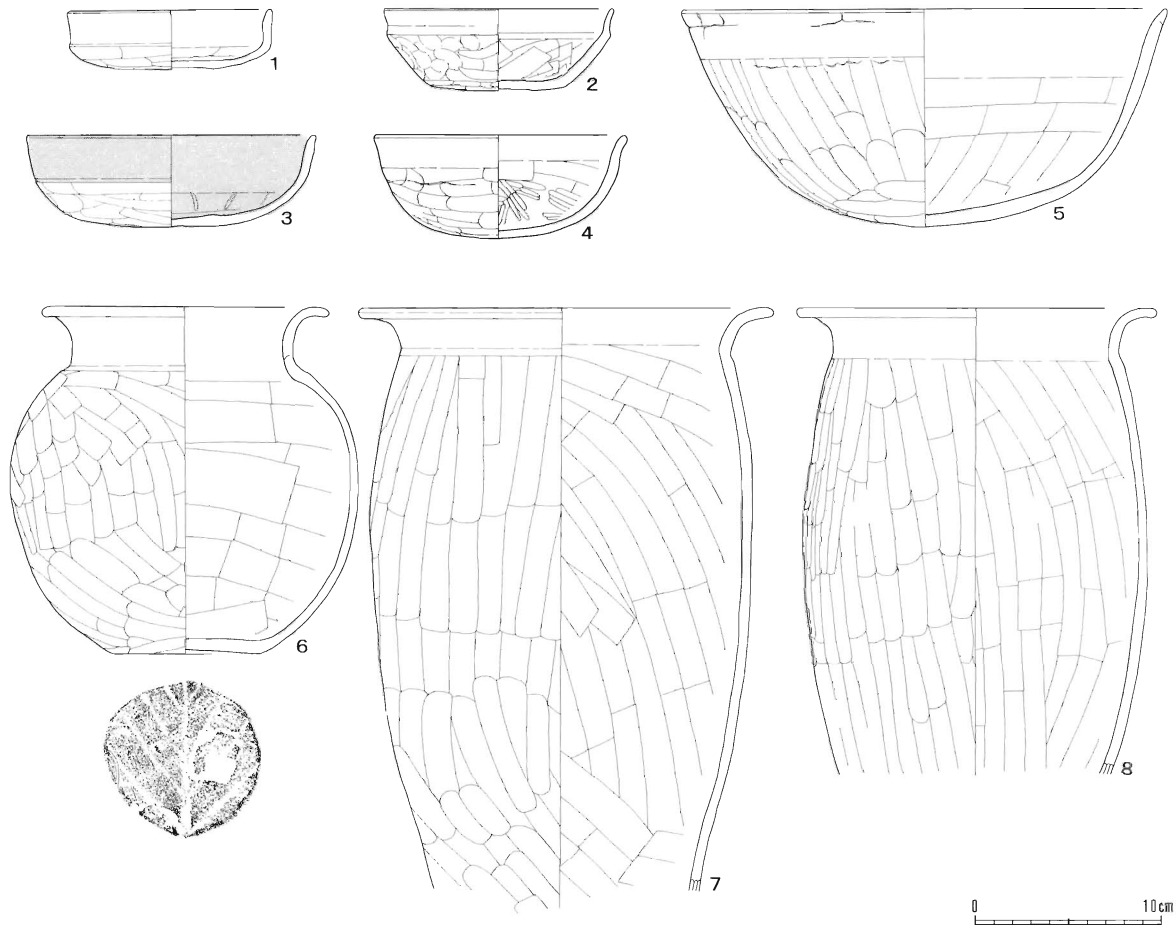


第15図 156号住居跡出土遺物 (1/4)



第16図 157号住居跡・遺物出土状態 (1/60)





第17図 157号住居跡出土遺物 (1/4)

## 第4節 平安時代の遺構と遺物

### (1) 概要

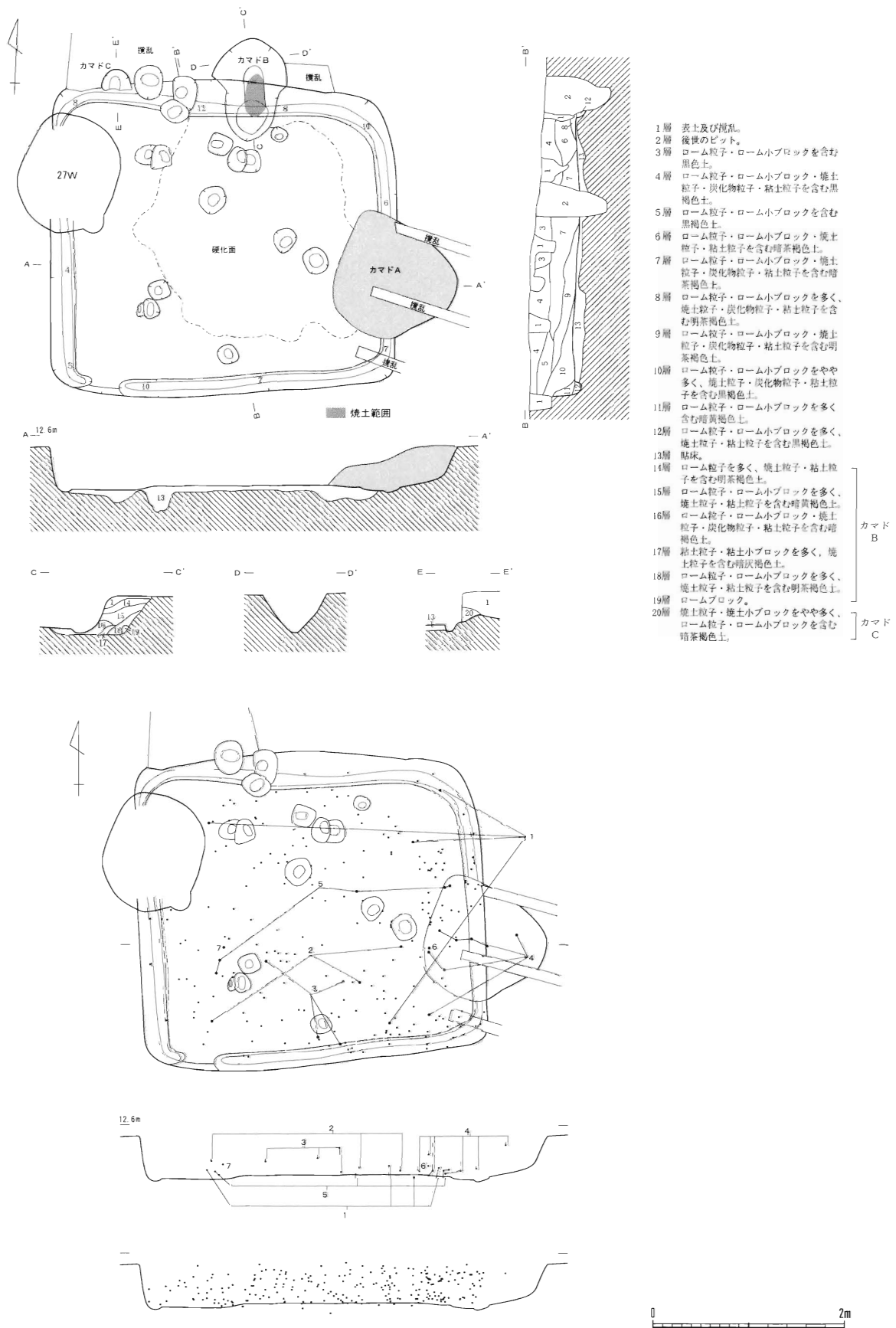
平安時代の遺構は、住居跡1軒(155H)・溝跡1本(33M)が検出された。155Hは一辺3m台の小型住居で、調査区中央を東西方向に横走する33Mに切られている。時期は155Hが9世紀中～後葉に位置付けられる。33Mは良好な資料が出土しなかったが、155Hを切ることから、ここでは9世紀後～末葉として扱うことにする。また、P1から布目瓦の小破片1点が出土している。

### (2) 住居跡

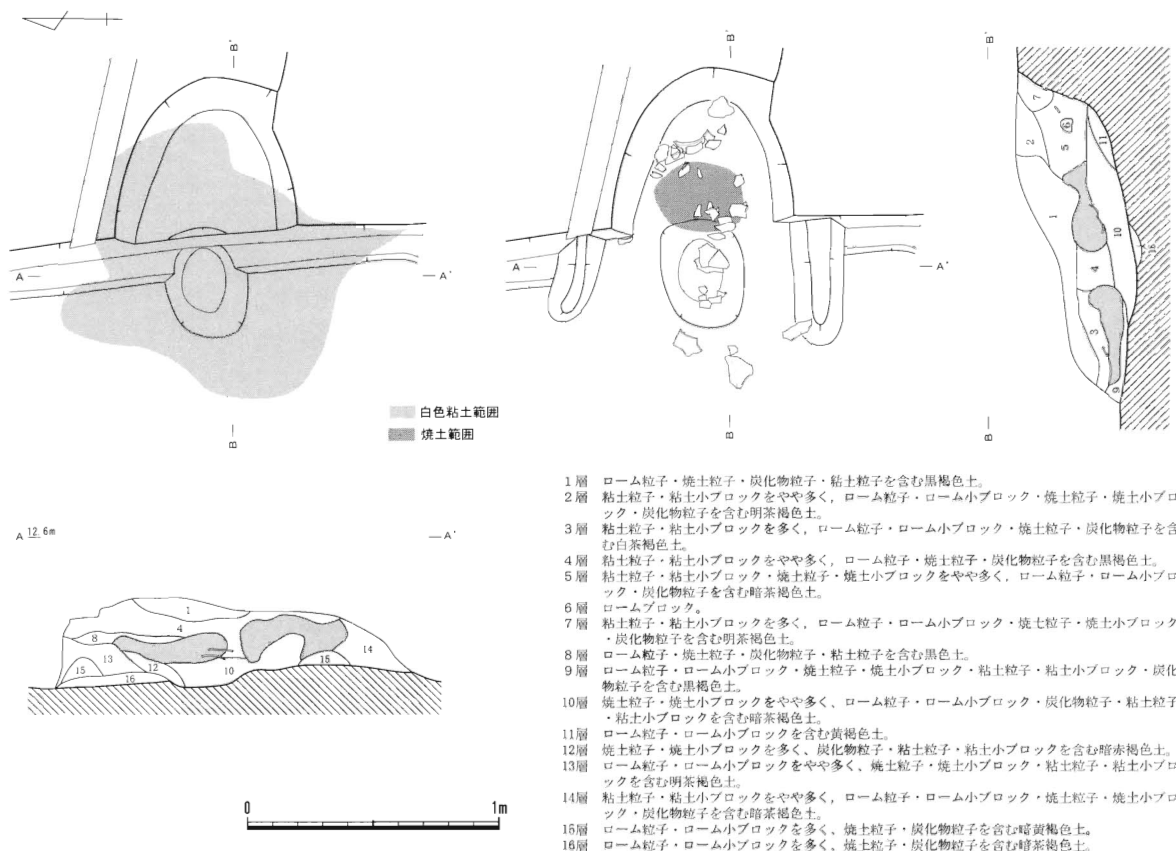
#### 155号住居跡

#### 遺構 (第18・19図)

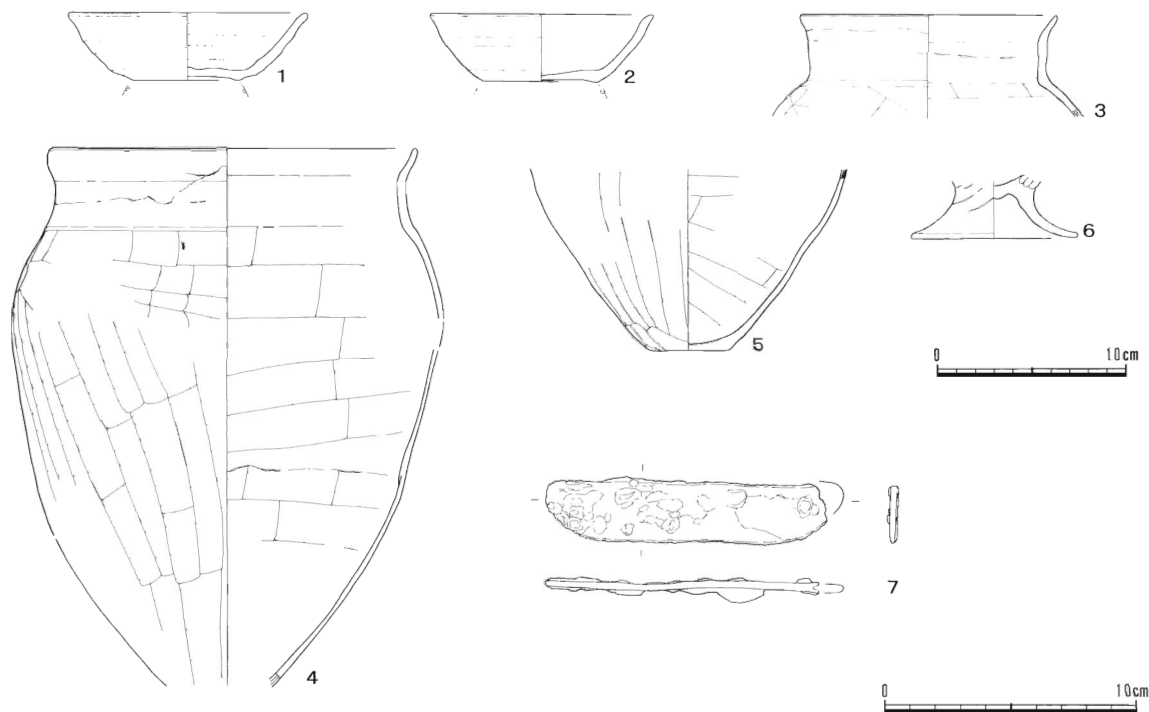
[住居構造] 27W・33Mに切られる。(平面形) 長方形。(規模) 3.60×3.30m。(長軸方位) ほぼE-W。(壁高) 31～47cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 南壁の西コーナー寄りの一部を除き巡らされていた。上幅20～36cm・下幅6～10cm・深さ4～12cmを測る。(床面) 住居中央付近からカマ



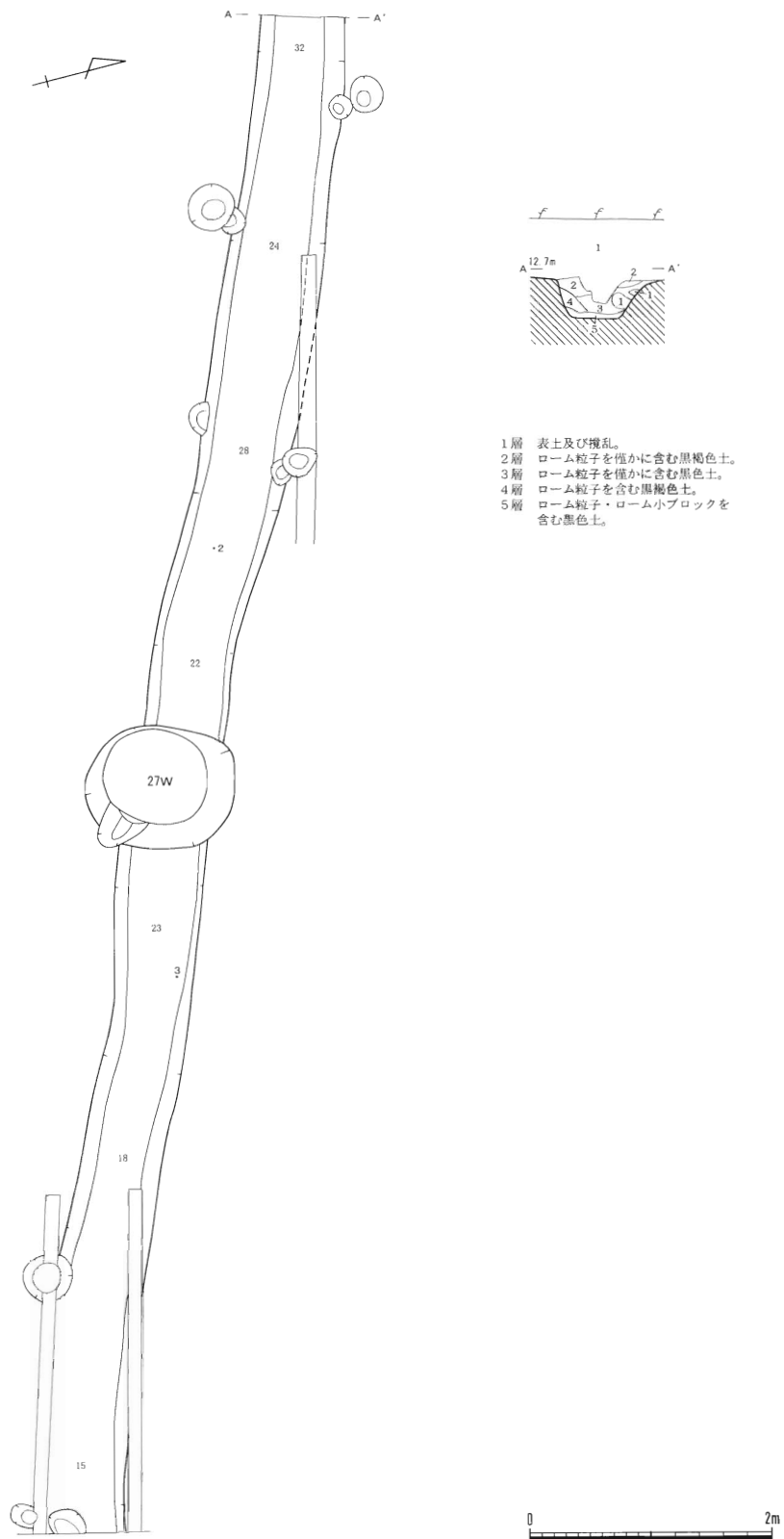
第18図 155号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第19図 155号住居跡カマド A (1/30)



第20図 155号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第21図 33号溝跡 (1/60)

ドA・Bの前面付近がよく硬化していた。(カマド)東壁に1箇所(A)と、北壁に2箇所(B・C)確認できた。北壁のものは旧カマドと思われる。カマドAは東壁の中央より南側に偏って位置し、長さ110cm・幅115cm・壁への掘り込み65cmを測る。袖部は壁溝の一部を埋め戻した後、暗黄褐色土を貼り、その上に白色粘土を被覆して天井部と共に構築されていたと思われる。煙道は70°程の勾配で立ち上がっている。燃焼部は良く焼けて赤化している。カマドBは北壁のほぼ中央に位置し、長さ117cm・幅80cm・壁への掘り込み45cmを測る。煙道は55°程の勾配で立ち上がっている。燃焼部は焼けて赤化していた。カマドCは北壁の西側に偏って位置する。攪乱により壊されているため詳細は不明であるが、燃焼部と思われる焼けたロームは確認できた。(柱穴)検出されなかった。(覆土)10層に分層される。

[遺物] 須恵器坏・土師器甕、鉄製品が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀中～後葉)。

**遺物** (第20図、第12表)

1・2は須恵器坏、3～6は土師器甕、7は鉄製品で、いわゆる「半月形鉄製品」である。特に7の鉄製品については、埼玉県ふじみ野市(旧上福岡市)川崎遺跡第3次から出土したものと同類のもので、新井順子氏により「穂摘み具」として考えられている(新井他 1978)。

**(3) 溝跡**

33号溝跡

**遺構** (第21図)

[構造] 155Hを切り、27Wに切られる。(規模)確認できた範囲では長さ12.8m・上幅65～80cm・下幅40～57cm・深さ15～32cmを測る。坑底はほぼ平坦で、東側が浅くなっている。(走行方位)N-66°-W。(覆土)4層に分層される。

( )は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第9図1	ミニチュア土器	3.6	(4.6)	-	深身の器形/器厚は厚く0.8cm/内面に輪積痕あり	黄褐色	砂粒を僅かに含む	指頭押捺による成形のみ	覆土中	50%
第9図2	土師器坏	4.3	(12.0)	-	口縁部は幾分内湾気味に直立/口縁部と底部との境に段をもつ/黒色土器の可能性あり	黒褐色	砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、底部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、底部ヘラ削り/外面口縁部直下に未調整部分あり	貯蔵穴下層	60%
第9図3	土師器坏	13.6	(13.6)	-	口縁部と底部との境に稜をもつ/底部は平底気味	黄褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、底部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、底部ヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴上層	50%
第9図4	土師器坏	(2.2)	-	(7.6)	底部は平底/口縁部と体部との境に稜をもつ	黄褐色	砂粒を僅かに含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:未調整/未調整部分は指頭押捺による成形痕	西コーナー柱穴すぐ北側の床面上	体部~底部60%
第9図5	土師器甕	(24.0)	(22.8)	-	口縁部と胴部との境に稜あり/最大径は口縁部と胴部中位ほぼ同じ位置	黄褐色	白色粒子・茶褐色粒子を僅かに砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り後細長いナデ	貯蔵穴を中心に北西壁及びカマド周辺から散在	口縁部~胴部50%
第9図6	土師器甕	(15.6)	-	(8.6)	底部は筒抜け式	黄褐色	白色粒子・茶褐色粒子を多く含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り後細長いナデ	貯蔵穴を中心	胴部下半~底部40%
図版7-2-7	ガラス小玉	-	-	-	径1.5mm・厚さ1.0mm/取り上げ時に破損	アクアブルー(淡青色)	-	-	住居中央付近の覆土中	完形品

(単位:cm)

第7表 152号住居跡出土遺物一覧

( ) は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図1	土師器 環	(3.4)	(13.0)	-	口縁部は僅かに内傾／全体に内湾する器形／内外面赤彩	暗茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内面:ナデ／外面:ヘラ磨き調整	覆土中	口縁部～体部の小破片
第10図2	土師器 埴	(7.1)	-	5.0	壺であるかもしれない／底部は碁笥底／器面は著しく摩耗／外面赤彩	淡黄褐色	砂粒を僅かに含む	内面:ヘラナデ／外面:摩耗が著しく不明であるがヘラ磨き調整であろう	炉の南側ほぼ床面上	体部中位～底部60%
第10図3	土師器 壺	-	-	-	複合口縁／肩部で「く」字状に屈曲	茶褐色	砂粒を含む	内外面:横ナデ	貯蔵穴	口縁部～肩部の小破片
第10図4	土製品	-	-	-	粘土塊／土製支脚の可能性あり／長さ3.8cm・幅7.0cm・重さ73.5g	黄褐色	茶褐色粒子を含む	表面には指頭による成形痕が観察される	覆土中	大部分は欠損か

第8表 153号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第11図1	土師器 環	5.4	13.6	2.9	内斜口縁環／底部は碁笥底、内外面赤彩	胎土は赤褐色	砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ	南コーナーの床面上	完形品
第11図2	土師器 壺	(3.7)	(16.0)	-	口縁部途中で段をもつ／内外面赤彩か	胎土は茶褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内外面:横ナデ後ヘラ磨き調整	南コーナーの床面上	口縁部を30%弱

第9表 154号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第15図1	土師器 環	3.9	(9.4)	5.6	底部から直線的に外傾する器形／底部は平底	暗黄褐色	砂粒を僅かに含む	内面:ナデ後ヘラ磨き調整／外面:ナデ／外面には未調整部分あり	北西柱穴の南側の覆土中(床上10cm)	50%
第15図2	土師器 環	6.0	13.6	-	口縁部は外反／口縁部と底部との境に稜をもつ／外面には輪積痕が残る	暗茶褐色	砂粒・小石を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	カマド左横の床面上	80%強
第15図3	須恵器 甕	-	-	-	胴部上半か	赤褐色	砂粒・小石を僅かに含む	内面:当て道具痕／外面:叩き目	北西柱穴の北側の覆土中(床上17cm)	小破片
第15図4	須恵器 甕	-	-	-	胴部上半か	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内面:当て道具痕(青海波文)／外面:叩き目	住居中央よりやや北側のほぼ床面上	小破片
第15図5	土師器 甕	26.8	(17.2)	8.2	丸甕／口縁部は外反／胴部上半に最大径をもつ	暗黄褐色を基調	砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	カマド右側の床面上	50%
第15図6	土師器 甕	34.0	20.5	6.0	長甕／口縁部に最大径をもつ／口縁部は外反／外面胴部に粘土付着痕あり	暗橙色	茶褐色粒子・砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ	カマド前面の床面上	70%
第15図7	土師器 甕	(15.0)	22.0	-	長甕／口縁部は外反／胴部と口縁部の境に僅かに段をもつ	暗橙色	砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り後ナデ	カマド右側の床面上及び北東柱穴周辺の覆土中(床上7～18cm)	口縁部～胴部中位50%
第15図8	土師器 甕	(17.0)	18.8	-	長甕／口縁部は外反／胎土はいわゆる比企型に類似	暗茶褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	カマド右横の床面上を中心	口縁部～胴部中位40%
第15図9	土師器 甕	(21.0)	-	10.8	大型甕(丸甕か)／底部に木葉痕あり	外面:黒色／内面:暗茶褐色	茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む	内面:ヘラナデ／外面:ヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴	胴部中位～底部ほぼ完形
第15図10	土師器 甕	(18.0)	-	6.7	長甕／8の土器に胎土・調整が類似するが、胴部径が大きいため別個体	暗茶褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を多く含む	内面:胴部ヘラナデ後粗いハケナデ／外面:胴部ヘラ削り	カマド・貯蔵穴及び住居中央の覆土中(床上10cm)から散在	胴部中位～底部30%
第15図11	土師器 甕	(24.5)	-	6.8	長甕／外面に粘土付着痕あり	暗黄褐色	砂粒を多く含む	内面:胴部ヘラナデ／外面:胴部ヘラ削り後僅かにナデ	カマド及び北東柱穴周辺の覆土中(床上10～18cm)	胴部中位～底部70%
第15図12	土製品	-	-	-	支脚／裾部は幾分広がっている／現存高9.8cm・径4.1cm	暗茶褐色	砂粒を含まない	指頭による押捺成形か／指紋痕あり	カマド	50%
第15図13	土製品	-	-	-	支脚／円筒形／裾部は広がっている／現存高15.3cm・径4.2cm	暗茶褐色	砂粒を含まない	指頭による軽いナデか／部分的に棒状工具による削痕あり／指紋痕あり	カマド	裾部を欠損

(単位:cm)

第10表 156号住居跡出土遺物一覧

( ) は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図1	土師器 杯	3.2	10.9	—	口縁部は直立/口縁部と底部との境に段をもつ/底部は平底気味	暗橙褐色	砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、底部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、底部ヘラ削り後ナデ	カマド左横及び前面の床面上	ほぼ完形品
第17図2	土師器 杯	4.4	12.2	5.7	口縁部は外傾/口縁部と底部との境に段をもつ/底部は平底/黒色土器の可能性あり	淡茶褐色	砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、底部未調整、底部ヘラ削り後ナデ/未調整部分は指頭押捺痕	カマド前面の覆土中(床上17cm)	50%
第17図3	土師器 杯	5.0	15.4	—	口縁部は外傾/口縁部と底部との境に段をもつ/器面全体が摩耗/内面及び外面口縁部赤彩	胎土は暗黄褐色か	砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、底部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、底部ヘラ削り	カマド前面の床面上	70%
第17図4	土師器 杯	5.6	13.6	—	口縁部は僅かに外反/口縁部と底部との境に稜をもつ	暗黄褐色	砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、底部ヘラナデ後ヘラ磨き調整/外面:口縁部横ナデ、底部ヘラ削り後ナデ	カマド前面の覆土中(床上10cm)	80%
第17図5	土師器 鉢	11.7	25.8	—	浅鉢形/口縁部は外反/外面口縁部に輪積痕/底部は丸底/黒色土器の可能性あり	内面:暗茶褐色/外面:黒色	砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド左横のほぼ床面上	ほぼ完形品
第17図6	土師器 甕	18.6	15.3	7.9	小型丸甕/口縁部は大きく外反/最大径は胴部上半/底部に木葉痕あり	黄褐色	金雲母を僅かに砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴北縁の床面レベル	完形品
第17図7	土師器 甕	(32.0)	(22.0)	—	長甕/口縁部は外反/胴部と口縁部の境に段をもつ/最大径は口縁部と胴部上半ほぼ同位置	内面:黒褐色/外面:暗橙色	金雲母を僅かに砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後いねいにナデ(スリップか)	カマド及び前面の覆土中(床上8~18cm)	口縁部~胴部下半70%
第17図8	土師器 甕	(25.0)	(19.2)	—	長甕/口縁部は外反/胴部と口縁部の境に僅かに段をもつ/最大径は口縁部と胴部中位ほぼ同位置	暗橙色	砂粒・小石を含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ(スリップか)	カマド左横の床面上	口縁部~胴部下半40%

第11表 157号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第20図1	須恵器 杯	3.6	(12.6)	5.6	口縁部は外反/東金子製品か	灰色	白色砂粒・黒色粒子(コクス?)を多く含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕あり	床面上~覆土中(床上10cm程)から散在	60%
第20図2	須恵器 杯	3.6	11.8	(6.0)	口縁部は僅かに外反/東金子製品	灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕あり	住居中央やや南寄りの覆土中(10~20cm)から散在	50%
第20図3	土師器 甕	(5.4)	(13.5)	—	小型甕(台付甕か)/「コ」の字口縁	暗茶褐色	砂粒を僅かに含む	内面:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	南壁近くの覆土中(10~40cm)からやや散在	口縁部~胴部上半30%
第20図4	土師器 甕	(28.6)	19.5	—	いわゆる武蔵型甕/「コ」の字口縁/外面煤付着	暗茶褐色	茶殻粒子・砂粒を含む	内面:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	カマドAを中心	口縁部~胴部下半70%
第20図5	土師器 甕	(9.7)	—	4.4	いわゆる武蔵型甕	内面:暗茶褐色/外面:黒褐色	砂粒を含む	内面:ヘラナデ/外面:ヘラ削り	住居中央の床面上及び覆土中(床上10cm程)から散在	胴部下半~底部50%
第20図6	土師器 甕	(3.0)	—	8.7	台付甕の脚部/「ハ」の字状	黒褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内面:底部ヘラナデ、脚部横ナデ/外面:横ナデ	カマド中(床上10cm程)	脚部90%
第20図7	鉄製品	—	—	—	いわゆる「半月形鉄製品」/現存長11.1cm・最大幅2.5cm・厚さ0.4cm・重さ23.6g/両端に穿孔	—	—	—	西壁近くの覆土中(床上15cm)	先端部が一部破損/90%以上

第12表 155号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版9-1-1	須恵器 杯	—	—	—	口縁部/口縁部は僅かに外反	灰色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転	覆土中	口縁部小破片
図版9-1-2	須恵器 杯	—	—	—	底部	灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/底部周辺ヘラ削り	覆土中(床上10cm)	底部小破片
図版9-1-3	須恵器 甕	—	—	—	胴部/厚さ1.0cm	灰色~灰白色	砂粒を僅かに含む	内面:当て道具痕/外面:平行叩き目痕	覆土中(床上10cm)	胴部小破片

(単位:cm)

第13表 33号溝跡出土遺物一覧

[遺物] 覆土中（床上10cm程）から土器小破片が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀後～末葉）。

**遺物**（図版9-1、第13表）

小破片のため、図示できるものはなかったため、3点のみ図版に掲載した。1・2は須恵器坏、3は須恵器甕である。

#### （4）ピット

今回検出されたピットの大部分は中世以降のものと考えられるが、P1については布目瓦1点が出土したため、ここでは平安時代のピットとして取り扱うことにする。

P1から布目瓦の小破片1点が出土した（図版9-2）。

---

---

## 第5節 中世以降の遺構と遺物

---

---

### （1）概要

中世以降の遺構は、土坑23基（330・331・334～354D）、地下室<sup>ちかむろ</sup>2基（332・333D）、井戸跡4基（25～28W）、道路状遺構1条（1道）、ピット群が検出された。

土坑は南北あるいは東西方向に延びる細長く溝状のものが中心である。地下室は333Dから陶磁器・石製品・瓦など比較的によくの遺物が出土している。井戸跡は25Wから出土した陶磁器・土器片から近世（18世紀代）に比定できる可能性がある。道路状遺構は熙寧元宝が1点出土しているが、時期については、陶磁器・土器から近世以降（18世紀後半以降）に比定されるものである。

その他として、調査区全体にピット群があるが、特に調査区南西隅から南北方向に直線的なラインで捉えられるものは、ピット列の可能性はある。

### （2）土坑

#### 330号土坑

**遺構**（第22図）

[構造] 25Wに切られる。東側は調査区域外であり、攪乱により一部壊されている。坑底面は平坦である。（平面形）長方形。（規模）不明×1.25m。（深さ）25cm前後。（主軸方位）N-75°-W。（覆土）7層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

#### 331号土坑

**遺構**（第22図）

[構造] 1道を切る。北側は調査区域外であるため詳細は不明である。（平面形）不整形。（規模）不明。（深さ）調査区域内では1mまでしか掘れなかったが、さらに深くなると思われる。（覆土）確認できた



範囲では8層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 332号土坑

#### 遺構 (第22図)

[構造] 地下室である。(入口竪坑部) 開口部はほぼ円形を呈し、径1.05mを測る。深さは1.24mで、坑底面の東側には40×25cm・深さ9cmのピット状の掘り込みがある。南壁を除いた壁面には足掛け穴と思われる小穴が5ヶ所確認できた。主体部への連絡はスロープ状に5cmほど高くなっている。(主体部) 底部の平面形は56×42cmの通路側が広く直線的で、奥側が緩いカーブを描くかまぼこ型を呈する。天井部は入口が54cmで一番高く、緩やかに弧を描きながら下がり50cm程先で坑底と交わる。(主軸方位) ほぼN-S。

[遺物] 土器と銅製品が出土した。

[時期] 近世(18世紀)。

#### 遺物 (第25図2、図版9-3、第14表)

1は土器で焙烙である。2は銅製品で、煙管(キセル)の雁首である。長さ1.7cm・幅1.7cm・重さ4.7g・火皿口径1.8cm。完形品である。

### 333号土坑

#### 遺構 (第22図)

[構造] 地下室である。(入口竪坑部) 開口部は隅丸長方形で、規模は86×80cm。主軸に対し横長の形態を持つ。深さ1.80mを測る。坑底面は平坦で100×80cmの長方形を呈するが、中央付近から主体部に向かって弧を描く段差で13cm下がっている。(主体部) 底部平面形は2.05×1.70mの不整形を呈し、天井部までの高さは0.9mを測る。(主軸方位) N-80°-W。

[遺物] 陶磁器・石製品・瓦が出土した。

[時期] 近世～近代(18世紀後半～19世紀代)。

#### 遺物 (第25図14、図版10、第14・15表)

1～5は磁器、6～11は陶器、12・13は土器である。14は砥石、15は石臼、17～21は大型の切石で、石組みカマドの部材である可能性がある。16は棧瓦の破片である。

### 334号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。(平面形) 不整な長方形。(規模) 1.42×0.82m。(深さ) 30cm前後。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-26°-E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 335号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。(平面形) 不整な長方形。(規模) 幅0.48～0.84m・長さ3.56m。(深さ) 18～23cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-20° - E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 336号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 339Dと重複するが、新旧関係は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底は南側が浅くなっている。(平面形) 長方形。(規模) 1.20×0.58m。(深さ) 18～26cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-15° - E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 337号土坑

#### 遺構 (第4図)

[構造] 攪乱により壊されているため詳細は不明である。上層から灰が3cmほどの厚さで検出され、焼土粒子や炭化物粒子も多く検出された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 338号土坑

#### 遺構 (第4図)

[構造] 南側は一部攪乱により壊されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 1.10×0.50m。(深さ) 20cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-S。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 339号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 336Dと重複するが、新旧関係は不明である。南側は攪乱により壊されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 不明×80cm。(深さ) 43cm。(覆土) 上層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。(長軸方位) N-10° - E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 340号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 341・342Dを切る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、坑底面は少し凸凹している。(平面形) 長方形。(規模) 3.56×0.66m。(深さ) 50cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-70° -W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 341号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 340Dに切られ、342Dを切る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 2.62×0.78m。(深さ) 50cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、小石を僅かに含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-80° -W。

[遺物] 陶器・土器・土製品・鉄製品が出土した。

[時期] 近世。

#### 遺物 (第25図3・4、図版9-3、第14表)

1・2は陶器である。3は土錘である。長さ4.3cm・最大幅2.1cm・穿孔径0.5cm・重さ14.2g。4は鉄釘である。長さ6.8cm・最大幅0.7cm・重さ6.1g。

### 342号土坑

#### 遺構 (第23図)

[構造] 340・341Dに切られる。(平面形) 長方形。(規模) 不明×1.10m。(深さ) 20cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-10° -E。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 343号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 157Hを切り、346Dに切られる。1基として扱ったが、2基重複している可能性がある。東側は調査区域外である。坑底面は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 不明×0.6~0.64m。(深さ) 西側が20cm、東側は30cmを測る。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-73° -W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 344号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 157Hを切り、346Dに切られる。西側は調査区域外、東側は攪乱により壊されている。(平面形) 長方形。(規模) 不明×0.60m。(深さ) 24cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-70°-W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 345号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 西側は調査区域外、東側は攪乱により壊されているため詳細は不明である。(平面形) 長方形。(規模) 不明×0.53m。(深さ) 34cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 磁器・土器が出土した。

[時期] 近世。

#### 遺物 (図版9-3、第14表)

1・2は磁器、3は土器である。

### 346号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 343・344Dを切る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面は平坦である。(平面形) 長方形。(規模) 1.20×0.85m。(深さ) 40cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-70°-W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 347号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 多数のピットに切られている。東側に硬化した面が確認された。(平面形) 不整形。(規模) 2.25×2.00m。(深さ) 20cm前後。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-20°-E。

[遺物] 陶器1点が出土した。

[時期] 中世か(16世紀後半)。

#### 遺物 (図版9-3、第14表)

1は陶器で志野菊皿である。

### 348号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] (平面形) 不整な隅丸長方形。(規模) 1.65×0.84m。(深さ) 7cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-70° -W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 349号土坑

#### 遺 構 (第24図)

[構造] 壁は急斜に立ち上がり、坑底は東側が浅くなっている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 2.20×0.60m。(深さ) 18~28cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-80° -W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

### 350号土坑

#### 遺 構 (第24図)

[構造] 351Dを切る。壁は急斜に立ち上がる。(平面形) 不整な長方形。(規模) 2.40×0.60m。(深さ) 24cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-16° -E。

[遺物] 陶器1点が出土したが、混入品であろうか。

[時期] 近世以降か。

#### 遺 物 (図版9-3、第14表)

1は陶器で甕である。

### 351号土坑

#### 遺 構 (第24図)

[構造] 西側は調査区域外であり、350Dに切られているため詳細は不明である。坑底面は平坦である。(平面形) 不明。(規模) 不明×1.54m。(深さ) 8cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 陶器1点が出土したが、混入品であろうか。

[時期] 近世以降か。

#### 遺 物 (図版9-3、第14表)

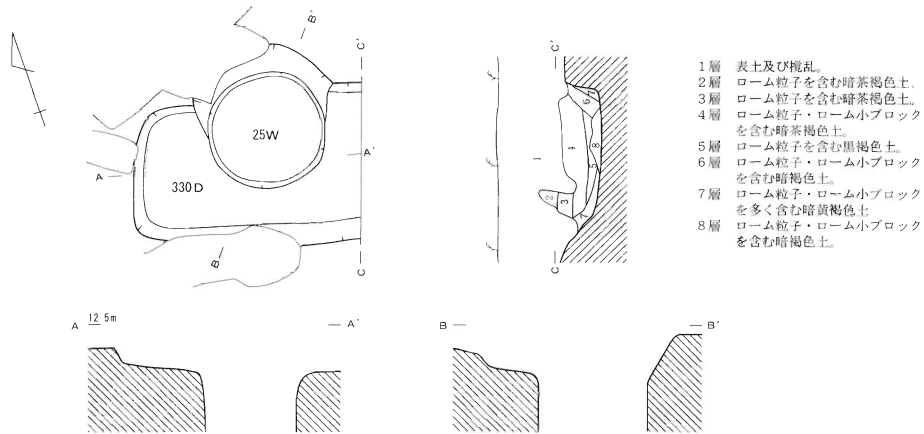
1は陶器で挿鉢である。

### 352号土坑

#### 遺 構 (第4図)

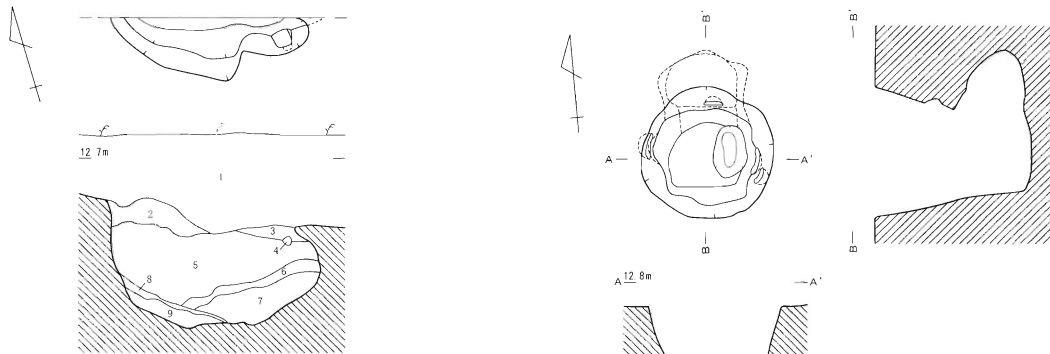
[構造] 多数のピットにより壊されている。(平面形) 不整な隅丸長方形。(規模) 不明×0.68m。(深さ) 18cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-10° -E。

[遺物] 出土しなかった。



- 1層 表土及び攪乱。
- 2層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。

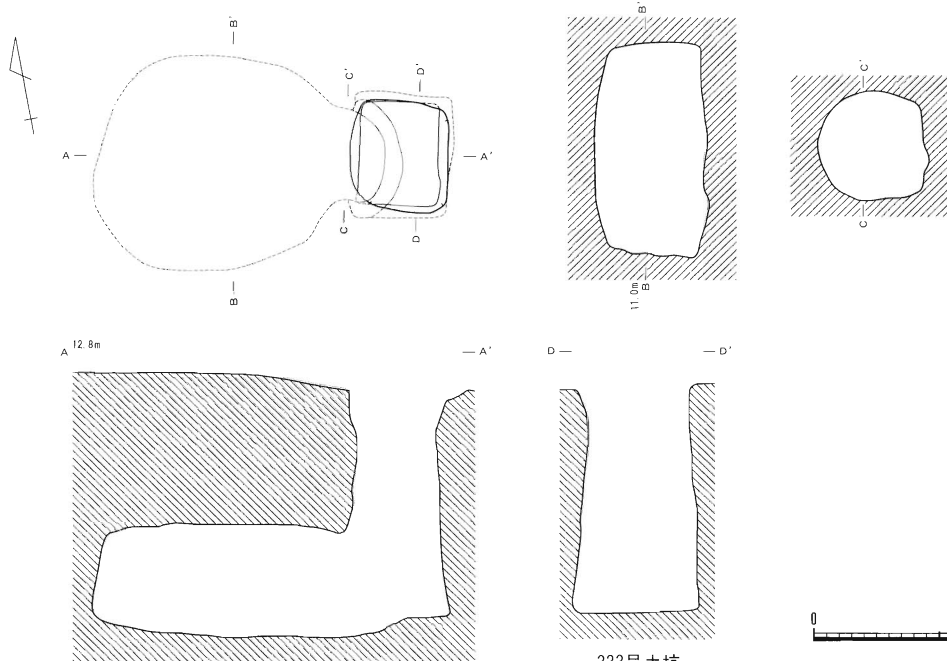
330号土坑・25号井戸跡



- 1層 表土及び攪乱。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 4層 ロームブロック。
- 5層 ロームブロック充填土の黄褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。

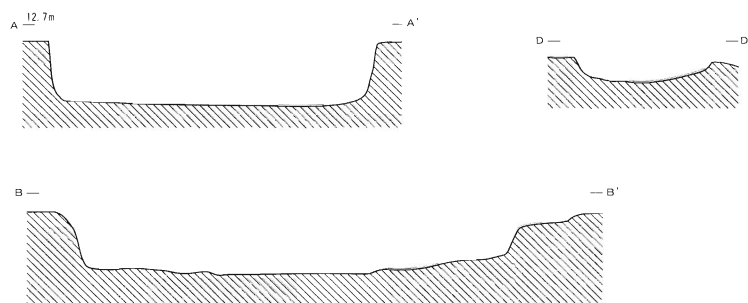
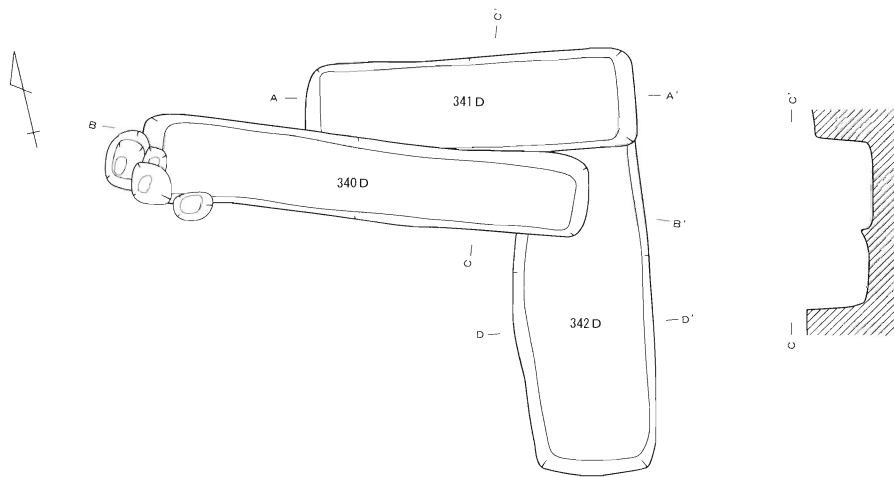
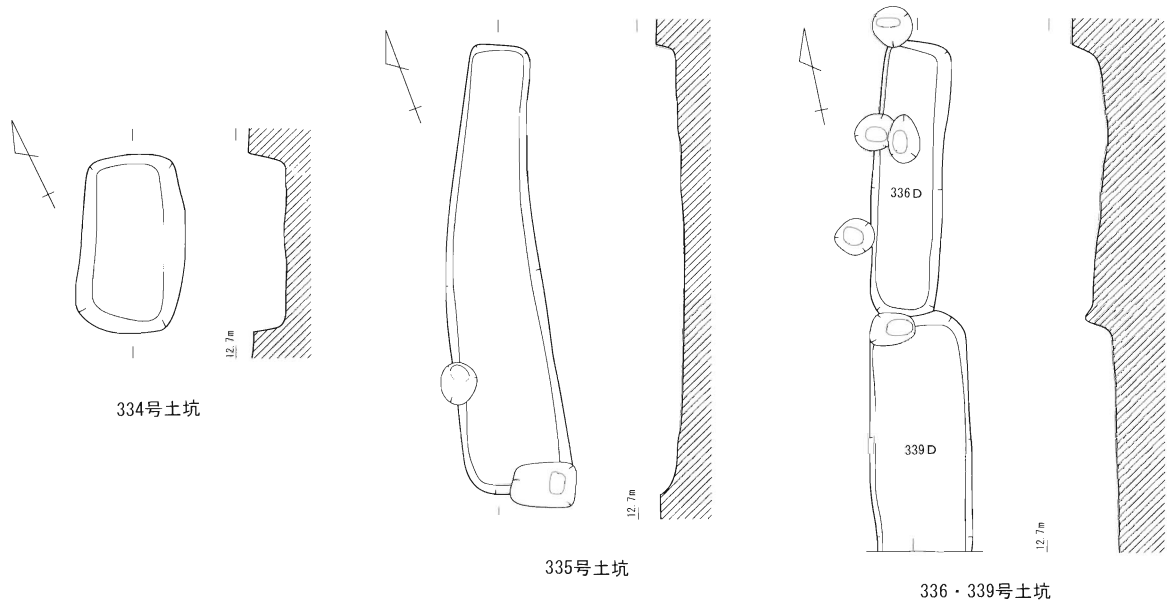
331号土坑

332号土坑



333号土坑

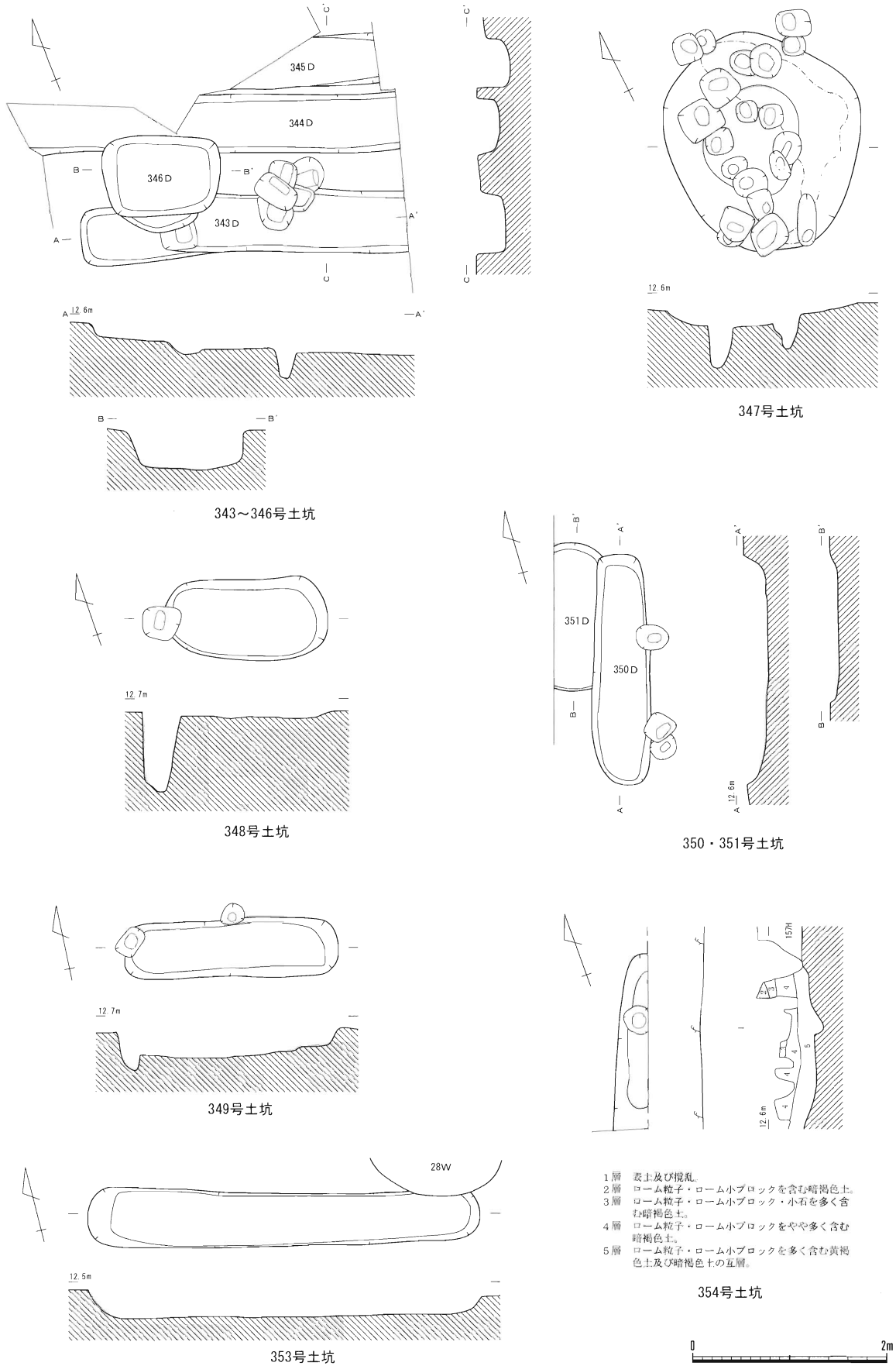
第22図 土坑1 (1/60)



340~342号土坑

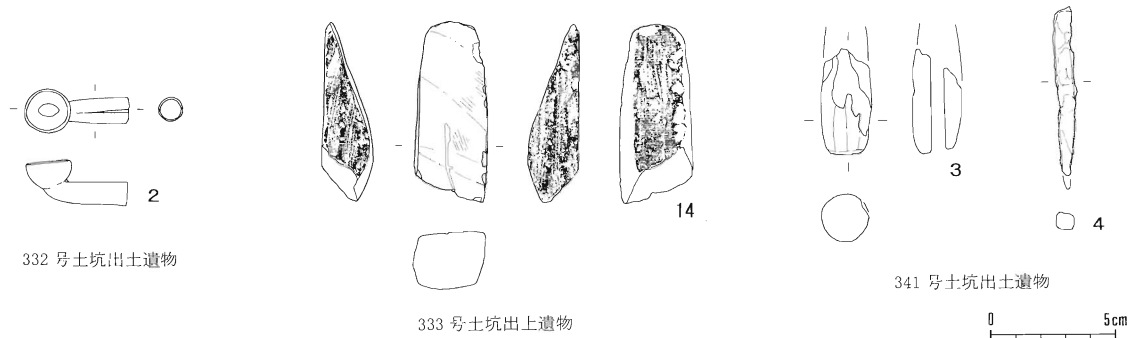


第23図 土坑2 (1/60)



第24図 土坑3 (1/60)





第25図 土坑出土遺物 (1/3)

[時期] 近世以降か。

### 353号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 156Hを切り、28Wに切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 4.03×0.60m。(深さ) 28cm。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。(長軸方位) N-75°-W。

[遺物] 陶磁器3点が出土したが、混入品であろうか。

[時期] 中世か (16世紀後半～17世紀中)。

#### 遺物 (図版9-3、第14表)

1は磁器、2・3は陶器である。

### 354号土坑

#### 遺構 (第24図)

[構造] 157Hを切る。ほとんどが調査区域外であるため詳細は不明である。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(深さ) 土層断面からみると60cmを測る。(覆土) 5層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世以降か。

## (3) 井戸跡

### 25号井戸跡

#### 遺構 (第22図)

[構造] 330Dを切る。開口部は漏斗状に開いていたと思われるが規模は不明である。40cm程下からは、径86cmで垂下する。危険防止のため80cm程掘り下げたところで調査を中止した。

[遺物] 陶磁器・土器が出土した。

[時期] 近世 (18世紀前半～後半)。

#### 遺物 (図版9-2、第14表)

1・2は磁器、3・4は陶器、5は土器である。

### 26号井戸跡

#### 遺構 (第11図)

[構造] 153・154H・1道を切る。ほとんどが調査区域外であるため、詳細は不明である。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世か。

### 27号井戸跡

#### 遺構 (第26図)

[構造] 155H・33Mを切る。開口部は1.23×1.0mの楕円形状を呈する。上部の断面は漏斗状で、60cm程下からは75×70cmの楕円形状で垂下する。北と南の壁面に1ヶ所ずつ足掛けと見られる穴が確認できた。危険防止のため、1m程掘り下げたところで調査を中止した。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 近世か。

### 28号井戸跡

#### 遺構 (第26図)

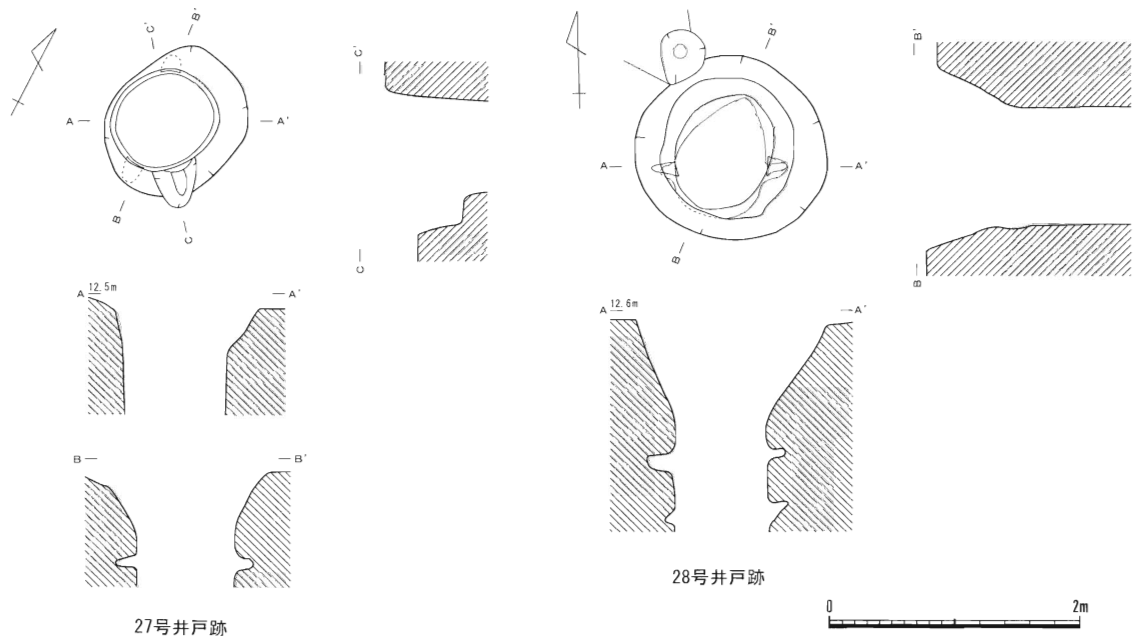
[構造] 156・157Hを切る。開口部はほぼ円形で、径1.5mを測る。断面形は漏斗状を呈し、60～70cm下からは95×75cmの卵形で垂下する。東と西の壁面には足掛けと見られる穴が2ヶ所ずつ確認できた。170cm程掘り下げた所で、危険防止のため調査を中止した。

[遺物] 土器1点が出土した。

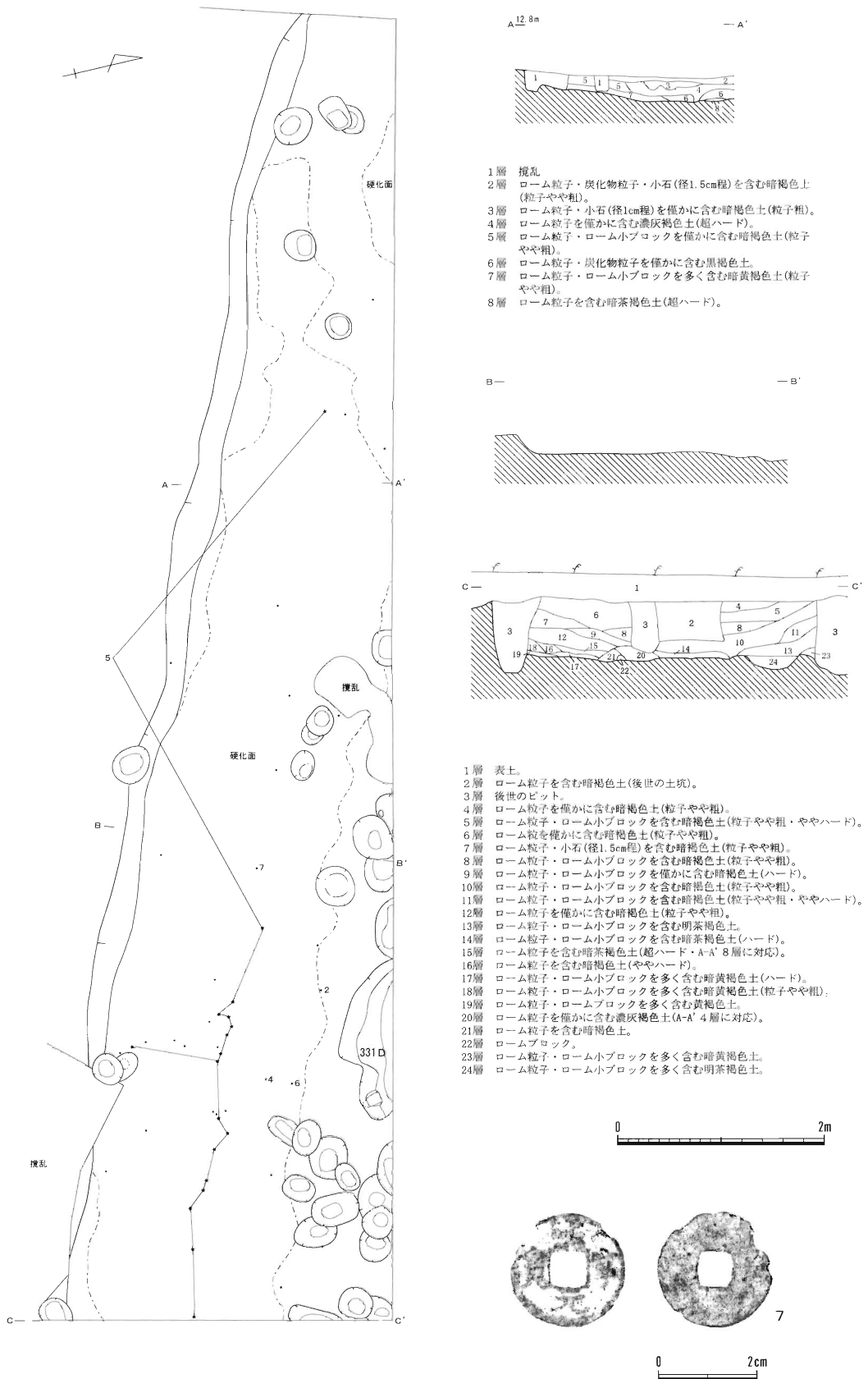
[時期] 近世以降か。

#### 遺物 (図版9-2、第14表)

1は土器で焙烙である。



第26図 27・28号井戸跡 (1/60)



第27図 1号道路状遺構・出土遺物 (1/60・4/5)

( ) は現存値・推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴	推定生産	時期
				器高	口径	底径			
図版9-3-1	332D	土器	焙烙	—	—	—	口縁部破片/外面口縁部に煤付着/内外面仕上/断面サンドイッチ状に縞	在地系	18c
図版10-1	333D	磁器	蓋	(1.8)	(10.4)	—	天井部~口縁部破片/外面:唐草文/酸化コバルト/型紙刷	瀬戸	明治以降
図版10-2	333D	磁器	碗	(3.8)	(12.0)	—	口縁部~体部下半破片/化学コバルト	瀬戸	明治以降
図版10-3	333D	磁器	湯飲茶碗	4.5	(7.8)	2.3	青磁/遺存度60%	肥前系	18c後半~19c
図版10-4	333D	磁器	湯飲茶碗	4.6	(7.9)	—	外面:風景文/口縁部直下と高台直上に圈線/遺存度40%	肥前系	19c前半
図版10-5	333D	磁器	花瓶	(4.1)	2.6	—	口頸部破片/外面:樹木文	肥前系	19c前半
図版10-6	333D	陶器	德利	(6.0)	—	—	ぺこ爛德利/体部下半~底部/内外面に鉄釉	瀬戸	18c後半
図版10-7	333D	陶器	德利	(3.5)	—	12.0	底部/外面に黄釉	瀬戸	19c
図版10-8	333D	陶器	灯明皿	2.2	10.3	5.1	外面に鉄釉/遺存度50%	瀬戸	19c
図版10-9	333D	陶器	灯明具	5.9	7.5	5.0	台付/底部を除き灰釉/口縁部を僅かに欠損/遺存度95%	瀬戸	19c
図版10-10	333D	陶器	播鉢	(18.0)	—	—	口縁部~体部下半破片/複合口縁/内外面に鉄釉/内面に13本単位のハケ目	備前系	19c
図版10-11	333D	陶器	播鉢	—	—	—	口縁部破片/複合口縁/内外面に鉄釉/内面にハケ目	備前系	19c
図版10-12	333D	土器	焙烙	5.3	—	—	口縁部~底部破片/内耳あり/内外面黒色	在地系	17c
図版10-13	333D	土器	手焙り	(5.2)	—	—	口縁部~体部破片/内外面橙色/内外面横ナデ/口縁部内面は被熱により煤けている	在地系	18c
図版9-3-1	341D	陶器	碗	5.6	(8.4)	3.4	外面底部を除き灰釉/外面:松葉文/遺存度50%	京焼	18c後半
図版9-3-2	341D	陶器	皿	—	—	—	口縁部小破片/志野釉/被熱部分あり	瀬戸	17c前半
図版9-3-1	345D	磁器	德利	—	—	—	体部小破片/外面:植物文	肥前系	18c後半
図版9-3-2	345D	磁器	德利	—	—	—	体部小破片/外面:植物文	肥前系	18c後半
図版9-3-3	345D	土器	焙烙	—	—	—	底部破片/内外面暗茶褐色	在地系	?
図版9-3-1	347D	陶器	菊皿	2.8	—	—	口縁部~底部破片/志野釉/内面胎土目	瀬戸	16c後半
図版9-3-1	350D	陶器	甕	—	—	—	体部小破片/外面:平行叩き目痕/外面に鉄釉	常滑	中世
図版9-3-1	351D	陶器	播鉢	—	—	—	体部小破片/内外面に鉄釉	瀬戸	中世?
図版9-3-1	353D	磁器	德利	—	—	—	頸部破片/肩部に2本の圈線	肥前系	17c中
図版9-3-2	353D	陶器	皿	2.0	—	—	口縁部~底部破片/志野釉	瀬戸	16c後半
図版9-3-3	353D	陶器	小壺	(2.8)	—	—	底部小破片/外面に灰釉	瀬戸	16c後半
図版9-2-1	25W	磁器	碗	(4.7)	—	—	口縁部~体部下半破片/内面:口縁部に1重圈線/外面:植物文?	肥前系	18c前半
図版9-2-2	25W	磁器	碗	—	—	—	くらわんか手/体部小破片/内面:1重圈線/外面:底部付近に4重圈線、植物文	肥前系	18c中
図版9-2-3	25W	陶器	碗	(4.2)	—	—	口縁部~体部下半小破片/内外面灰釉	京焼	18c後半
図版9-2-4	25W	陶器	播鉢	2.2	—	—	底部破片/内外面鉄釉/内面にハケ目	備前系	18c後半
図版9-2-5	25W	土器	焙烙	—	—	—	底部破片/内外面黒褐色/補修孔1ヶ所あり	在地系	?
図版9-2-1	28W	土器	焙烙	—	—	—	底部小破片/内外面暗茶褐色	在地系	?
図版11-1-1	1道	磁器	茶碗	(3.2)	—	3.7	内面:見込み草花文、2重圈線/外面:唐草文	瀬戸系	19c前半
図版11-1-2	1道	磁器	蓋	—	—	—	外面:七宝繋ぎ/3と同一セットの可能性	肥前系	19c前半
図版11-1-3	1道	磁器	蓋物	—	—	—	外面:宝つくし/2と同一セットの可能性	肥前系	19c前半
図版11-1-4	1道	陶器	播鉢	—	—	—	鉄釉/内外面暗茶褐色/内面に11本単位のハケ目	備前系	19c前半
図版11-1-5	1道	陶器	播鉢	—	—	—	鉄釉/内面にハケ目/口唇部加工痕あり/灰叩きの転用の可能性あり/外面口縁部に被熱痕	瀬戸	18c後半
図版11-1-6	1道	土器	焙烙	—	—	—	口縁部/口唇部面取り/内外面黒色/内面及び外面口縁部横ナデ	在地系	18c中
図版9-2	P2	陶器	天目茶碗	—	—	—	体部小破片/内面及び外面口縁部に鉄釉	瀬戸	16c後半

(単位: cm・g)

第14表 遺構出土の陶磁器・土器一覧

( )は現存値

図版番号	遺構名	種類	石材	長さ	幅	高さ	重量	備考
図版10-14	333D	砥石	凝灰岩	5.8	2.7	2.1	48.8	使用面は表裏2面／裏面は「く」字状／断面は台形／表面及び側面には条線状の成形痕あり
図版10-15	333D	石臼	砂岩	13.0	5.1	11.4	924.0	下皿か／上面には条線と使用痕あり
図版10-17	333D	切石	凝灰岩	24.7	10.2	7.3	1900.0	直線的／断面は台形／下面には条線状の成形痕あり／被熱により煤付着
図版10-18	333D	切石	凝灰岩	14.3	9.7	7.6	654.0	直線的／先端部下端に切込みあり／全体的に粗い削り面や沈線状の成形痕あり／被熱により煤付着
図版10-19	333D	切石	凝灰岩	16.4	13.1	7.7	988.0	直線的でやや太め／下面はやや曲面／先端部下端に切込みあり／被熱により煤付着
図版10-20	333D	切石	凝灰岩	24.1	11.3	9.2	3200.0	直線的でやや太め／重量感あり／被熱により煤付着
図版10-21	333D	切石	凝灰岩	19.0	9.7	7.3	996.0	内側にR(曲面)あり／下面には条線状の成形痕あり

(単位：cm・g)

第15表 333号土坑出土の石製品一覧

#### (4) 道路状遺構

##### 1号道路状遺構

##### 遺 構 (第27図)

[構造] 331Dに切られ、152・153・154Hを切る。北側は調査区域外であるため詳細は不明である。確認できた長さは12.75mで、広範囲に硬化した面が確認できた。(走行方位) N-75°-W。

[遺物] 陶磁器・土器・銅銭が出土した。

[時期] 近世(18世紀中～19世紀前半)。

[所見] 調査当初は溝跡として把握していたが、硬化面が広範囲から確認でき、さらに硬化面は何層も形成されていることから、道路状遺構として考えることにした。

##### 遺 物 (第27図7、図版11-1、第14表)

1～3は磁器、4・5は陶器、6は土器である。

7は銅銭で、熙寧元宝(北宋、1068年)である。外径2.2cm・重さ1.8g。

#### (5) ピット群

今回検出されたピットの大部分は中世以降のものと考えられるが、ここでは陶器が出土したP2のみを掲載した。

P2からは、陶器(天目茶碗)1点が出土した(図版9-2、第14表)。

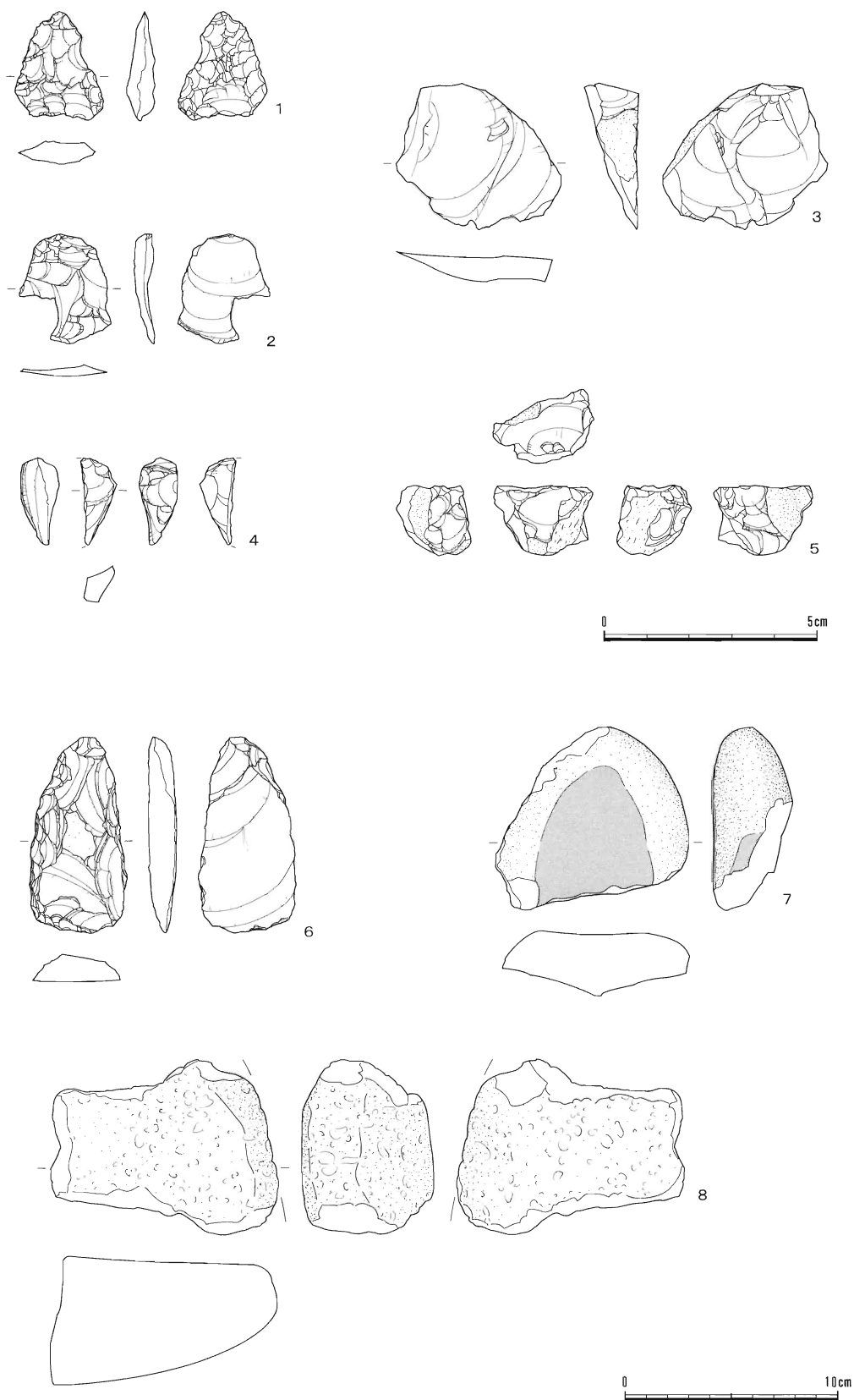
## 第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱、そして遺構内からの出土であるが明らかに混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱うことにする。

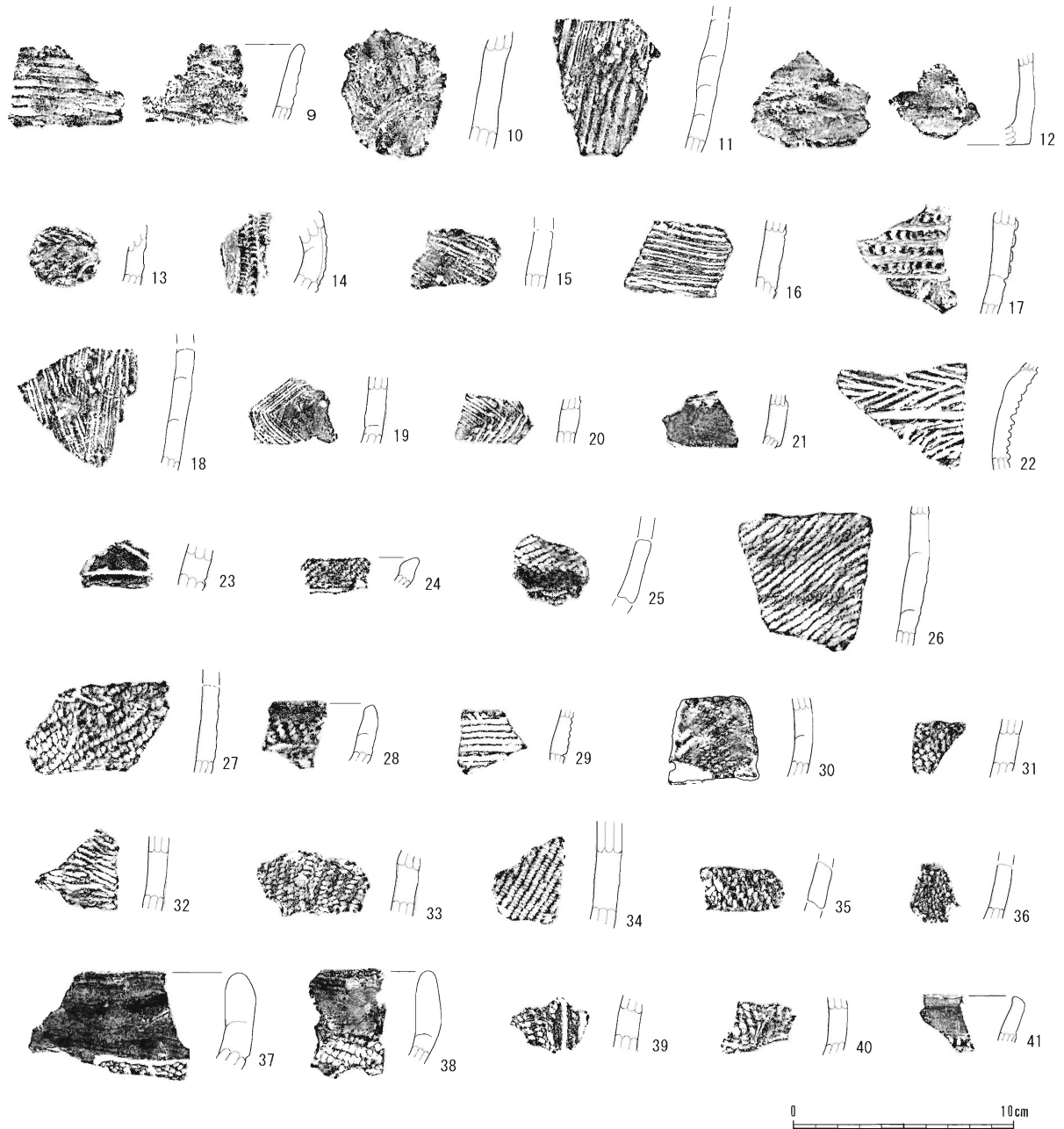
遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器・土器、近世の陶磁器・土器が該当する。以下、各遺物ごとに分類して説明する。

#### (1) 縄文時代の石器 (第28図、第16表)

古墳時代後期の住居跡(153・156号住居跡)と遺構外から出土した。1は石鏃未製品、2～4は剥片、



第28図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)



第29図 遺構外出土遺物 2 (1/3)

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	備考
第28図1	石鏃未製品	チャート	25.89	20.52	6.76	2.6	完形	156H
第28図2	剥片	頁岩	25.85	20.95	4.81	1.7	完形	156H
第28図3	剥片	頁岩	34.64	38.79	11.74	10.1	完形	遺構外
第28図4	剥片	黒曜石	20.24	8.42	7.10	1.3	左側縁欠損	遺構外
第28図5	石核	黒曜石	17.98	23.34	14.43	5.7	完形	遺構外
第28図6	削器	ホルンフェルス	91.94	45.02	13.37	67.5	完形	遺構外
第28図7	磨石	砂岩	80.98	90.87	38.12	280.6	欠損	156H
第28図8	石皿	安山岩	80.95	101.95	58.69	671.8	欠損	153H

(単位：mm・g)

第16表 遺構外出土の石器一覧

第2章 城山遺跡第46地点の調査

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第29図9	口縁	貝殻条痕文	褐色	条痕文系	○			○		156H	
第29図10	胴	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○			○		遺構外	
第29図11	胴	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○			○		156H	
第29図12	底	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○		○	○		157H	
第29図13	胴	浮線文に斜行する刻み	褐色	諸磯 b				○		遺構外	
第29図14	胴	結節浮線文	明褐色	諸磯 b				○		157H	
第29図15	胴	竹管による沈線文	褐色	諸磯 b				○		1道	
第29図16	胴	沈線文	黒褐色	諸磯 b～c		○		○		155H	
第29図17	胴	結節の同心円状文	赤褐色	諸磯 c			○	○		155H	
第29図18	胴	竹管による沈線文／刺突文	褐色	諸磯 c				○		156H	
第29図19	胴	平行沈線による鋸歯状文	褐色	諸磯 c				○		157H	
第29図20	胴	平行沈線による矢羽根状文	暗赤褐色	諸磯 c				○	○	156H	
第29図21	胴	三角陰刻文	褐色	十三菩提?				○		33M	
第29図22	頸	平行沈線による矢羽根状文	明褐色	五領ヶ台			○	○	白	遺構外	
第29図23	胴	竹管による沈線文	明赤褐色	五領ヶ台				○	白	遺構外	
第29図24	口縁	L R 縄文	黒褐色	五領ヶ台				○		遺構外	
第29図25	胴	L R 縄文／結節文	暗赤褐色	五領ヶ台				○		156H	
第29図26	胴	L 縄文	黒褐色	五領ヶ台?				○	雲	遺構外	
第29図27	胴	L R 縄文／結節文	褐色	五領ヶ台				○		347D	
第29図28	口縁	R L 縄文／輪積み痕 (複合口縁?)	暗褐色	五領ヶ台				○	金	遺構外	
第29図29	胴	集合沈線	褐色	中期初頭				○	金・白	345D	
第29図30	胴	L 撚糸文 (R L 縄文?)	褐色	阿玉台?				○	金	155H	
第29図31	胴	浅い刺突を充填	褐色	中期前葉		○		○		156H	
第29図32	胴	L 縄文	褐色	中期初頭～前葉		○		○		1道	
第29図33	胴	R L 縄文	褐色	中期前葉			○	○		156H	細礫の混入は顕著
第29図34	胴	L R 縄文	暗灰褐色	中期				○	○	152H	
第29図35	胴	L 撚糸文	明褐色	中期		○		○	白	156H	
第29図36	胴	L 撚糸文	褐色	中期				○		156H	
第29図37	口縁	沈線による区画に R L 縄文	褐色	加曾利 E III～IV				○		遺構外	
第29図38	口縁	L R 縄文	明褐色	加曾利 E III～IV				○		341D	
第29図39	胴	R 撚糸文	褐色	加曾利 E III～IV				○		遺構外	
第29図40	胴	R 撚糸文	褐色	加曾利 E				○	○	156H	
第29図41	口縁	降帯に刻み	暗灰褐色	堀之内?				○		339D	

※石：石英 角：角閃石 礫：細礫 砂：砂粒 白：白色粒子 雲：雲母 金：金雲母

第17表 遺構外出土の縄文土器一覧

( ) は現存値・推定値

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴	推定生産	時期
			器高	口径	底径			
図版11-2-42	磁器	碗	4.9	—	3.5	内面：口縁部直下に二重圈線、見込みに一重圈線と五弁花 外面：菊花文／遺存度30%	肥前系	18c 後半
図版11-2-43	磁器	碗	(3.1)	—	3.4	体部下半～底部破片／青磁	肥前系	17c 後半
図版11-2-44	磁器	仏飯具	(3.3)	—	4.0	脚台部のみ遺存／外面に一重圈線	肥前系	18c 後半
図版11-2-45	陶器	小壺	(3.8)	—	—	底部小破片／外面に鉄釉	瀬戸	18c 後半
図版11-2-46	陶器	徳利	(7.3)	—	(7.8)	体部下半～底部破片／外面に灰釉	瀬戸	18c 後半
図版11-2-47	陶器	土瓶	(3.5)	—	(6.8)	体部下半～底部破片／外面底部の除き灰釉	信楽系	19c
図版11-2-48	陶器	灯明具	2.7	—	—	内面及び外面口縁部に鉄釉／外面底部やや煤けている／遺存度20%	瀬戸	18c 中
図版11-2-49	陶器	播鉢	—	—	—	体部破片／内外面に鉄釉／内面にハケ目	瀬戸	17c 後半
図版11-2-50	土器	焙烙	4.6	—	—	口縁部～底部破片／口唇部面取り／補修孔2ヶ所あり	在地系	17c 後半
図版11-2-51	土器	焙烙	5.1	—	—	口縁部～底部破片／内外面黒色	在地系	18c

(単位：cm)

第18表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧



5は石核、6は削器、7は磨石、8は石皿である。

### (2) 縄文時代の土器 (第29図、第17表)

遺構外の出土土器とは言っても縄文の遺物包含層は残りが悪く、遺物の殆どは後世の遺構覆土への混入品として出土したものである。

土器は小破片が多く、型式のはっきりしないものが多いが、中心となるのは前期末葉の諸磯式(13～20)から中期初頭の五領ヶ台式(22～28)で、早期の条痕文系(9～12)、中期後葉の加曾利E(37～40)がこれに次ぐ。城山遺跡は本調査地点以外でも同様の出土傾向が見られ、前期末から中期初頭の遺物が多い。

### (3) 近世の陶磁器・土器 (図版11-2-42～51、第18表)

本地点から中世以降の遺構が多く検出されており、ここで扱う遺物の多くは、遺跡の集中した南半部から出土した遺物である。

42～44は磁器、45～49は陶器、50・51は土器である。

#### [引用文献]

新井順子他 1978『川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡 発掘調査報告書』郷土史料第21集 上福岡市教育委員会

# 第3章 城山遺跡第55地点の調査

## 第1節 遺跡の概要

### (1) 立地と環境

第2章第1節 参照。

### (2) 発掘調査の経過

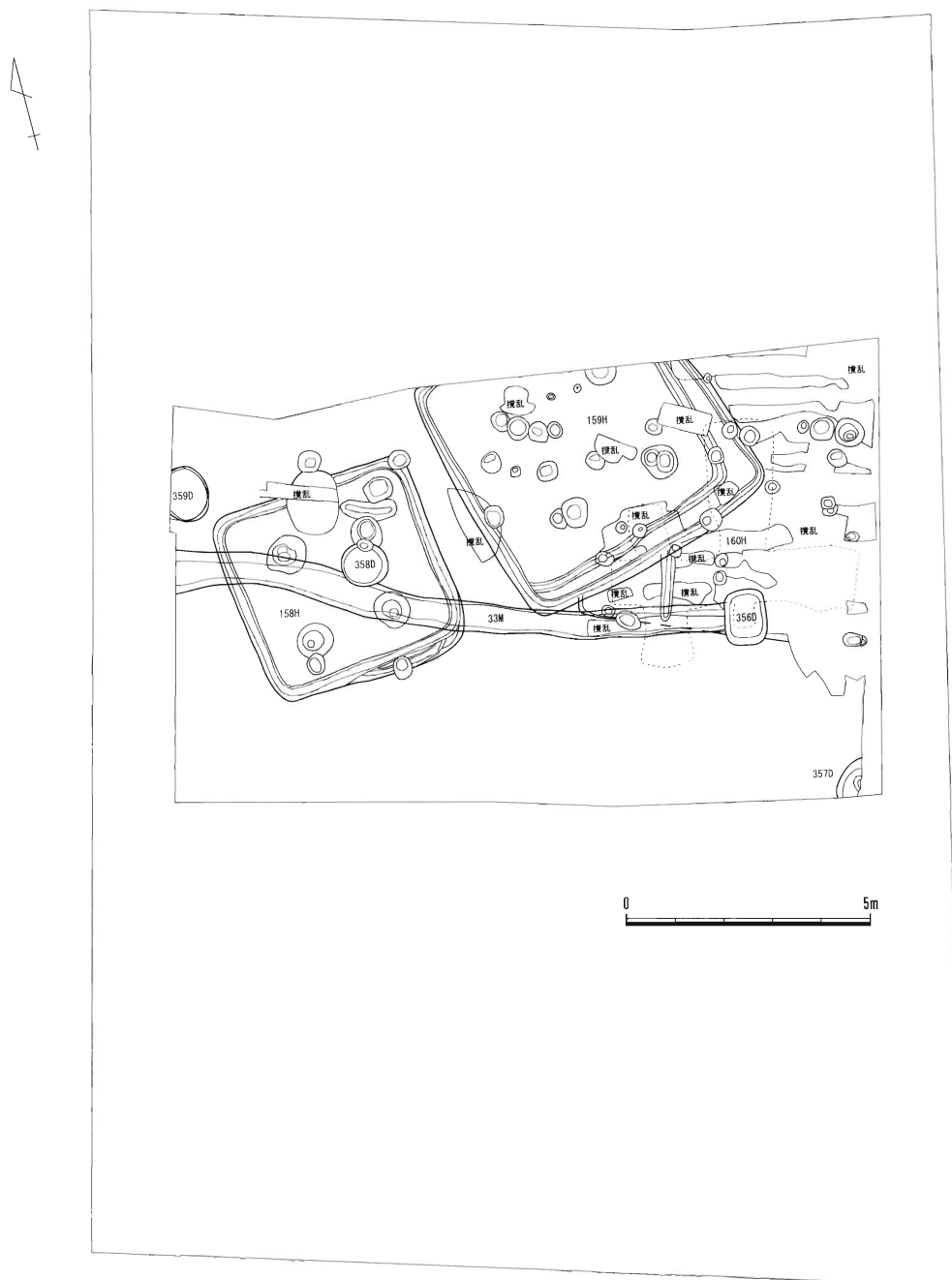
確認調査は、平成16年10月8日に実施した。今回は建物建設予定地のみを調査の対象とした。調査区長軸ほぼ東西方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代後期から平安時代のもと思われる住居跡2軒を確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、第46地点同様に基礎底盤には杭を打ち込み地盤改良を行うため、計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第19表の発掘調査工程表に示した。

- 10月12日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。まず調査区内に敷かれていた碎石を除去することから開始し、残土置場は調査区以外の開発区域内を当てることにした。
- 10月18日 人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代後期の住居跡2軒（158・159H）と、隣接する第46地点と同一遺構の平安時代の溝跡1本（33M）が分布していることが明らかになった。同日、158・159Hの精査を開始する。
- 10月下旬 19日から21日は台風23号の影響のため作業を中止する。22日からは159H、33M、近世の土坑（356D）の精査を行う。356Dは地下室と考えられ、横穴状を呈する主体部が159H方向に延びることが確認できたため、159Hの精査終了後に調査を再開する予定とし、一旦精査を中止することにした。

	平成16年10月	11月	12月
表土剥ぎ作業	10.12		
158H	10.18	再開11.11	
159H	10.18		
160H		11.1	
33M	10.18		
356D	10.25	再開11.16	
357D		11.11	
358D		11.11	
359D			11.24
埋戻し作業			11.24 11.30

第19表 城山遺跡第55地点の調査工程表



第30図 遺構分布図 (1/150)

- 11月上旬 159Hに切られる160Hの精査を併行して開始する。160Hはカクランにより破壊を受け、硬化した床面や壁溝の一部が確認できる程度であった。
- 11月中旬 158Hの精査を再開する。さらに159・160Hの精査終了後、356Dの精査を再開する。新たに縄文時代の土坑（357D）と近世の土坑（358D）の精査を行う。
- 11月下旬 22日、356Dの天井部を重機で抜く作業を開発主体者と施工業者の立ち会いのもと行う。その後、内部構造の精査を行い、平面形が全体にカタカナの「キ」の字状を呈する横坑状の構造をもつタイプであることが判明した。24日には危険回避のため356Dのみの埋戻しを完了する。新たに縄文時代の土坑（359D）の精査を行う。
- 11月30日 午前中に158Hのカマド実測・写真撮影を終了し、その後埋戻しを開始する。
- 12月1日 埋戻し完了。

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### （1）概要

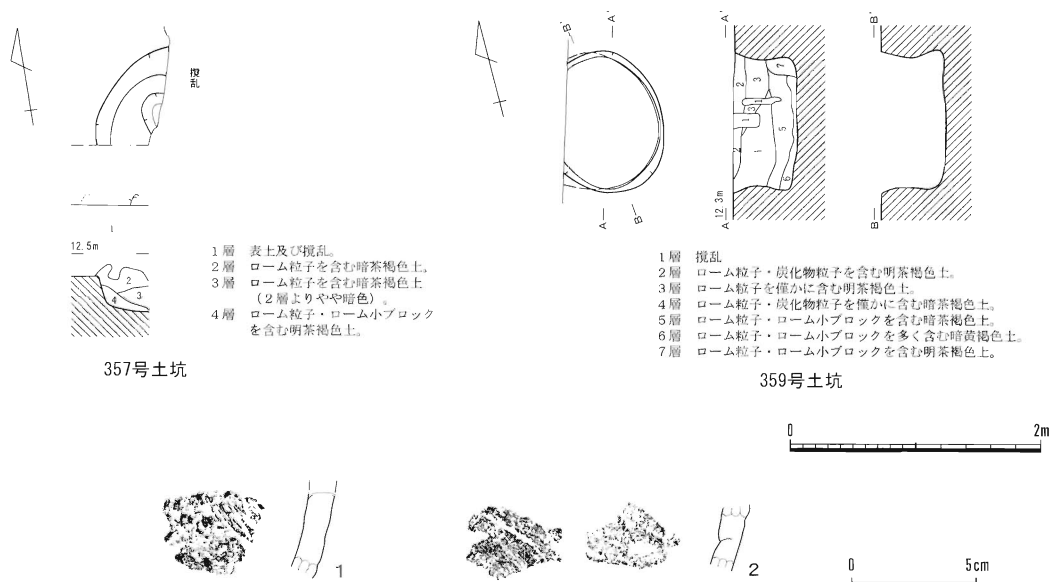
本調査地点における縄文時代の遺構は、土坑2基（357・359D）の検出にとどまった。いずれの土坑も調査区端部に位置し、その全てを発掘するには至らなかった。

### （2）土坑

#### 357号土坑

#### 遺構（第31図）

[構造] 調査区の南東隅で検出された。東側は攪乱され、南側は調査区外に位置し詳細は不明である。



第31図 土坑・出土遺物（1/60・1/3）

また後世のピットが入り込み、坑底面の一部を切る。確認できる範囲では、坑底は平らで壁面は75°ほどの角度で立ち上がる。(平面形)不明。(規模)不明。(深さ)28cm。(覆土)3層に分層された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から縄文時代と思われる。

### 359号土坑

#### 遺 構 (第31図)

[構造] 調査区北西部で検出された。西側は調査区外で完掘はできなかった。坑底面は平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、下半部はややオーバーハングする。(平面形)楕円形か。(規模)115×不明cm。(深さ)50cm。(覆土)6層に分層された。

[遺物] 土器片が2点出土した。

[時期] 早期後葉か。

#### 遺 物 (第31図)

2点とも早期の条痕文系土器の破片である。1は明褐色を呈し、内面は炭化物が付着している。胎土には砂粒・細礫・繊維を含む。2は明灰褐色を呈し、胎土には砂粒・細礫・黒色粒子(炭化した混和材か)・白色粒子と繊維を僅かに含む。

---

## 第3節 古墳時代後期の遺構と遺物

---

### (1) 概 要

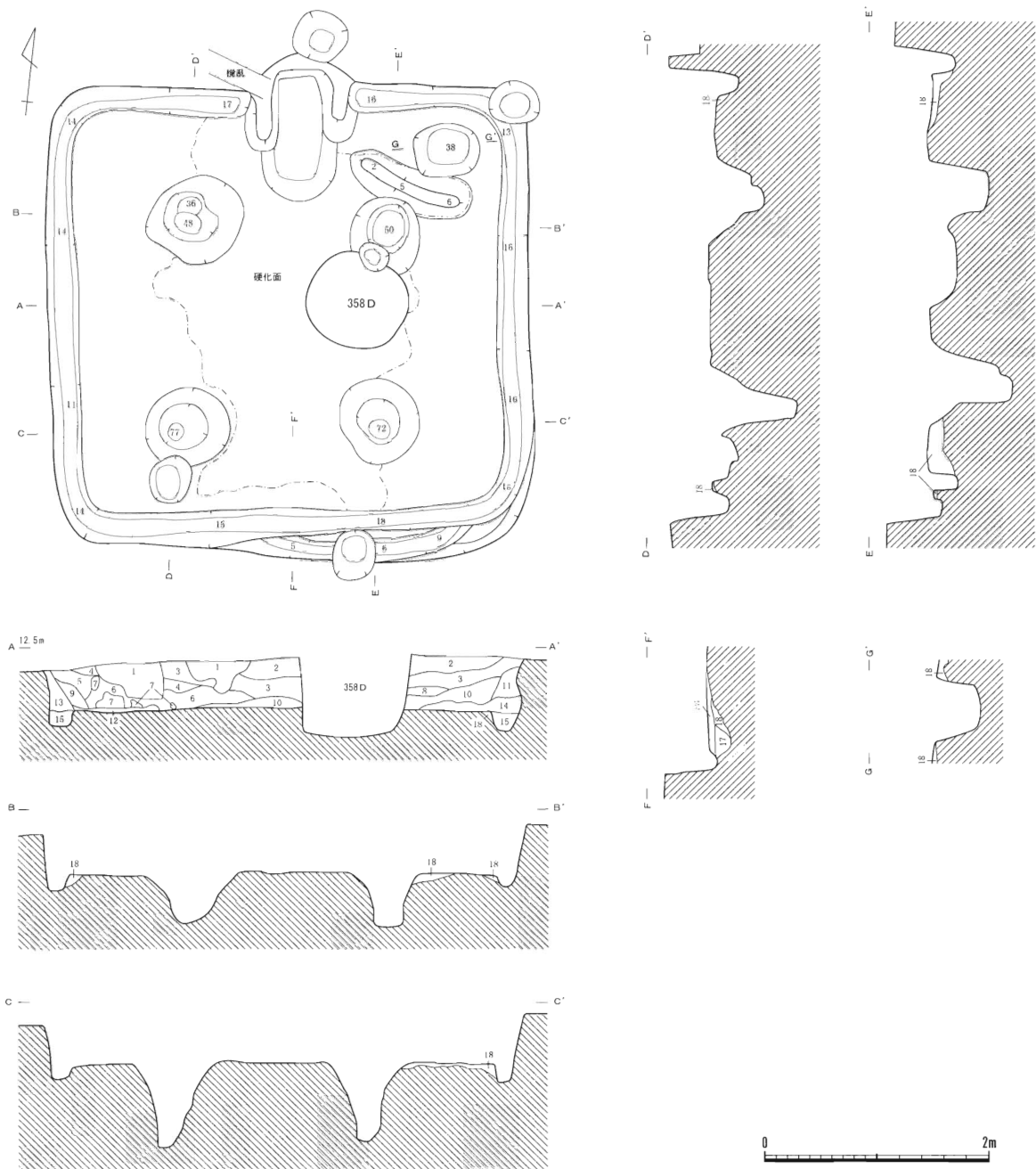
今回検出された住居跡は、すべて古墳時代後期の所産である。住居跡は3軒(158~160H)検出されたが、特に160Hはカクランが著しく、壁溝や床面の一部しか確認できない状況であった。時期は、158Hが7世紀中葉、159Hが7世紀前葉、160Hが6世紀前葉に位置付けられる。

### (2) 住居跡

#### 158号住居跡

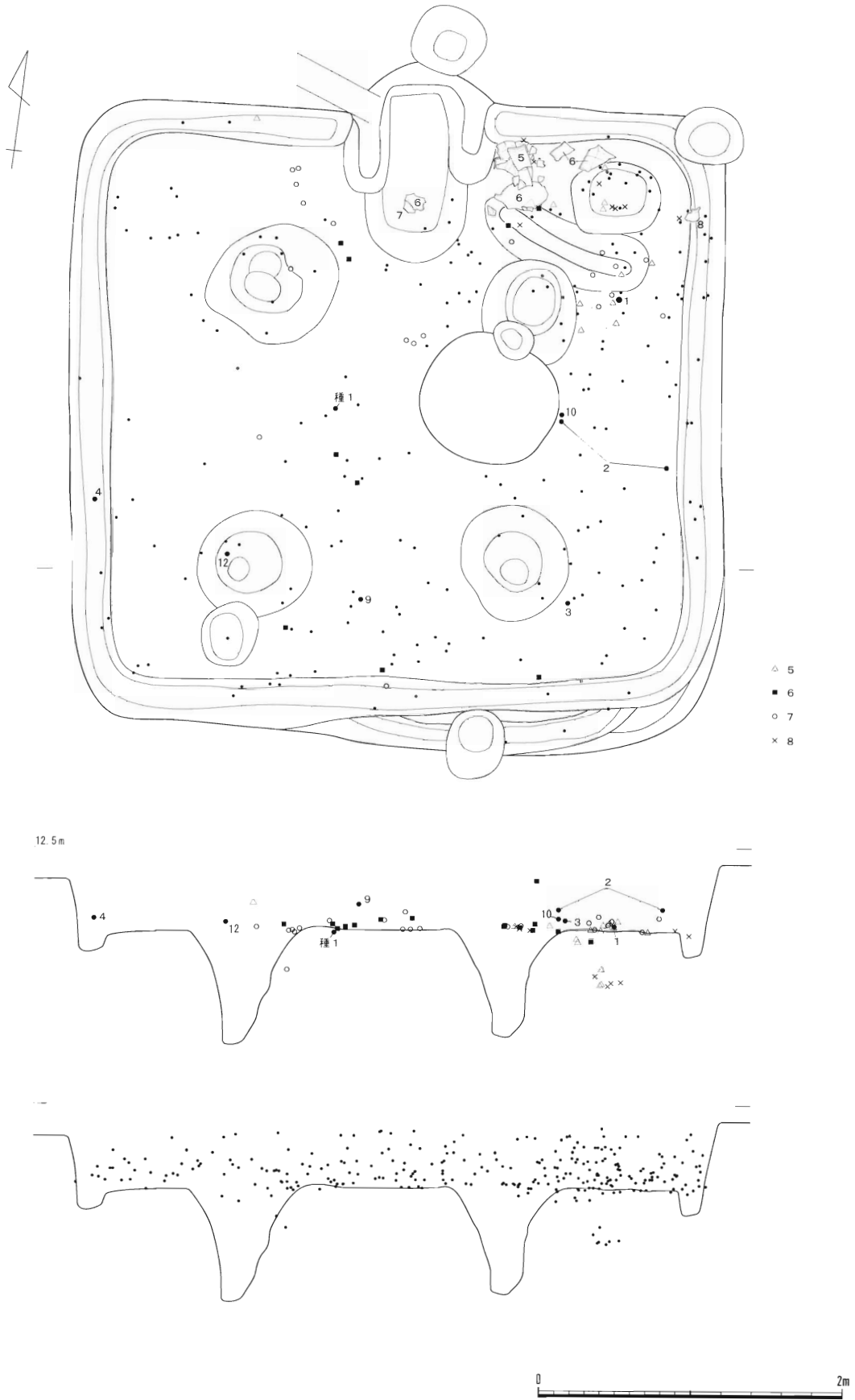
#### 遺 構 (第32~34図)

[住居構造] 33Mと358Dに切られる。(平面形)ほぼ正方形。(規模)4.30×4.28m。(壁高)35cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)カマドを除いて巡らされていたが、南壁では一部2重になっており内側の壁溝は上に床が貼られていた。上幅18~30cm・下幅6~16cm・深さ5~18cmを測る。(床面)南壁の中央からカマド前面にかけて、よく硬化していた。住居中央はほぼ直床で、壁際に2~2.2cmの厚さで貼床が施されていた。(カマド)北壁のほぼ中央に位置するが、一部後世のピットと攪乱により壊されている。長さ134cm・幅100cm・壁への掘り込み30cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築されていたと思われる。煙道は40°程の勾配で立ち上がっている。燃焼部とその付近の袖部内側は焼けて赤化していた。(柱穴)支柱穴は4本で北西のもののみ重複形態をとっている。(貯蔵穴)北東コーナーに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。規模は58×48cm・

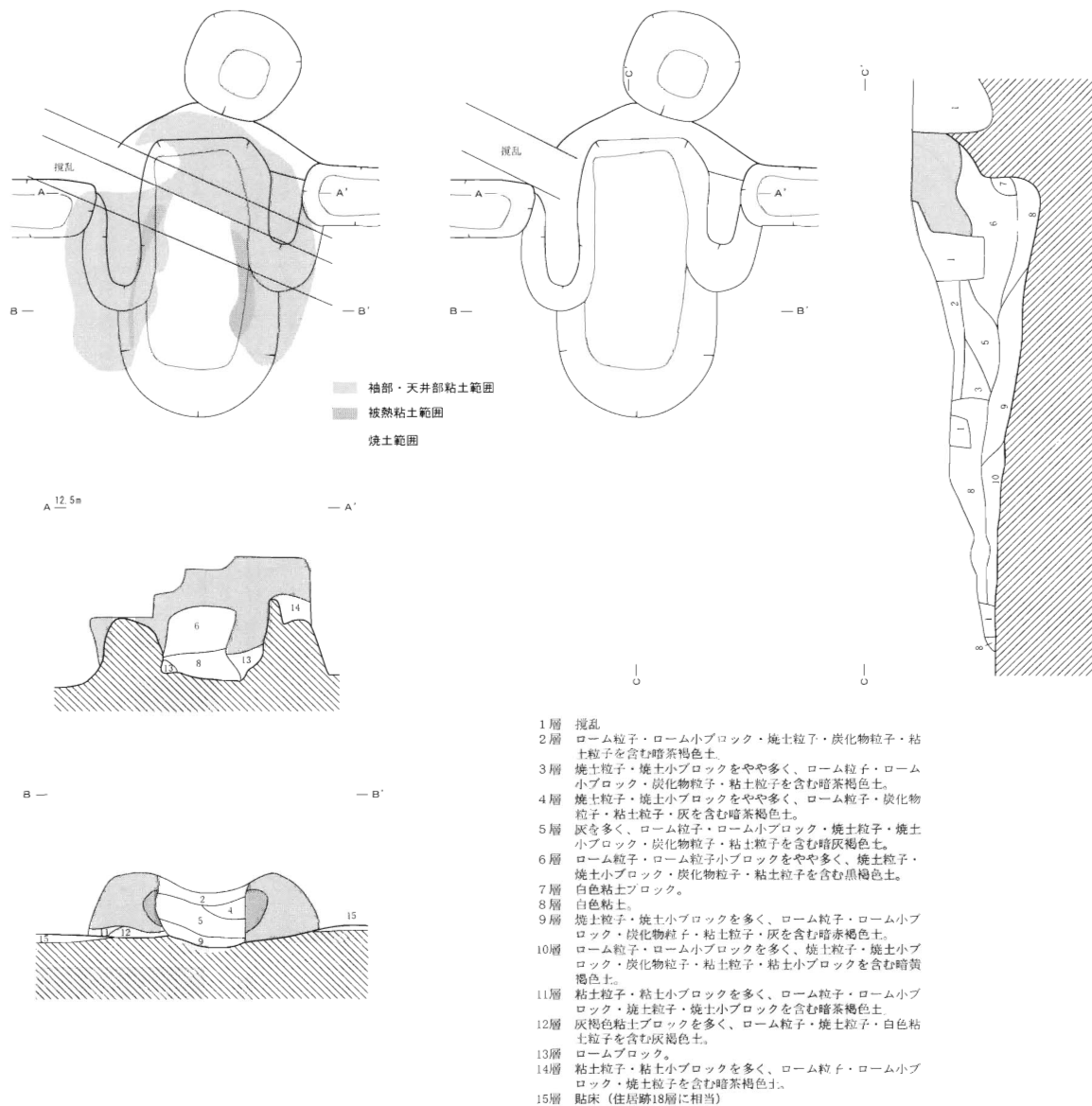


- 1層 寝乱。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 6層 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒色土。
- 7層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 9層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・炭化物粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
- 16層 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。(詰床)
- 17層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- 18層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。(詰床)

第32図 158号住居跡 (1/60)



第33図 158号住居跡遺物出土状態 (1/40)



第34図 158号住居跡カマド（1/30）

深さ38cmを測る。南西側に高さ2～6cmの凸堤が確認できた。覆土は、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。（覆土）17層に分層される。

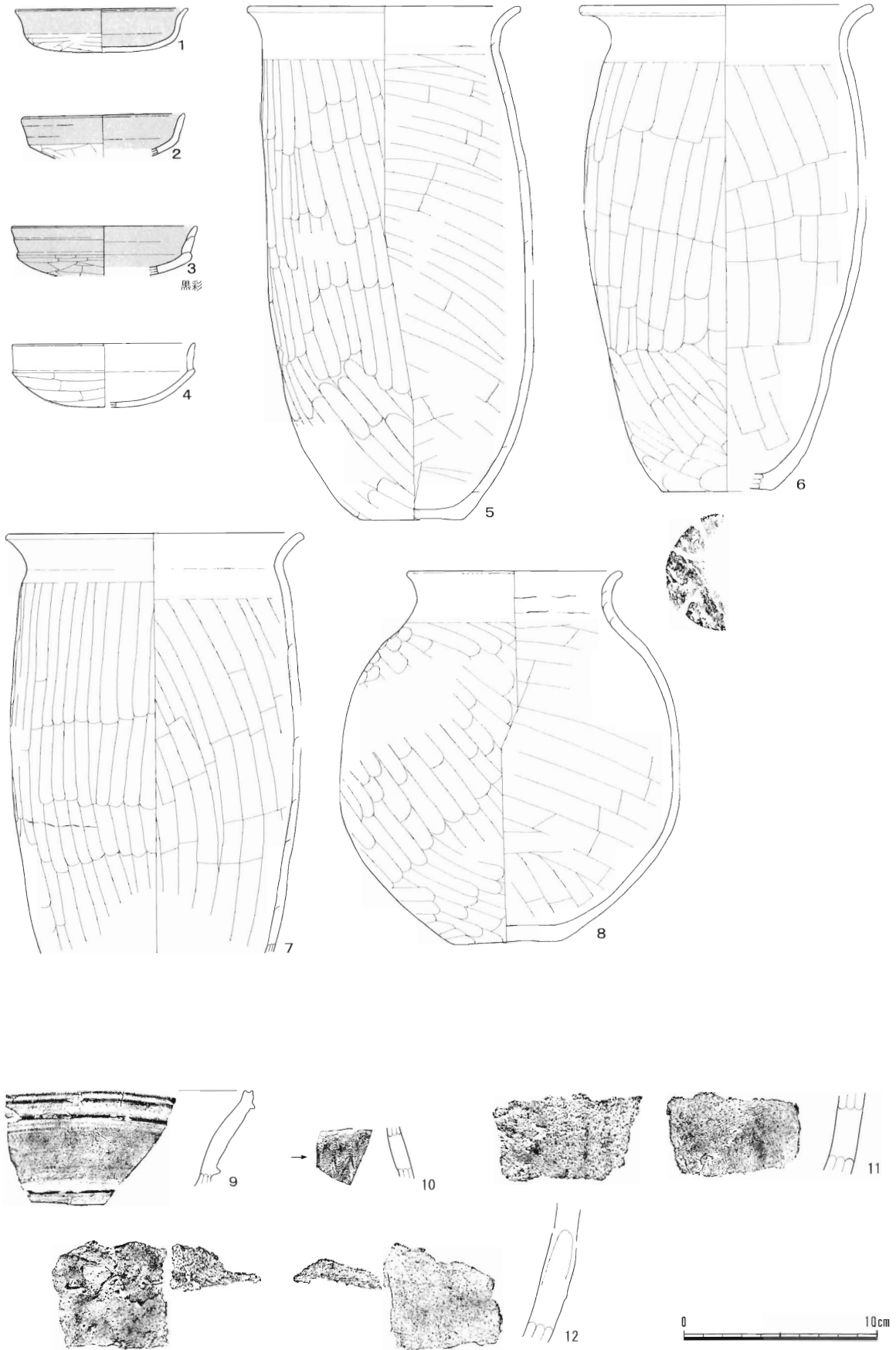
〔遺物〕住居全体から多くの土器が出土しているが、特にカマド右横を中心に復元可能な土器が多く出土した。また、小破片であるが、内外面に粗いハケ目調整が施される不明土製品が比較的まとまって出土した。その他、炭化種実（モモ）1点が出土している（付編参照）。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀中葉）。

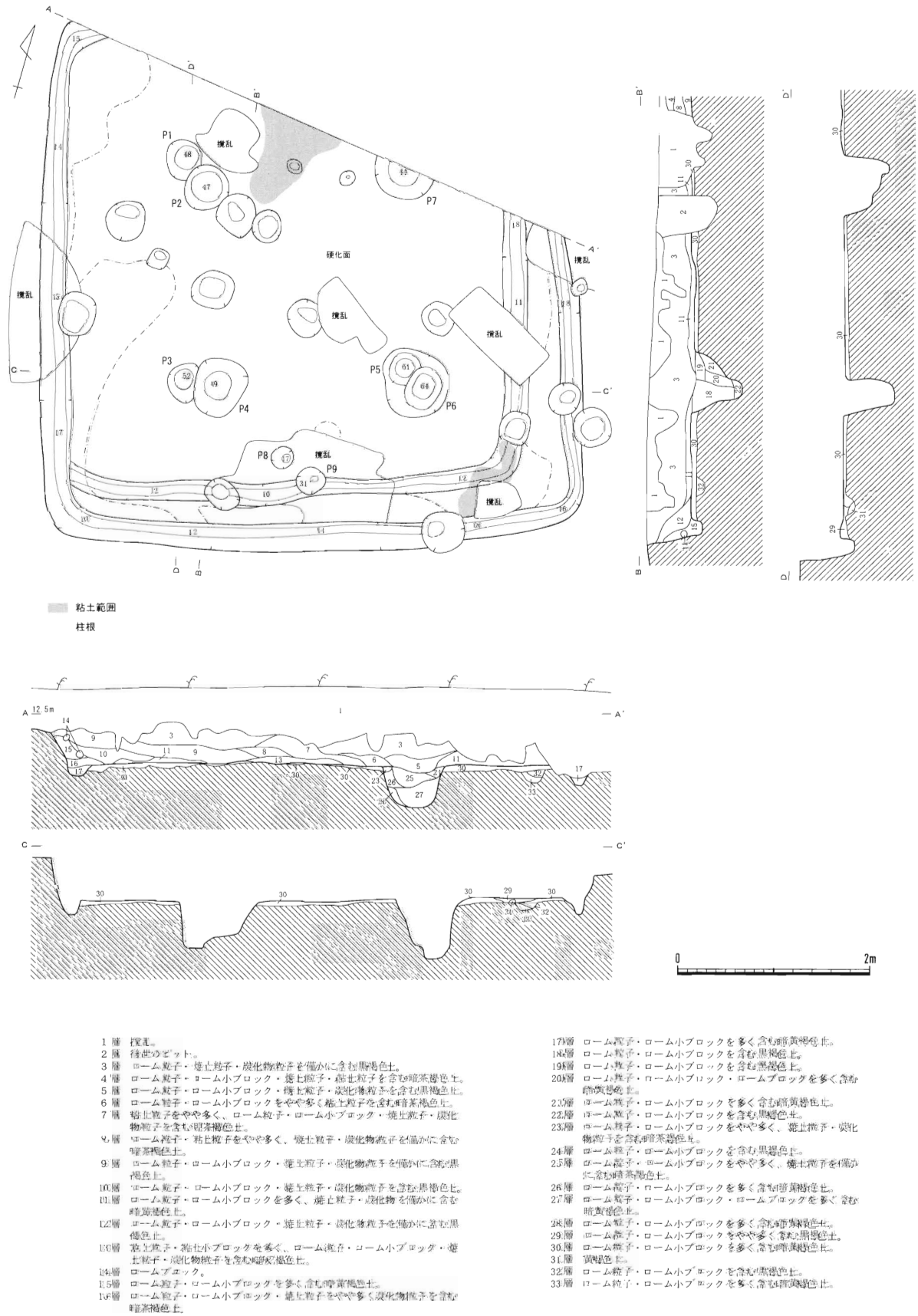
〔所見〕住居南西隅の覆土中には焼土粒子・焼土小ブロックが多く含まれることから、焼失住居と考えられる。

遺物（第35図、第20表）

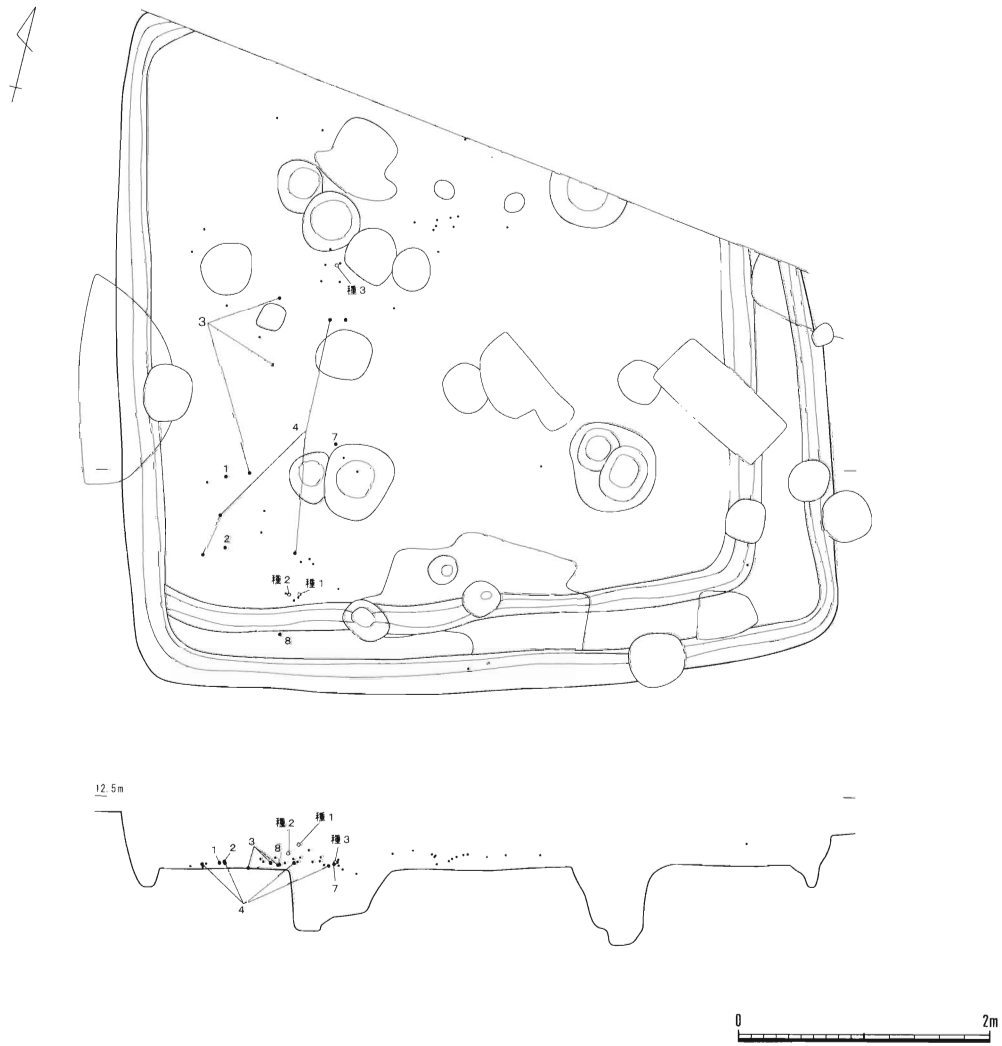




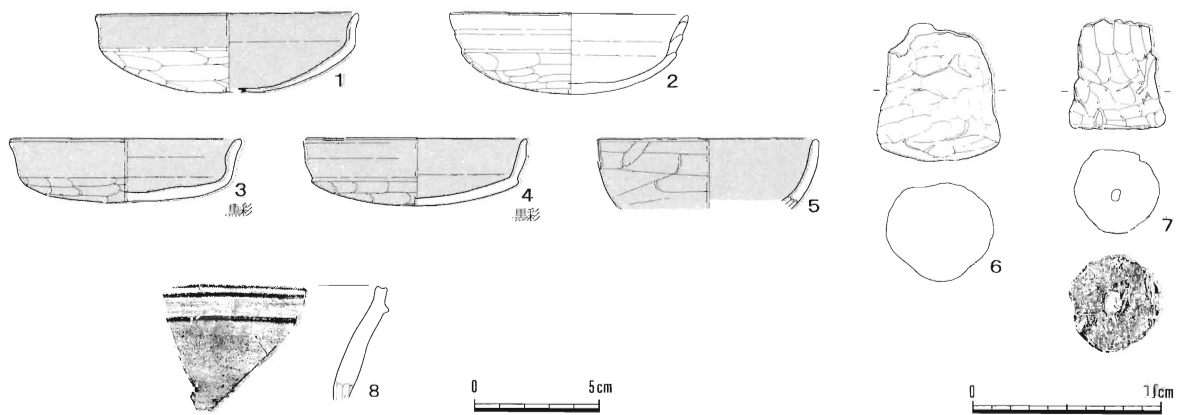
第35図 158号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第36図 159号住居跡 (1/60)



第37図 159号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第38図 159号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



( ) は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第35図1	土師器 杯	3.1	(12.0)	—	いわゆる比企型杯／口縁部は外反／内面口縁部直下に沈線／内面及び外面口縁部は赤彩／遺存状態悪くパラロイドB72溶液含浸	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り	貯蔵穴の南側の凸堤右端の床面上	40%
第35図2	土師器 杯	(3.1)	(11.4)	—	いわゆる比企型杯／口縁部は外傾／内面口縁部直下に沈線／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り	東壁中央近くの覆土中(床上16cm)から散在	口縁部～体部小破片
第35図3	土師器 杯	(3.4)	(12.8)	—	いわゆる有段口縁杯／口縁部途中で有段2段／口縁部と底部の境に有段／内外面黒彩	胎土は淡黄褐色	ガラス質粒子・砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、底部は粗いヘラ削り	南東柱穴の東側の覆土中(床上8cm)	口縁部～体部小破片
第35図4	土師器 杯	4.5	(12.7)	—	口縁部は直立／口縁部と体部との境に断面三角形の有段	黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、底部ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り	西壁近くの覆土中(床上10cm)	40%
第35図5	土師器 甕	36.7	(18.7)	7.0	長甕／最大径は口縁部と胴部下半はほぼ同じ位置／口縁部は外反／外面は全体に焼けている	胎土は暗黄褐色	砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	カマド右横の床面上を中心に北東柱穴近くまで散在	70%
第35図6	土師器 甕	33.7	20.2	7.8	長甕／最大径は口縁部と胴部上半はほぼ同じ位置／口縁部は大きく外反／底部に木葉痕／外面は焼けている	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(スリップか)	カマド右横の床面上を中心に広い範囲に散在	80%
第35図7	土師器 甕	(29.2)	(20.6)	—	長甕／最大径は口縁部と胴部中位はほぼ同じ位置／口縁部は外反	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ていねいにヘラナデ(スリップか)	カマドを中心に広い範囲に散在	口縁部～胴部下半40%
第35図8	土師器 甕	25.8	(14.8)	7.0	丸甕／口縁部は外反／胴部下半に最大径をもつ／かなり歪んだ器形／外面全体が焼けている	胎土は暗黄褐色	砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴周辺の床面上から散在	40%
第35図9	須恵器 甕	—	—	—	口縁部／口唇部沈線状／口縁部直下と口頸部に1条凸帯／陶色製品	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内外面：回転ナデ	南西柱穴の東側の覆土中(床上34cm)	口縁部破片
第35図10	須恵器 器台	—	—	—	脚台部／櫛歯状工具による波状文／拓本中の「→」は透かし窓を示し、1ヶ所あり／160H-2と同一個体と思われる／陶器製品	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内面：回転ナデ	住居中央よりやや東側の覆土中(床上34cm)	脚台部小破片
第35図11	不明 土製品	—	—	—	古墳前期の大型壺の破片か	暗黄褐色	砂粒を多く含む	内面：横方向のハケ目調整／外面：縦方向の粗いハケ目調整	覆土中	破片
第35図12	不明 土製品	—	—	—	11と同一個体／古墳前期の大型壺の破片か／輪積痕が顕著で指頭押捺痕が観察できる	暗黄褐色	砂粒を多く含む	内面：横方向のハケ目調整／外面：縦方向の粗いハケ目調整	南東柱穴上の覆土中(床上34cm)	破片

第20表 158号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第38図1	土師器 杯	4.2	(14.0)	—	口縁部は外反／口縁部と底部との境に稜／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は暗黄褐色	砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	南西コーナーのほぼ床面上	50%
第38図2	土師器 杯	4.4	(12.8)	—	いわゆる有段口縁杯／口縁部途中で有段1段／口縁部と底部との境に有段／全体に摩耗し遺存状態悪い	明褐色	角閃石・砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、底部ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り後ナデ	南西コーナーのほぼ床面上	60%
第38図3	土師器 杯	3.5	(12.4)	—	口縁部は僅かに外反／口縁部と底部との境に有稜／内外面黒彩	胎土は暗褐色	角閃石・金雲母・砂粒を含む	内面：口縁部横ナデ、底部ヘラナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り後ナデ	西壁近くのほぼ床面上からやや散在	70%
第38図4	土師器 杯	3.7	(12.0)	—	有段杯／口縁部は途中でやや膨らみをもち外傾／口縁部と底部との境に有段／内外面黒彩か	黄褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面：口縁部横ナデ、底部はナデ／外面：口縁部横ナデ、底部ヘラ削り	南西コーナーのほぼ床面上から散在	30%
第38図5	土師器 杯	(3.8)	(11.8)	—	全体に半球状を呈する?形／内外面赤彩の可能性あり	暗黄褐色	砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：ヘラ削り	覆土中	口縁部～体部下半40%

第21表 159号溝跡出土遺物一覧(1)

(単位:cm)

( ) は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第38図6	土製品	-	-	-	支脚/円筒形/裾部はやや広がっている/現存高7.4cm・最大径6.4cm・重さ249.0g	暗茶褐色	砂粒をほとんど含まない	指頭による軽いナデか/指紋痕あり	覆土中	裾部のみ残存
第38図7	土製品	-	-	-	支脚/円筒形/裾部は膨らみをもって広がっている/8より細身/現存高5.8cm・最大径5.1cm・重さ130.0g	暗茶褐色	砂粒をほとんど含まない	指頭による軽いナデか/指紋痕あり	南西柱穴の北側の床面上	裾部のみ残存
第38図8	須恵器甕	-	-	-	口縁部/口唇部面取り/口縁部直下に1条凸帯/158H-9に類似あるいは同一個体か/陶邑製品	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内外面：回転ナデ	南西コーナーのほぼ床面上	口縁部小破片

第21表 159号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第39図1	須恵器器台	-	-	-	脚台部/脚台部下半は僅かに屈曲/2条凸帯/区画内は櫛歯状工具による連続刺突文/拓本中「↑」は透かし窓を示し、2ヶ所あり/陶邑製品	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内面：回転ナデ	調査区東境界近くの覆土中(床上7cm)	脚台部破片
第39図2	須恵器器台	-	-	-	脚台部/2条凸帯/区画内は櫛歯状工具による波状文/拓本中「→」は透かし窓を示し、1ヶ所あり/158H-10と同一個体と思われる/陶邑製品	灰色	白色砂粒を僅かに含む	内面：回転ナデ	覆土中	脚台部小破片

第22表 160号住居跡出土遺物一覧

(単位:cm)

1～4は土師器坏、5～8は土師器甕、9は須恵器甕、10は須恵器器台である。

11・12は不明土製品である。内外面に粗いハケ目調整が施されるもので、外面は特にスリップ状に粘土を貼った状況が観察できる。本住居跡から17点、159Hから4点が出土しているが、ここでは比較的に大きな破片2点を掲載した。これらは当初、土器ではなく、埴輪破片ではないかと判断したが、(財)埼玉県埋蔵文化財事業団の大谷 徹・栗岡 潤・福田 聖氏に鑑定して頂き、埴輪ではないという結論を得た。特に福田氏は古墳時代前期の大型壺の破片ではないかという意見であったが、ここでは不明土製品とし、今後の出土例を待って検討することにしたい。

### 159号住居跡

#### 遺構 (第36・37図)

〔住居構造〕住居北側は調査区域外である。160Hを切る。(平面形)方形。(規模)不明×5.60m。(壁高)33～46cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では全周する。南壁と東壁の内側には旧壁溝が確認できた。上幅16～30cm・下幅8～12cm・深さ10～18cmを測る。(床面)壁際を除きよく硬化していた。貼床は2～8cmの厚さで施されていた。(カマド)住居北側から粘土が検出されているため、北壁に設置されている可能性がある。(柱穴)支柱穴7本と入口梯子穴2本が検出された。P1・P3・P5・P8は旧住居のものと思われる。(覆土)31層に分層される。

〔遺物〕土師器坏、須恵器甕、土製支脚が出土している。また、158Hの不明土製品と同一と思われる小破片4点が出土した。その他、炭化種実(モモ)1点が出土している(付編参照)。

〔時期〕古墳時代後期(7世紀前葉)。

〔所見〕旧壁溝と旧柱穴が確認されたことから、住居の拡張が行われたと思われる。

**遺物** (第38図、第21表)

1～5は土師器坏、6・7は土製支脚、8は須恵器甕である。

## 160号住居跡

**遺構** (第39図)

[住居構造] 159H・356D・33Mに切られ、さらに攪乱により壊されているため、詳細は不明である。(平面形) 方形か。(規模) 不明。(壁高) 確認できた部分では23cmを測る。(壁溝) 検出されなかったが、上幅20～28cm・下幅10cm・深さ19～20cmの間仕切りと思われる溝が確認できた。(柱穴) 間仕切り溝付近の深さ105cmのものが支柱穴と思われる。(覆土) 6層に分層される。

[遺物] 須恵器器台の小破片2点が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀前葉)。

**遺物** (第39図、第22表)

1・2は須恵器器台の脚台部である。

## 第4節 平安時代の遺構と遺物

## (1) 概要

第46地点で検出された溝跡(33M)と同一遺構と考えられる。時期については、第46地点で9世紀後～末葉と判断したが、本地点でも良好な遺物が出土しなかったため、詳細時期を設定できなかった。

## (2) 溝跡

## 33号溝跡

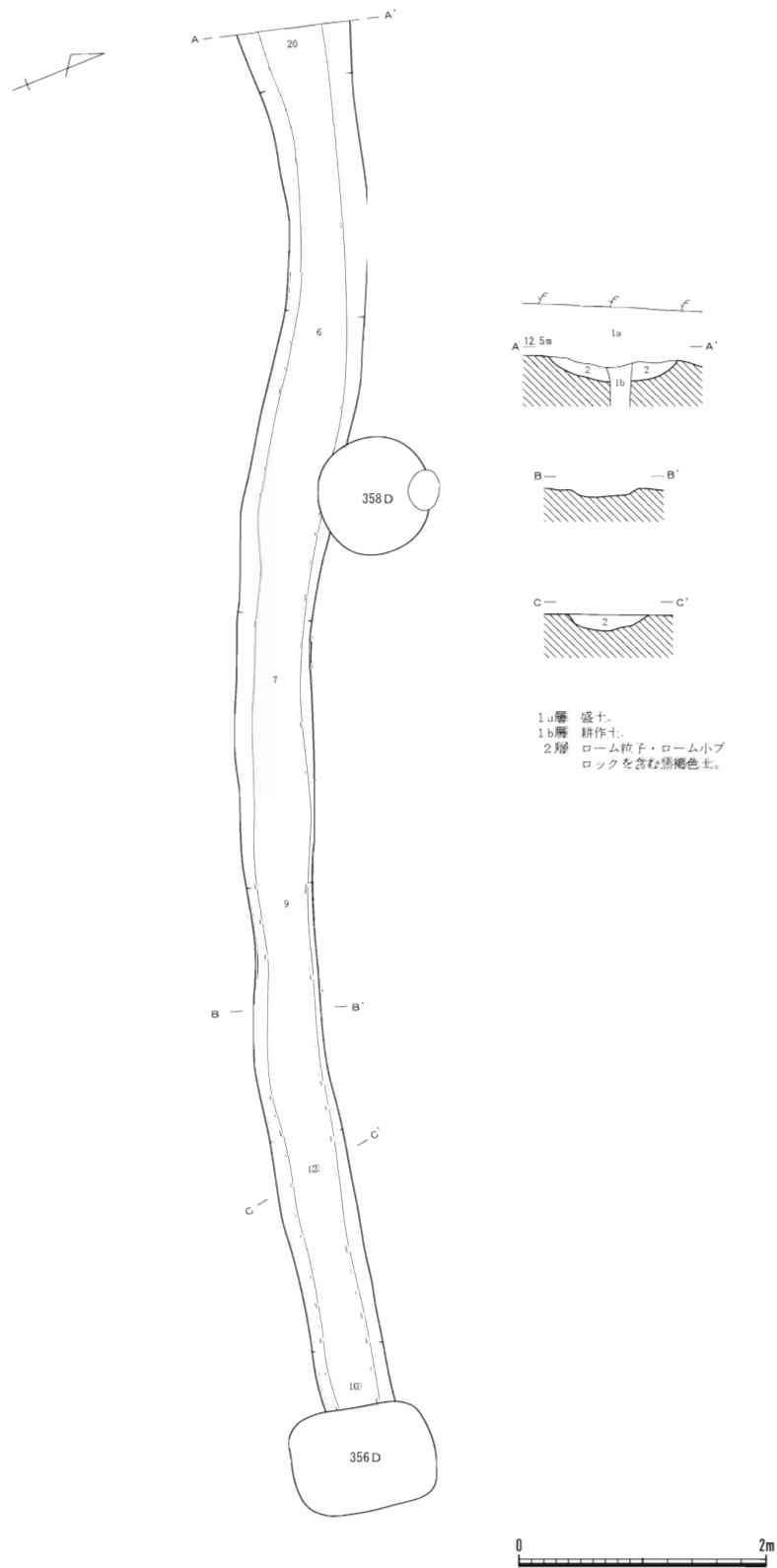
**遺構** (第40図)

[構造] 平成15年度の第46地点で検出された33Mの東側延長部である。158・160Hを切り、356・358Dに切られる。(規模) 確認できた長さは11.2mで、上幅60～83cm・下幅35～50cm・深さ6～20cmを測る。(走行方位) N-75°-W。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土を基調とする。

[遺物] 須恵器坏、土師器甕の小破片が僅かに出土した。

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版16-2-1	須恵器坏	-	-	-	底部/底部器厚4mm	灰色	白色砂粒を含む	底部に回転糸切り痕あり	覆土中	底部小破片
図版16-2-2	須恵器坏	-	-	-	底部/底部器厚5mm	灰色	白色砂粒を含む	底部に回転糸切り痕あり	覆土中	底部小破片
図版16-2-3	須恵器坏	-	-	-	底部/底部器厚6mm/1・2に比べやや器厚が厚め	灰褐色	白色針状物質を含む	底部に回転糸切り痕あり	覆土中	底部小破片
図版16-2-4	土師器甕	-	-	-	口縁部/口縁部は僅かに外反/器厚4mm/内面は煤けている	暗黄褐色	砂粒を含む	内外面：横ナデ	覆土中	口縁部小破片
図版16-2-5	土師器甕	-	-	-	胴部/器厚2mm	明茶褐色	砂粒を含む	内面：ヘラナデ/外面：粗いヘラ削り	覆土中	胴部小破片

第23表 33号溝跡出土遺物一覧



第40図 33号溝跡 (1/60)



[時期] 平安時代（9世紀後～末葉）。

**遺物**（図版16-2、第23表）

いずれも小破片で、1～3は須恵器杯の底部、4・5は土師器甕で、4は口縁部、5は胴部である。

## 第5節 中世以降の遺構と遺物

### （1）概要

中世以降の遺構は、土坑1基（358D）・地下坑1基（356D）が検出された。358Dは用途不明の土坑であるが、坑底近くから粘土ブロックと礫、白い灰が検出されたことから、カマド跡の可能性はある。

356Dは入口竪坑部と5基の横坑状主体部で構成される地下坑の形態をもつ。時期は、18世紀後半から19世紀代であろう。

### （2）土坑

#### 356号土坑

**遺構**（第41図）

[構造] 地下坑である。入口竪坑部と5基の横坑状主体部で構成されている。主体部は入口竪坑部の北側に1基、西側に3基、東側に1基で北側から時計回りに主体部A～Eとする。（入口竪坑部）開口部は1.15×0.85mの長方形を呈し、東側に2ヶ所と西側に3ヶ所の足掛け状の掘り込みをもつ。坑底面までの深さは2.45mを測る。（主体部）坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部はアーチ状を呈する。壁と天井部には工具痕が確認できた。東西に延びる横坑の一部を共通の通路としているが、危険防止のため重機により天井部を除去したため、通路部分の詳細は不明である。主軸方位はA・C・EがほぼN-S。B・DがほぼE-Wである。〈主体部A〉入口竪坑部の北側に位置し、主体部の中では最大である。奥行き2.70m・幅0.9～1.40m・天井部までの高さ1.0mを測る。入口近くの両端には、照明用具を置いた可能性のある掘り込みが確認できた。〈主体部B〉東西に延びる横坑の東端に位置し、奥行き1.8m・幅1.05～1.3m・天井部までの高さ0.95mを測る。〈主体部C〉入口竪坑部から西側に1m程離れて位置し、奥行き1.2m・幅0.75～1.05m・天井部までの高さ0.82mを測る。〈主体部D〉東西に延びる横坑の西端に位置し、奥行き0.6m・幅0.9m・天井部までの高さ0.85mを測る。〈主体部E〉主体部Aの西側に1m程離れて位置し、奥行き1.2m・幅0.7m・天井部までの高さ0.7mを測る。

[遺物] 陶磁器・土器・土製品・瓦・石製品・金属製品など多くの遺物が出土した。

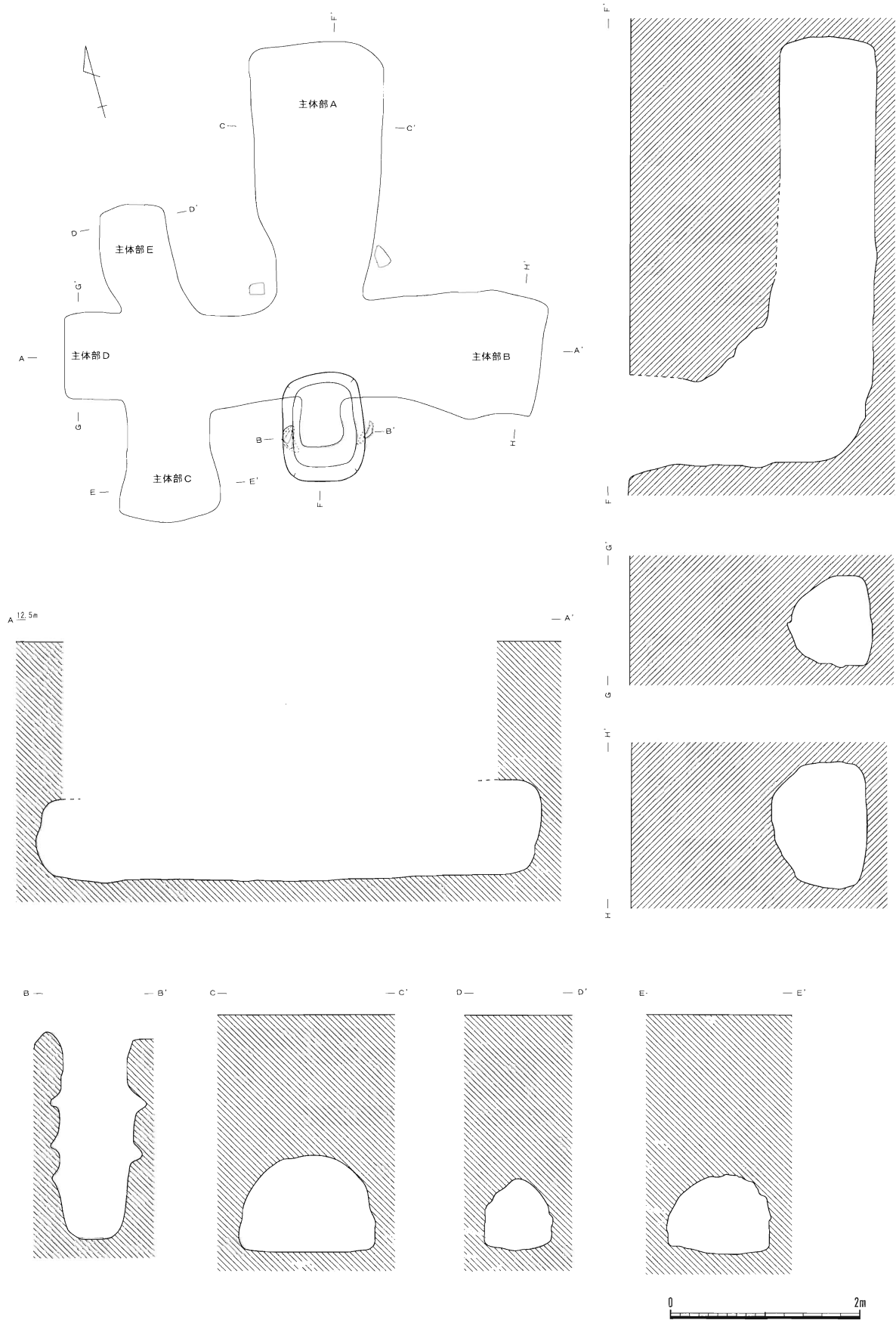
[時期] 近世（18世紀後半～19世紀代）。

**遺物**（第42図、図版16-3、第24表）

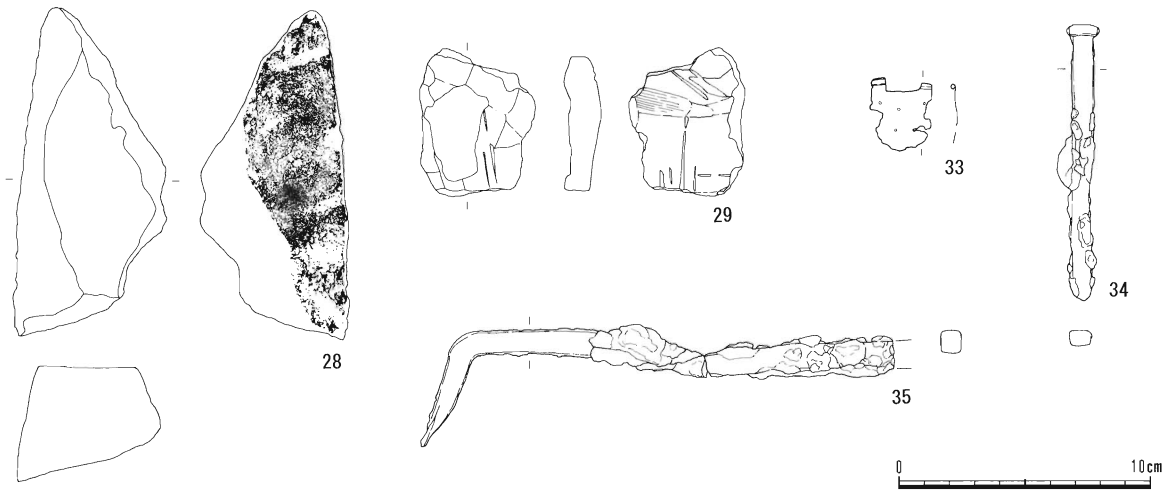
1～18は磁器、19～25は陶器、26は土器である。

27は土製品で、面摸（めんかた）の小破片である。高さ2.9cm・幅2.5cm・厚さ0.5cm・重さ3.6g。

28・29は石製品で、28は石臼の上皿の破片であろう。長さ13.3cm・幅6.0cm・厚さ4.6cm・重さ378.0g。29は砥石で、長さ5.7cm・幅4.6cm・厚さ1.21cm・重さ40.6g。使用面は裏面の1面で、表面には成形痕の条線が確認できる。



第41図 356号土坑 (1/60)



第42図 356号土坑出土遺物 (1/3)

30・31は椀瓦の破片である。30は長さ9.3cm・幅5.6cm・厚さ1.5cm。31は8.7cm・幅5.2cm・厚さ1.5cmで、金雲母を多く含む。

32は鋳型の破片であろうか。全体に黒褐色を呈し、粘土中にはスサが混入している。鍋などの大型製品用のものであるかもしれない。

33は銅製品で蝶番（ちょうつがい）である。長さ3.0cm・最大幅2.5cm・重さ0.8g。舌状を呈する本体部分の基部には径0.5mmの軸通部を2ヶ所有する。また、本体部分には鋸留用の小孔が4ヶ所穿たれている。34・35は鉄製品。34は釘で、長さ11.0cm・頭部幅1.2cm・軸幅0.9cm・重さ24.0g。35は鋸（かすがい）で、長さ18.7cm・最大幅1.3cm・最大厚0.9cm・重さ71.0g。

### 358号土坑

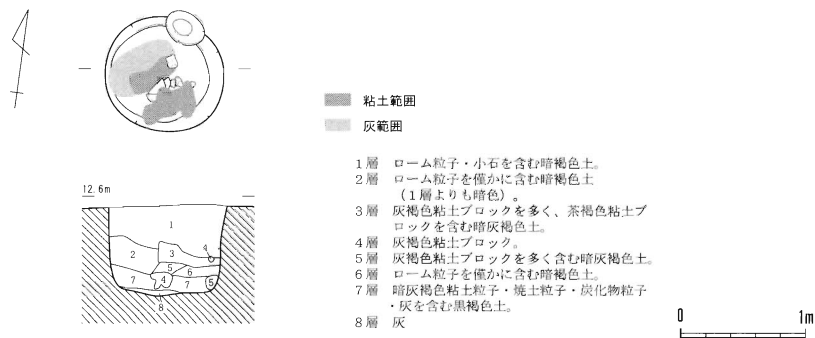
#### 遺構 (第43図)

[構造] 158Hを切る。坑底近くから粘土ブロックと礫が、さらにその下から白い灰が検出された。(平面形) ほぼ円形。(規模) 径約95cm。(深さ) 70cm。(覆土) 8層に分層される。

[遺物] 陶磁器・土器・土製品・瓦が出土した。

[時期] 近世 (18世紀後半～19世紀前半か)。

[所見] カマド跡の可能性はあるが、用途不明。



第43図 358号土坑 (1/60)

( )内は現存値・推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
図版16-3-1	356D	磁器	盃	2.5	6.0	2.4	白磁/ロクロ成形/被熱	肥前系	18c 後半
図版16-3-2	356D	磁器	ぐい飲み	(3.1)	—	2.8	染付/化学コバルト/ロクロ成形/外面:風景文、高台脇2重圏線、底裏角寿銘	瀬戸	19c 後半以後
図版16-3-3	356D	磁器	ぐい飲み	(2.2)	—	—	染付/化学コバルト/ロクロ成形/外面:文様あり	肥前系	19c 後半以後
図版16-3-4	356D	磁器	紅皿	1.4	(5.6)	—	白磁/型打成形/外面:蜻唐草印刻文/外面口縁部直下~底部は無釉	肥前系	18c 後半
図版16-3-5	356D	磁器	紅皿	1.2	(4.6)	1.2	白磁/型打成形/外面口縁部直下~底部は無釉	肥前系	18c 後半
図版16-3-6	356D	磁器	碗	(2.4)	—	—	ロクロ成形/化学コバルト/型紙刷	瀬戸?	18c 後半以後
図版16-3-7	356D	磁器	湯飲茶碗	(4.3)	—	—	染付/ロクロ成形/外面:口唇部圏線、口縁部直下2重圏線、高台脇2重圏線/化学コバルト	瀬戸	19c 後半
図版16-3-8	356D	磁器	湯飲茶碗	(3.9)	—	—	染付/ロクロ成形/内面:口縁部直下2重圏線/外面:口縁部直下・体部下端1重圏線	肥前系	19c 前半
図版16-3-9	356D	磁器	小丸碗	—	—	—	染付/ロクロ成形/外面:草花文	肥前系	19c 前半
図版16-3-10	356D	磁器	小丸碗	(4.9)	—	—	染付/ロクロ成形/外面:高台脇・高台部1重圏線	肥前系	19c 前半
図版16-3-11	356D	磁器	端反碗	3.8	—	(3.1)	染付/ロクロ成形/内面:見込み五弁花/外面:福寿銘文	肥前系	18c 後半
図版16-3-12	356D	磁器	碗	(4.1)	—	(2.5)	染付/ロクロ成形/内面:見込み1重圏線に五弁花/外面:植物文、高台脇1重圏線、高台部2重圏線	肥前系	19c 前半
図版16-3-13	356D	磁器	蓋	(3.0)	—	—	染付/ロクロ成形/外面:七宝結文	肥前系	18c 後半
図版16-3-14	356D	磁器	蓋物	6.3	—	(9.2)	染付/ロクロ成形/外面:蜻唐草文/見込み1重圏線/内面:無文	肥前系	18c 後半
図版16-3-15	356D	磁器	皿	2.2	—	(7.6)	染付輪禿皿/ロクロ成形/内面:唐草文に2重圏線、見込み五弁花、砂付着/外面:無文	肥前系	18c 後半
図版16-3-16	356D	磁器	爛德利	—	—	—	体部小破片/ロクロ成形/外面:灰釉	?	?
図版16-3-17	356D	磁器	爛德利	—	—	—	染付/ロクロ成形/外面:竹文/比熱	肥前系	?
図版16-3-18	356D	磁器	急須	—	—	—	染付/ロクロ成形/注口下側長さ4.3cm/注口内面7孔/外面:文字文、2重圏線	瀬戸?	19c
図版16-3-19	356D	陶器	鉢	—	—	—	口縁部/ロクロ成形/外面口縁部直下に1条線/内外面に黄釉	瀬戸	18c 後半~19c 前半
図版16-3-20	356D	陶器	德利	—	—	—	肩部/ロクロ成形/外面:灰釉	瀬戸	18c 後半~19c 前半
図版16-3-21	356D	陶器	皿	(2.5)	—	—	削り出し高台/ロクロ成形/内面:灰釉/外面:無釉	瀬戸	18c 後半
図版16-3-22	356D	陶器	土瓶蓋	1.2	—	—	受部径4.3cm・最大径5.9cm/ロクロ成形/摘み貼付け	信楽系	19c
図版16-3-23	356D	陶器	蓋	3.2	—	—	受部径6.1cm・最大径8.7cm/ロクロ成形/摘み貼付け(欠損)/外面:鉄釉/内面:無釉/胎土は茶褐色	?	19c
図版16-3-24	356D	陶器	土瓶	(4.0)	—	—	底部は上底状/ロクロ成形/外面:灰釉/体部下半~底部は無釉/外面に煤付着	信楽系	19c
図版16-3-25	356D	陶器	灯明具	(5.3)	—	6.2	受部径4.2cm/ロクロ成形/灰釉/底面無釉/油溝半月形	瀬戸	19c 前半
図版16-3-26	356D	土器	焙烙	(1.1)	—	—	底部/内面及び外面底部褐色、外面口縁部黒色	在地系	?
図版17-1-1	358D	磁器	皿	—	—	—	口縁部小破片/内面:草花文/外面:	肥前系	18c 後半
図版17-1-2	358D	陶器	ぐい飲み	—	—	—	口縁部小破片	瀬戸	?
図版17-1-3	358D	陶器	皿	—	—	—	口縁部小破片	唐津	17c 後半
図版17-1-4	358D	陶器	皿	—	—	—	底部小破片/鉄釉	瀬戸	18c 後半~19c 前半
図版17-1-5	358D	陶器	德利	—	—	—	体部/外面鉄釉	瀬戸	18c 後半~19c 前半
図版17-1-6	358D	土器	焙烙	4.4	—	—	口縁部内外面横ナデ/底部を除き内外面黒色	在地系	18c 前半
図版17-1-7	358D	土器	焙烙	—	—	—	小破片/口縁部内外面横ナデ/内外面黒色	在地系	?

(単位: cm)

第24表 土坑出土の陶磁器・土器一覧

**遺物** (図版17-1、第24表)

1は磁器、2～5は陶器、6・7は土器である。

8・9は素焼人形の小破片である。いずれも何を象ったかは不明であるが、8は上端に直径3mmの穿孔をもつ。9は袴の裾部の一部であろうか。

10は瓦の小破片と思われる。色調は暗橙色を呈し、粘土中には雲母・砂粒を含む。

## 第6節 遺構外出土遺物

ここでは、第46地点同様に表土や攪乱そして遺構内であるが、明らかに混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱うことにする。

遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器・土器、古墳・平安時代の土器、中近世の陶磁器・土器・石製品(砥石)が出土した。そのうち、古墳・平安時代の土器については小破片であったため、縄文時代と中・近世の遺物について説明する。

**(1) 縄文時代の石器** (第44図1～5、第25表)

1は石鏃未製品、2～5は剥片である。石材はすべて黒曜石である。

**(2) 縄文時代の土器** (第44図6～27、第26表)

縄文時代の遺物は前期の諸磯式土器を中心に出土している。6はLの撚糸文を持ち、やや外反する深鉢の口縁部片で、早期の稻荷台式と思われる。城山遺跡での早期撚糸文系土器の出土は例が少ない。

7～9は早期条痕文系の土器片である。いずれも貝殻条痕文以外の文様は認められない。

10・11は前期の羽状縄文系の土器片と思われるが、胎土中の繊維混入は僅かである。

12～24は前期後葉の諸磯式土器の土器片である。多くが沈線文を地文に持つ。25は不明の土器である。

26・27は中期中葉～後葉の土器片と思われる。

**(3) 中・近世の遺物** (第44図42、図版17-28～42、第27表)

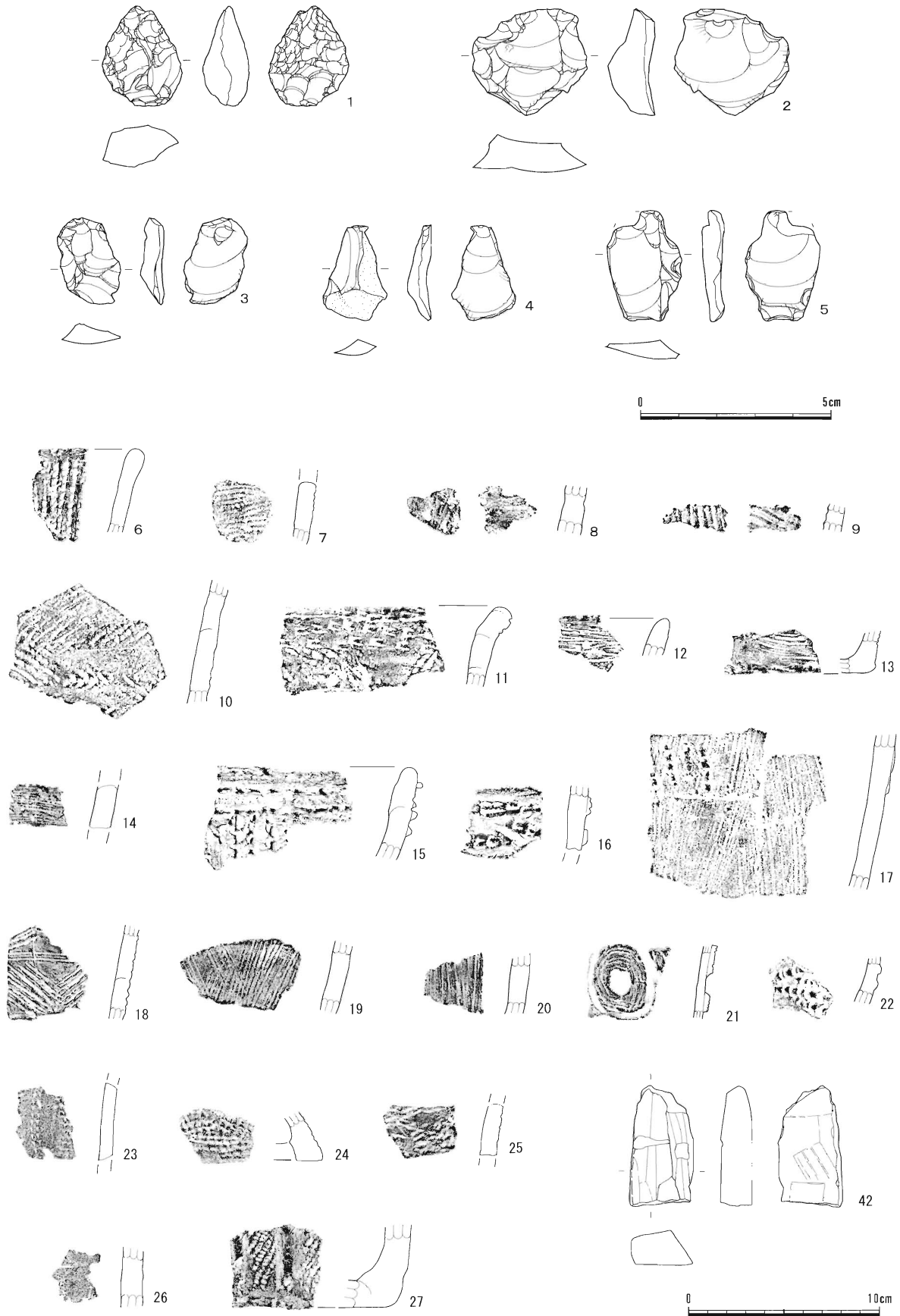
28～30は磁器、31～39は磁器、40・41は土器である。

42は砥石である。長さ6.3cm・幅3.3cm・厚さ1.8cm・重さ49cm。下端は欠損する。

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	備考
第44図1	石鏃未製品	黒曜石	26.64	20.87	12.11	5.6	完形	
第44図2	剥片	黒曜石	27.23	29.41	12.04	7.1	完形	
第44図3	剥片	黒曜石	24.11	15.07	6.62	1.8	完形	
第44図4	剥片	黒曜石	24.45	16.67	6.42	1.2	完形	
第44図5	剥片	黒曜石	29.25	19.86	5.93	2.9	上部欠損	被熱

(単位: mm・g)

第25表 遺構外出土の石器一覧



第44図 遺構外出土遺物 (2/3・1/3)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					織	角	礫	砂	他		
第44図6	口縁	L撚糸文	褐色	稲荷台?				○		159H	
第44図7	胴	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○			○	白	160H	繊維極めて少量
第44図8	胴	貝殻条痕文	褐色	条痕文系	○			○		158H	
第44図9	胴	貝殻条痕文	明褐色	条痕文系	○					表土	
第44図10	胴	無節の羽状縄文	暗褐色	前期		○		○	雲	158H	
第44図11	口縁	竹管による3列の刺突文/R縄文	明褐色	黒浜	○			○	ガ	159H	繊維極めて少量
第44図12	口縁	竹管による横位沈線文	暗赤褐色	諸磯b				○		表土	
第44図13	底	竹管による横位沈線文	赤褐色	諸磯b				○		159H	
第44図14	胴	竹管による横位沈線文	明褐色	諸磯				○		159H	
第44図15	口縁	竹管による沈線文/結節浮線文	褐色	諸磯c				○		159H	
第44図16	胴	粘土紐を貼付した上に竹管による刺突文	褐色	諸磯b~c				○	○	158H	
第44図17	胴	竹管による沈線文/結節浮線文	赤褐色	諸磯c		○	○	○		159H	
第44図18	胴	竹管による鋸歯状の沈線文	赤褐色	諸磯c?				○	○	160H	
第44図19	胴	竹管による縦位沈線文	黒褐色	諸磯c		○		○		158H	
第44図20	胴	竹管による縦位沈線文	褐色	諸磯c		○		○		159H	
第44図21	胴	沈線による楕円状文	暗褐色	諸磯?				○	○	160H	
第44図22	胴	同心円状の結節浮線文	褐色	諸磯c				○		159H	
第44図23	胴	3本の竹管による結節沈線文	褐色	諸磯c				○		158H	
第44図24	底	3本の竹管による結節沈線文	赤褐色	諸磯c		○		○		160H	
第44図25	胴	R撚糸文?	明褐色	不明		○		○		表土	
第44図26	胴	無文	褐色	阿玉台?		○	○	○	金	160H	
第44図27	底	隆帯による懸垂文/R L縄文	明赤褐色	加曾利 E II		○		○		160H	

※織：繊維 角：角閃石 礫：細礫 砂：砂粒 白：白色粒子 雲：雲母 ガ：ガラス状粒子 金：金雲母

第26表 遺構外出土の縄文土器一覧

( ) は現存値及び推定値

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴	推定産地	時期
			器高	口径	底径			
図版17-2-28	磁器	碗	-	-	-	口縁部小破片/染付/ロクロ成形/外面：風景文/内面：口縁部直下2重圏線	肥前系	18c 中
図版17-2-29	磁器	碗	(2.4)	-	-	底部小破片/染付/ロクロ成形/外面：草花文、高台部1重圏線、高台部内2重圏線/内面：無文	肥前系	18c 中
図版17-2-30	磁器	碗	(1.7)	-	-	体部下半~底部破片/染付/ロクロ成形/外面：草花文、高台部2重圏線/内面：見込み寿文	肥前系	18c 中
図版17-2-31	陶器	菊皿	-	-	-	口縁部小破片/ロクロ成形/外面底部を除き灰釉	瀬戸	16c 後半
図版17-2-32	陶器	天目茶碗	-	-	-	体部小破片/ロクロ成形/内外面鉄釉(天目釉)/胎土灰色	瀬戸	16c 後半
図版17-2-33	陶器	瓶?	(1.8)	-	-	底部小破片/型づくり/外面灰釉、外面底部及び内面は無釉/胎土灰白色	?	?
図版17-2-34	陶器	碗	(2.3)	-	(3.9)	半磁器/体部~底部破片/染付/ロクロ成形/外面：草花文、高台部太線1重圏線+2重圏線/胎土黄白色	肥前系	18c 中
図版17-2-35	陶器	短頸壺	-	-	-	頸部~胴部小破片/ロクロ成形/外面灰釉	常滑	14c
図版17-2-36	陶器	灯明具	(5.8)	-	(6.4)	台付/ロクロ成形/油溝半月形/胎土色調は明橙色/脚台部内面を除き鉄釉/胎土は橙色	在地系	19c 前半
図版17-2-37	陶器	土鍋	-	-	-	口縁部小破片/内外面鉄釉/胎土暗黄褐色	在地系	近世
図版17-2-38	陶器	播鉢	-	-	-	胴部小破片/内外面鉄釉/胎土黄白色	瀬戸	近世
図版17-2-39	陶器	甕	-	-	-	胴部破片/内外面鉄釉/胎土暗灰褐色	常滑	中世
図版17-2-40	土器	風炉?	-	-	-	口縁部小破片/内面：削り後磨き/外面：ナデ	在地系	中世?
図版17-2-41	土器	手焙り	2.9	-	-	小型品/口縁部~底部小破片/外面口縁部直下に菊花文のスタンプ/内外面黒褐色/胎土に石英・片岩を含む	在地系	中世

(単位：cm)

第27表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

## 第4章 調査のまとめ

本書は、平成15・16年度に国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査等を実施した成果を収録したものである。今回はそのうちの発掘調査を実施した城山遺跡第46・55地点についての調査所見をまとめることにする。

### 第1節 縄文時代前期末葉の遺構・遺物について

本報告中、第46地点の調査では2号住居跡が確認された。この住居跡は遺構上部の多くが耕作によって破壊されており、床面もトレンチャーによって溝状に攪乱されているものの、地床炉の位置や住居の規模については確認することができた。

住居跡の時期については、遺物の出土点数が少なく土器型式も一定していないため、詳細時期を特定できないが、諸磯b・c式、十三菩提式の土器を中心に遺物が出土していることから前期末葉に位置付けられるであろう。本文中にも記したが、この時期の住居跡としては志木市で2例目である。

志木市内において前期末葉の土器群は、城山遺跡をはじめ新邸遺跡、中野遺跡、中道遺跡など柳瀬川に面した台地のごく縁辺地域を中心に出土しているが、その多くは遺物包含層からの出土、あるいは後世の遺構の覆土に混入した、いわゆる流れ込みの遺物としての出土である。

遺構からの出土例は、城山遺跡A地点1号住居跡（志木市 1984）、新邸遺跡第1地点1号土坑（佐々木・尾形 1986）、同第8地点1号ピット・土坑（尾形・深井・青木 2007）で見られ、また、未報告資料の城山遺跡第22地点2号集石、同第59地点小竪穴状遺構などを含めてもごく僅かである

こうした中で、今回の2号住居跡の検出とその出土遺物は、本報告だけを見れば地味なものに見えるが、大変貴重な発見であり、当該時期の資料の蓄積という意味でも今後の研究において重要なものと言えよう。

### 第2節 古墳時代中・後期の土器について

古墳時代中・後期の住居跡は、第46地点と第55地点を合わせると8軒（152～154・156～160H）検出されている。そのうち、新旧関係が確認できたのは、153Hと154H（153H→154H）、156Hと157H（157→156H）、159Hと160H（160H→159H）の6軒である。

出土土器については、156・158・159・160Hから僅かに須恵器甕・器台形土器（以下、「形土器」を省略）の小破片があるが、大部分は土師器で、器種としては坏・埴・鉢・甗・甕に分類できる。

以下、各住居跡出土の土器について考えてみることにする。



**152H出土土器**（第9図）

土師器坏（2～4）・甕（6）・甕（5）とミニチュア土器（1）で構成される。

土師器は全器種を通じて共通する調整・胎土をもつことから、「在地系土師器」（尾形 2005・2006）と考えられる。

坏は2が推定口径12cmで口縁部と底部との境に段を有する有段坏である。3は推定口径13.6cmで1よりもやや大振りで、口縁部と底部との境を有する有稜坏である。4は平底で外面には成形痕である指頭による押捺痕が観察される程度である。2は黒色土器の可能性があり、3・4は無彩土器である。

甕は長胴化が完成した長甕で、胴部中位以下を欠損する。最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置にあり、胴部の膨らみは弱い中位にある。

甕は筒抜け式のもので、口縁部から胴部中位を欠損する。

以上、本住居跡出土土器の特徴は、坏では在地系の黒色系・無彩系土器で占められ、法量の小型化傾向が顕著ではなく、甕の胴部の膨らみがまだ上半にないことから、7世紀前葉に比定できる。

**153H出土土器**（第10図）

154Hに切られ、調査区北西端に焼土が確認できることから炉跡をもつ住居跡と考えられる。土器は土師器坏（1）・埴（2）・壺（3）で構成される。

坏は推定口径13cmで、全体に内湾する器形を呈し、外面にヘラ磨き調整が施される赤彩土器である。

埴は底部が碁笥底を呈する中型のものである。器面は摩耗が著しく特に外面の調整は不明であり、赤彩は施されていると思われるが明確に確認できなかった。

壺は複合口縁を呈し、肩部で「く」字状に屈曲するものである。

以上、本住居跡出土の土器の特徴は、中型埴や複合口縁を呈する壺の存在から、古墳時代中期の様相を残すものである。時期については、基本的に住居跡に炉跡をもち、5世紀後葉の154Hに切られることから、5世紀中葉に比定できる。

**154H出土土器**（第11図）

153Hを切ることが確認できたが、遺構の南西コーナーの一部のみの検出であるため、遺構の詳細は不明である。土器は土師器坏（1）・壺（2）で構成される。

坏は口径13.6cmで底部が碁笥底を呈する内斜口縁坏である。

甕は口縁部途中で1条の段を有し、内外面に光沢をもつヘラ磨き調整が施されるもので、不鮮明であるが外面に赤彩の痕跡が観察できることから、壺と考えられる。

時期については、153Hと土器のセットで考えた場合は、さほど新旧の差が顕著ではないが、住居跡の切り合いから、5世紀後葉に比定できる。

**156H出土土器**（第15図）

土師器坏（1・2）・甕（5～11）、須恵器甕（3・4）で構成される。

土師器はすべて無彩系で、さらに全体に共通する調整・胎土をもつことから、「在地系土師器」と考えられる。坏は1が推定口径9.4cm、2が口径13.6cmを呈する。甕はさらに長甕（6～9・11）と丸甕（3・10）に分類される。特に長甕の特徴としては、口縁部が大きく外反し、6のように口径が胴部最大径を上回るものや7のように口縁部と胴部との境が段をもつものが目立ち、全体に胴部下半のスリム化がうかがえる。土師器坏同様に「在地系土師器」と考えられる。

須恵器甕は小破片で、内面には当て道具痕、外面には叩き道具痕が観察される。4の内面には青海波

文が残る。

以上、本住居跡出土の土器の特徴は、土師器坏・甕で「在地系土師器」で占められていることから、7世紀以降に比定でき、さらに6の長甕のように口径に最大径をもつタイプが伴うことから、おおよそ7世紀後葉に比定できる。

#### 157H出土土器（第17図）

土師器坏（1～4）・鉢（5）・甕（6～8）で構成される。

土師器は全体に共通する調整・胎土をもつことから、「在地系土師器」と考えられる。

坏は1が口径10.9cm、2が12.2cm、3が15.4cm、4が13.6cmで全体に法量のばらつきがうかがえる。

1・2・4は無彩系有稜坏、3は赤色系の大型有段坏であるが、特に3は法量や器形が6世紀中葉を主体とする有段坏に類似するが、調整・胎土については異なり、この赤色系土器についても「在地系土師器」の可能性はある（註1）。

また、甕では小型丸甕（6）と長甕（7・8）に分類できるが、長甕は口縁部が大きく外反し、胴部上半がやや発達し膨らみをもち、口径がまだ顕著に胴部最大径を上回らない器形である。

以上、本住居跡出土の土器の特徴は、土師器坏・鉢・甕が「在地系土師器」で占められていることから、7世紀以降に比定でき、さらに3の坏のような大型製品が含まれることや長甕の最大径が顕著に口径に移行していない特徴から、おおよそ7世紀中葉に比定できる。

#### 158H出土土器（第35図）

土師器坏（1～4）・甕（5～8）、須恵器甕（9）・器台（10）で構成される。

土師器は坏（1～3）を除き、「在地系土師器」と考えられる。

坏は1・2がいわゆる「比企型坏」である。1は推定口径12.0cm、2は推定口径11.4cmで、前段階のものに比べ、小型化傾向がうかがえる。1は口縁部と底部との境の有段がやや弱いが2点ともに有段系に属するものである。3は有段口縁坏である。胎土にガラス質を含み、さらに底部の粗いヘラ削りをもつ特徴から、広域流通品と考えられる。4は口縁部が直立し、口縁部と体部との境に断面三角形の有段をもつ有段坏で、これは「在地系土師器」と考えられる。推定口径は12.7cmである。

甕は長甕（5～7）と丸甕（8）に分類でき、特に長甕は口径がまだ胴部最大径を上回らない器形である。6は胴部上半に胴部最大径をもち、底部に木葉痕が残っていることから、最新の様相であると言える。

須恵器では9が甕の口縁部破片、10が器台の脚台部破片である。いずれも優品であり、陶邑製品と考えられる。特に9の甕は159H-8と同一個体と考えられる。

以上、本住居跡出土の土器の特徴は、土師器坏の口径がやや小型化傾向にあること、そして、土師器甕では長甕6が共伴することから、おおよそ7世紀中葉に比定できる。

#### 159H出土土器（第38図）

土師器坏（1～5）、須恵器甕（8）で構成される。

特に土師器坏は、法量の目安としての口径がすべて推定口径であるが、1は14.0cm、2は12.8cm、3は12.4cm、4は12.0cm、5は11.8cmで、僅かに小型化傾向にあるものの顕著とは言えないであろう。1は赤色系の有段坏、2は有段口縁坏、4は黒色系有段坏で、3は在地系の黒色系有段坏と考えられる。

須恵器甕の8は前述したが、158H-9と同一個体と考えられる。

以上、本住居跡出土の土器の特徴は、土師器坏の口径がまだ顕著に小型化傾向がないことを重視し、

おおよそ7世紀前葉に比定できる。

#### 160H出土土器（第39図）

須恵器器台の脚台部小破片が2点出土している。1は脚台部下半で僅かに屈曲する器形で、上下を2条凸帯で区画された内側は櫛歯状工具による連続刺突文が施文される。透かし窓は2ヶ所確認できる。2は2条凸帯に区画された内部は櫛歯状工具による波状文が施文される。透かし窓は1ヶ所確認できる。時期については、他の小破片を含め、おおよそ6世紀前葉に比定できるであろう。

そして、今回注目すべきことは、これらの土器と同一個体と考えられる資料が、今回の158H-10、さらに以前に調査を実施した城山遺跡第34地点125・127号住居跡（尾形・深井 1999）、第25地点104号住居跡（佐々木・尾形・深井 1996）というように本住居跡から近接するエリアの異なる住居跡から出土していることである。1の刺突文は127H-4、2の波状文は125H-13・104H-4にそれぞれ対応する。接合関係を試みたが接合はしなかった。こうした状況は、これらの須恵器の破片を所持すること自体に意味があると想像することができる。さらに158Hは7世紀中葉、125Hは6世紀末葉、127Hは6世紀初頭、104Hは5世紀中葉というようにそれぞれの住居跡の時期が異なるということも何らかの意味があるのであろう。おそらく、これらの製品は、特に陶器製品という優品であるため、憧憬という意味であるかは不明であるが、何らかのシンボリック的な役割を果たしていたのではないかと想像できるものである。その場合、一過性だけのものではなく、2世紀もの長い間という伝統的な要因を含んでいるという可能性もある。また、今回出土した須恵器甕である158H-9と159H-8が別遺構でありながら同一個体と考えられることも単なる混入品として判断するのは危険であるかもしれない。

以上、今回の第46・55地点の両調査で検出された住居跡の時期設定をまとめてみると、古い順に5世紀代は153Hが中葉、154Hが後葉、6世紀代は160Hが前葉、7世紀代は152・159Hが前葉、157・158Hが中葉、156Hが後葉という時期を与えることができた。このように6世紀代ではやや希薄であるが、狭小エリアの中で5世紀から7世紀までの住居跡が検出されていることは、城山遺跡の古墳時代の集落跡の濃密さを示していると言えるであろう。

---

## 第3節 平安時代の遺構・遺物について

---

### （1）155号住居跡と出土土器について

155号住居跡は、33Mに切られていることが確認できたが、出土遺物から見て、かなり近接した時期の遺構と思われる。

住居構造としては、3.60×3.30mの長方形を呈し、小型住居に属するものであろう。カマドはA・B・Cの3ヶ所で確認されることから、住居の作り替えが行われていた可能性がある。最も新しいカマドは粘土の遺存状態が良好な東カマドでカマドAに相当する。

出土遺物（第20図）には、土器と鉄製品がある。土器はさらに須恵器坏と土師器甕に分類することができる。

ここでは、出土土器について考えてみることにする。

まず、須恵器坏は2点（1・2）で、1は推定口径12.6cm・底径5.6cm、2は口径11.8cm・推定底径6.0

cmを測り、それぞれ底部は未調整で回転糸切り痕が残る。これら2点は、胎土に白色砂粒（長石類）を含むことから、東金子窯製品と考えられる。口径・底径比では、1の底径は口径の1/2を上回り、2の底径は口径の1/2を下回っている。器形的には深身というよりまだ浅身タイプであることから、鳩山町広町B窯跡出土の須恵器編年（渡辺 1990）を参考にすると、広町BⅦ期（9世紀中葉～後葉）に比定できるであろう。

土師器甕は3点（3～5）で、すべて武蔵型甕に分類される。口縁部形態が「コ」の字形を呈することから、根本編年（根本 1999）によるⅥ期（9世紀中葉）以降に比定されるであろう。

以上から、本住居跡出土の須恵器杯と土師器甕は、おおよそ9世紀中～後葉に比定できるが、須恵器杯で見られる口径・底径比の違いは、広町B窯跡Ⅶ期の中で若干の時間差を示すものであり、それが住居の存続期間と一致する可能性がある。

## （2）33号溝跡について

33号溝跡（33M）は、第46地点と第55地点の両地点で検出され、おおよそ東西方向に走行している。両地点のデータを総合すると、上幅60～83cm・下幅35～57cm・深さ6～32cmで、長さは第46地点の西端から第55地点の東端までの確認できる範囲で約27mになる。

出土遺物としては、良好なものはなかったが、小破片でありながら、すべて平安時代に比定できる須恵器杯・甕などが出土していることから、安定した出土状況を示していると言えるであろう。出土土器から詳細な時期の設定は難しいが、155号住居跡を切り、出土土器には回転糸切り痕を残す須恵器杯（図版9-1-1～3）があることから、ここでは9世紀後～末葉として取り扱うことにする。

---

## 第4節 中世以降の遺構について

---

### （1）土坑・地下室について

第46地点と第55地点で検出された中世以降の土坑は24基、地下室は3基であった。これらを分類すると、大まかにA～D類の4つに分類することができる。なお、331Dは大部分が調査区外であるため、分類から外すことにした。

**A群 長方形の土坑** 20基（1類－13基、2類－6基、3類－1基）

1類－溝状土坑（335・336・339～345・349・350・353・354D）

2類－1類より短め（334・338・346・348・351・352D）

3類－幅広の長方形（330D）

**B類－円形の土坑** 1基

358D

**C類－不整円形の土坑** 2基

337・347D

**D類－地下室・地下坑** 3基（1類－2基、2類－1基）

1類－地下室で、1竪坑1主体部タイプ（332・333D）

## 2類—地下坑タイプ (356D)

以上、今回検出された土坑を分類したが、これを城山遺跡第42地点（尾形・深井・青木 2005）で使用した分類を参考にすると、次のように対応できる。

A 1類→B 1類	B類→C類	C類→D類	D 1類→E 1類
A 2類→B 2類			D 2類→E 2類
A 3類→B 3類			

A類の長方形の土坑は、1類の溝状土坑が長いか短いかという差により細分したものである。このA類は、城山遺跡第42地点では、18世紀前半から19世紀全般にかけての農業関連に用いられた「いもあな」・「いもびつ」などと呼ばれる類として考えられている。

B類の円形の土坑は、1例検出されたが、第42地点においても用途等の詳細は不明であると説明されている。今回の358Dでは、用途不明であるが、坑底近くから粘土ブロックと礫が、さらにその下から白い灰が検出されたことからカマド跡の可能性はある。時期については、18世紀後半～19世紀前半であろうか。

C類の不整円形を呈する土坑については、第42地点においては、近・現代のゴミ穴とする例が含まれている。基本的に大量の瓦や陶磁器・土器などの出土がある場合であるが、遺物がないものについては不明である。今回の347Dからは志野の菊皿1点が出土しているため、中世（16世紀）と考えたが、厳密には混入品である可能性もある。

D類の地下室については、高崎直成氏の論考を参考にする（高崎 2007）。これによると、今回分類した1類の332DはI群（単室）の2aC類（方形／竪坑下段）、333Dは1aB類（円形／竪坑有段）、さらに2類の356DはII群（拡張）の4類（多角形）に分類できる。そしてこれらの用途について、1類は中世の地下式坑にもあるタイプで、用途は不明であるとしながらも「屋敷地内や畑中から検出する地下室の立地場所は、近世後半以降のアナグラと同じであり、農作物の貯蔵用の可能性が高い」、2類は「アナグラ・ムロ」として、「用途がはっきりしており、形態の上での中世にはない近世以降の形態である」と説明されている。

今回の地下室の時期については、出土遺物から、332Dは18世紀、333・356Dは18世紀後半～19世紀代と考えられ、高崎氏が分析するように近世以降の時期に一致するものである。

## （2）井戸跡について

井戸跡は、第46地点から4基（25～28W）が検出された。これにより、城山遺跡における井戸跡は全体で28基を数える。時期については、今後トータル的に把握する必要があるが、第42地点では、8基中4基が16世紀後葉～17世紀中葉に比定され、柏の城関連として捉えられている。

今回検出された井戸跡については、4基中2基（26・27W）が遺物を出土しなかったため、時期は不明であったが、25Wからは陶磁器・土器が出土し、18世紀前半から後半の時期が与えられる。28Wについても焙烙の小破片1点が出土しているが、時期は特定できなかった。

〔註〕

註1 「在地系土師器」は、無彩系土器を主体に黒色系土器で構成されるものと考えられていたが、赤色系土器の存在の可能性を指摘している（尾形 2006）。

〔引用・参考文献〕

- 尾形則敏・深井恵子 1996『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 埼玉県志木市教育委員会  
1999『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2005『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会  
2007『新邸遺跡第8地点』志木市遺跡調査会調査報告第11集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏 2005「第4章第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証」『城山遺跡第42地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会  
2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義―武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例―」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立50周年記念論文集  
2007「埼玉県川越市における古墳時代中・後期の様相―集落跡出土の5世紀から7世紀の土師器を中心として―」『あらかわ』第10号 あらかわ考古談話会
- 神山健吉 1988「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
- 佐々木保俊・尾形則敏 1986『新邸遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第2集 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・尾形則敏・深井恵子 1996『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 埼玉県志木市教育委員会
- 志木市 1984『志木市史 原始・古代資料編』
- 高崎直成 2007「埼玉県内における近世以降の地下室について」『あらかわ』第10号 あらかわ考古談話会
- 根本 靖 1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究 Ⅱ―土師器煮沸具の変遷について―」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

[付 編]

## 自然科学分析





# I. 住居跡出土の炭化種実

新山雅広 (パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

本稿は、城山遺跡第46・55地点の住居跡出土の炭化種実を検討し、利用植物を明らかにすることを目的とする。

## 2. 試料と方法

炭化種実の検討は、第46地点の3住居跡(152・156・157H)、第55地点の2住居跡(158・159H)から出土したものについて行った。各試料は、概ね抽出済みであり、袋ないしケースに乾燥保存されていた。

## 3. 出土した大型植物化石

全試料で同定された分類群は、木本がモモ、サクラ属の2分類群、草本がイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類の4分類群であり、その他に虫えいが含まれていた。以下に、各試料の炭化種実を記載する。

### (1) 第46地点

152H (土壌サンプル、ガラス小玉周辺の覆土)：微細炭化物を多く含む。その中に、イネ炭化胚乳2個、イネ炭化穎(破片)2個、オオムギ2個、ムギ類1個が含まれていた。これら以外にも未炭化種実が含まれていたが、現代のものが混入した可能性が高いと考えられる。含まれていたのは、イネ科類、スゲ属、クワクサ、スベリヒユ、エノキグサ、キランソウ属である。

156H (種1)：モモ炭化核破片が6個であり、完形換算で約1個分である。

157H (No.6の丸甕内の土壌より)：イネおよびコムギの炭化胚乳が各10個程度であった。他に、虫えいが僅かに含まれていた。

### (2) 第55地点

158H (種1)：モモ炭化核破片が1個であった。

159H (種1～3)：種1はサクラ属の破片が14個であったが、微細であり、完形1個分に満たない。種2はサクラ属の破片が2個であり、完形1個分である。種3はイネ炭化胚乳が1個である。

## 4. 形態記載 (図版18、第28表)

### (1) モモ *Prunus persica* Batsch 炭化核

いずれも破片であったが、表面に明瞭な溝が認められる。第55地点の158Hの核は、長さ14.5mm、幅10.3mm程度であった。

### (2) サクラ属 *Prunus* 炭化核

159Hから出土した。種1は、径2～7mm程度の微細破片で表面の状態も悪く、全ての同定は困難であった。しかし、何らかの核の一部であると思われ、比較的大型の2個については、内部形態などからサクラ属であり、先端部や縫合線部の破片と考えられた。大きさから小型のサクラ属と推定される。種2は、明らかなサクラ属であり、長さ9.3mm、幅6.9mm程度である。表面の状態は悪いが、溝はなく、小孔もないように思われるので、スモモかサクラ節と思われる。スモモとしては小型、サクラ節としては

大型である。

(3) イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳、炭化穎

炭化胚乳は、側面観・上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の2本の筋が入り、3等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。第46地点の152H、157Hは、小型で幅ないし厚みが極端に小さい未熟果を含む。152Hの穎片は、1個は基部の部分である。第55地点の159Hは、穎が少し付着する。

(4) オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

側面観は長楕円形ないし紡錘形、断面は楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、類三角形の胚がある。なお、ムギ類としたものは、表面の状態がわるく、欠損もしており、オオムギかコムギかの識別をし得なかった。

(5) コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。

(6) 虫えい

昆虫が植物体に産卵寄生した結果、異常発育した部分であり、葉や果実などに見られる。出土したものの1個は、高さの低い概ね円柱形である。もう1個は明らかに欠損しており、外形は不明である。

5. 考 察

各住居跡で利用されていた植物は次のように考えられた。第46地点の152Hは栽培植物のイネ、オオムギ、ムギ類、156Hはモモ、157Hはイネ、コムギ、虫えいであった。157Hは、丸甕（第17図6）内の土壌から出土した炭化種実であり、イネ、コムギが甕内に含まれていた可能性があるが、何故虫えいも一緒に出土したかは分からない。第55地点については、158Hでモモ、159Hではサクラ属、イネの利用が考えられた。サクラ属はおそらく、モモ以外であり、スモモやサクラ節の可能性が考えられた。全般に出土量が少ないので、各住居の炭化種実を十分に比較検討することはできず、利用植物に違いがあったかどうかまでは言及できない。

以上から、城山遺跡第46・55地点の住居跡から出土した炭化種実を検討した結果、モモ、サクラ属、イネ、オオムギ、コムギが利用されていたと考えられた。

分類群 ・部位	地点	第46地点			第55地点			
	遺構名	152H	156H	157H	158H	159H		
	試料名など	土壌サンプル	種 1	No.6 丸甕内の土壌	種 1	種 1	種 2	種 3
モモ	核		(6)		(1)			
サクラ属	核					(14)	(2)	
イネ	炭化胚乳	2		7(2)				1
	炭化穎	(2)						
オオムギ	炭化胚乳	2						
コムギ	炭化胚乳			10(1)				
ムギ類	炭化胚乳	1						
虫えい				1(1)				

数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

第28表 住居跡出土の炭化種実一覧

## Ⅱ. 住居跡・土坑出土の灰試料

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ、根より大量の珪酸分を吸収し葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）といい、機動細胞珪酸体については藤原（藤原 1976）や藤原・佐々木（佐々木・藤原 1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから、得られた灰試料についてその植物珪酸体（機動細胞珪酸体）の検出を図り、その形態を観察することによって母植物（イネ科植物）についてある程度検討ができると考える。

以下には志木市の城山遺跡において行われた発掘調査で採取された土壌混じりの灰試料について上記のことから植物珪酸体分析を行い、観察される植物珪酸体の形態より採取された灰試料の母植物について検討した。

### 2. 試料と分析方法

試料は、城山遺跡第46地点の156H及び第55地点の158Hと358Dより採取された灰試料3点である。この土壌混じり灰試料3点について、下記の方法にしたがって植物珪酸体分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 $\mu$ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 $\mu$ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。

### 3. 観察結果（図版19）

156H：図版19-5~7に示したジグソー・パズル的な模様を示す珪酸体が多数認められる。これについて現時点では形態記載による母植物の特定はなされていないが、現生のコムギやオオムギの穎にこれらと非常に酷似した形態が認められることから、これらはムギ類の可能性が高いと思われる。また、胴の中央部分が大きく凹み、先端部分の中央も窪んでハサミのような形状をしている単細胞珪酸体が横方向に連なって観察され（図版19-4）、これはイネ型の単細胞珪酸体と判断される。その他、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）やヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）の機動細胞珪酸体が新鮮な状態で若干認められる。こうしたことから156Hで認められる灰はムギ類？の穎を主体に稲藁やウシクサ族、ヨシ属を交えた灰と判断される。

158H：鳥のくちばし状の突起を持つ珪酸体（図版19-3-b）が多く認められ、これはその形状からイネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の破片と判断される。また上記したムギ類？の穎とみられる珪酸体の破片も少し認められる。こうしたことから158Hで認められる灰の主体はイネの穎（籾殻）であり、ムギ類？の穎も含まれていると考えられる。

358D：本遺構では断面形態がイチョウの葉型をした機動細胞珪酸体（図版19-1-a・2-a）が多く認

められる。この珪酸体には側面部分に突起が、表面部分に窪みが、また裏面部分には細かく浅い亀甲状紋様が認められ、以上のような形態からこの機動細胞珪酸体についてはイネと判断される。イネ以外ではキビ族やシバ属の機動細胞珪酸体が新鮮な状態で若干観察される。こうしたことから358Dで認められる灰の母植物はイネと判断され、それに若干のキビ族やシバ属が混じっていると推測される。なおこれらキビ族やシバ属は水田内や畦などに生育していたいわゆる水田雑草類（タイヌビエやノシバなど）と推測され、イネの収穫時などに混入したのではないかと思われる。

以上のように、156Hではムギ類と考えられる穎を、158Hではイネの穎を、358Dでは稲藁を主体とした灰と判断される。またそれらに156Hでは稲藁やウシクサ族、ヨシ属が、158Hではムギ類？の穎が、また358Dではキビ属やシバ属が若干混入した灰と判断されよう。

### [引用文献]

- 藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学 9』p.15-29.
- 藤原宏志・佐々木 彰 1978「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—」『考古学と自然科学 11』p.9-20.

### Ⅲ. 住居跡・土坑出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

本稿では、城山遺跡第55地点の古墳時代後期の住居跡（158H）と近世の土坑（358D）から出土した炭化材 2 試料の樹種同定結果を報告する。

#### 2. 試料と方法

358Dには異なる分類群の破片が含まれていたため、取上げられていた試料から形状や大きさの異なる炭化材 3 点を選び、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の 3 方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3 断面を 5 mm 角以下の大きさに整え、直径 1 cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

#### 3. 結果（図版20、第29表）

158Hからは、コナラ節の小破片が複数検出された。

358Dからは、クリと思われる直径 6 mm の枝、クリの晩材部と思われる小破片、ケヤキの小破片が検出された。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材組織写真を提示した。

##### ○樹種記載

(1) **コナラ属コナラ亜属コナラ節** *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版20-1a-1c  
年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は薄壁で多角形の非常に小型の管孔が火炎状に配列している環孔材で、広放射組織がある。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。

(2) **クリ?** *Castanea-crenata* Sieb. et Zucc. ? ブナ科 図版20-2a・2b (358D試料1)・3a・3b (358D試料3)

試料1は小型の管孔が火炎状に配列しているように見られ、放射組織は単列、道管の穿孔は単穿孔であった。クリの晩材部と思われる。

試料3は当年輪だけの材で、小型の管孔が火炎状に配列し、髄は五角形の星型である。放射組織は単列、道管の穿孔は単穿孔であった。ブナ科の髄は星型である上に、ブナ科クリは放射組織が単列であることから、クリの枝材と思われる。

(3) **ケヤキ** *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版20-3a-3c (358D試料2)

中型の管孔が配置する部分と、小型の管孔が集合して分布している部分が見られる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、軸方向に連続して並ぶ結晶細胞も見られた。

明瞭な環孔性が見られない事から、根材または節部の材と思われる。

#### 4. まとめ

158Hから検出された炭化材は、小破片であり、本来の形状・用途は不明であるが、樹種のコナラ節は建築材・燃料材・木器など色々な樹種利用が知られている有用材である。

358Dから出土した小破片からは、クリ?とケヤキが検出された。クリ?は晩材部?破片と非常に細い枝材で、ケヤキは根材か節部のようであり、これらの形状は雑多で有用部位ではないことから、不要部位を燃やし廃棄したものかも知れない。

調査地点	遺構名	樹種	備考	
城山遺跡 第55地点	158H	コナラ節	小破片が複数	
	358D	試料1	クリ?	晩材部?の小破片
		試料2	ケヤキ	根?または節?の破片
		試料3	クリ?	φ6mm 樹皮付き 芯持ち丸木 枝

第29表 住居跡・土坑出土炭化材の樹種同定結果

# 版 図







1. 表土剥ぎ風景



2. 2号住居跡発掘風景



3. 2号住居跡



4. 2号住居跡



5. 152号住居跡



6. 152号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



7. 153号住居跡



8. 153号住居跡貯蔵穴



1. 154号住居跡



2. 156号住居跡発掘風景



3. 156号住居跡遺物出土状態



4. 156号住居跡遺物出土状態



5. 156号住居跡遺物出土状態



6. 156号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



7. 156号住居跡カマド遺物出土状態



8. 156号住居跡



1. 157号住居跡遺物出土状態



2. 157号住居跡遺物出土状態



3. 157号住居跡カマド遺物出土状態



4. 157号住居跡



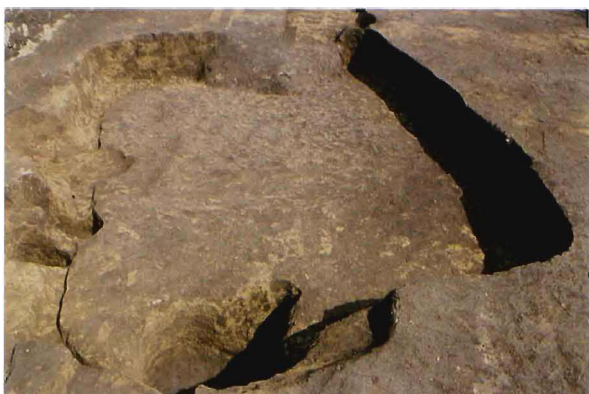
5. 155号住居跡遺物出土状態



6. 155号住居跡カマドA掘り方



7. 155号住居跡カマドB・C



8. 155号住居跡



1. 33号溝跡西側



2. 33号溝跡東側



3. 330号土坑・25号井戸跡



4. 331号土坑



5. 332号土坑豎坑部



6. 332号土坑主体部入口



1. 333号土坑竪坑部



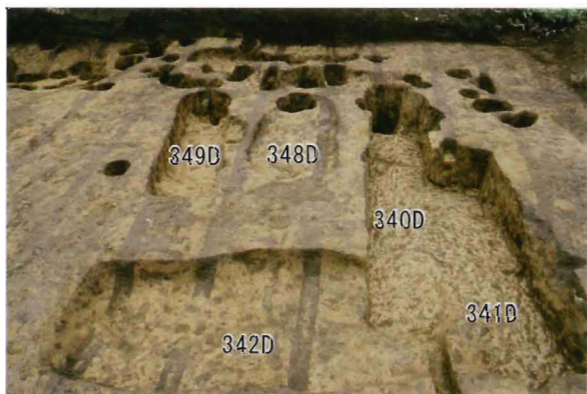
2. 333号土坑主体部



3. 334号土坑



4. 335・336・339号土坑



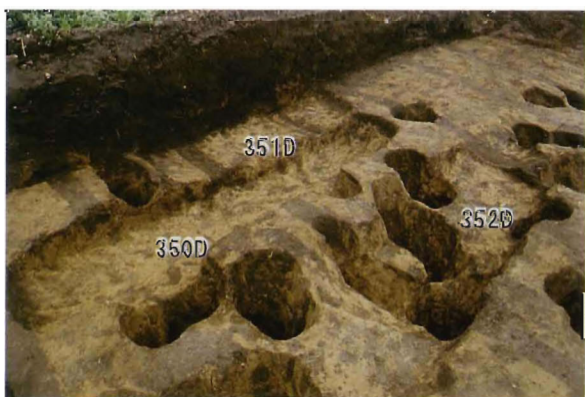
5. 340～342・348・349号土坑



6. 343～346号土坑



7. 347号土坑・ピット列



8. 350～352号土坑



1. 27号井戸跡



2. 28号井戸跡



3. 1号道路状遺構調査風景



5. 1号道路状遺構（西から）



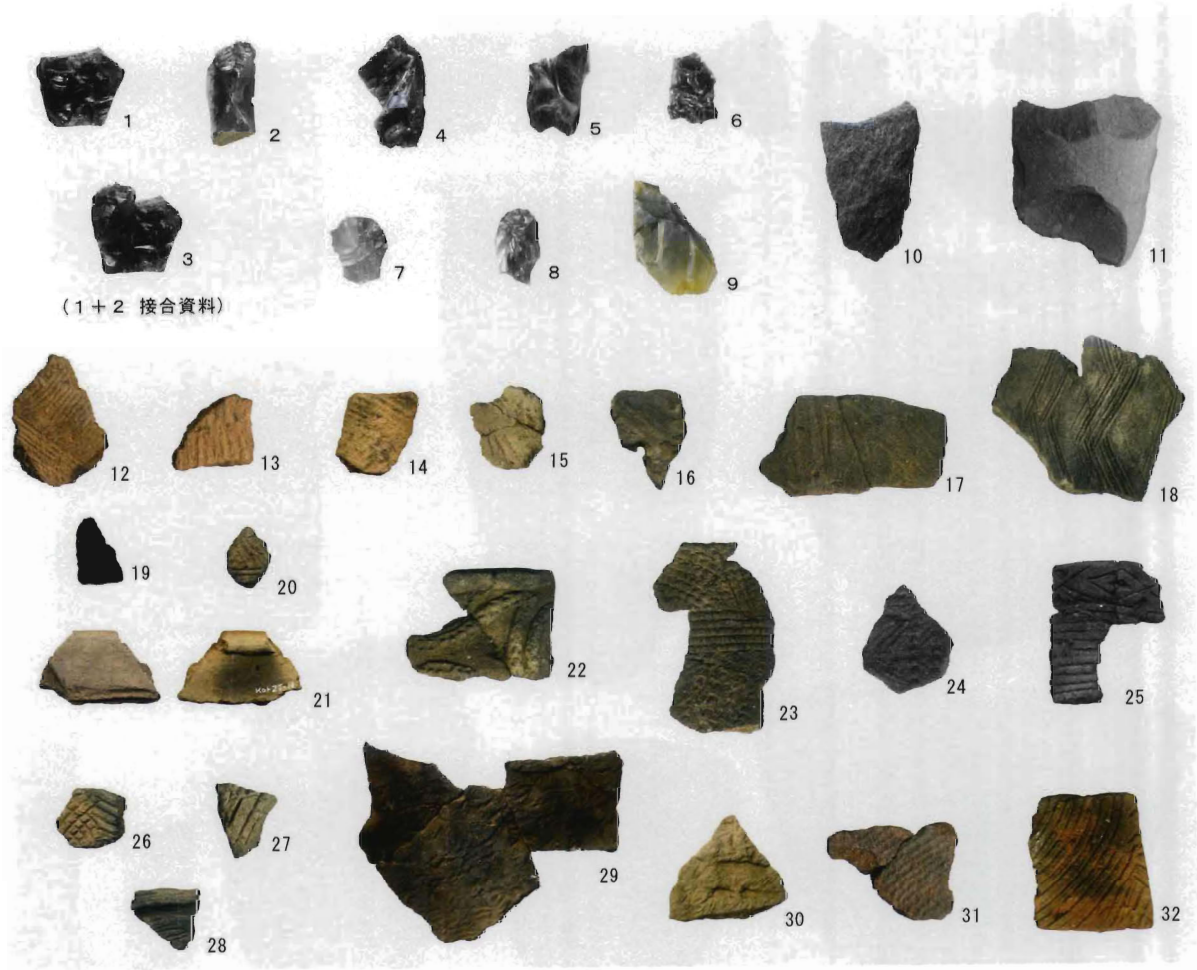
4. 1号道路状遺構（東から）



6. 1号道路状遺構掘り方



7. 1号道路状遺構掘り方



1. 2号住居跡出土遺物



2. 152~154号住居跡出土遺物



1. 156号住居跡出土遺物

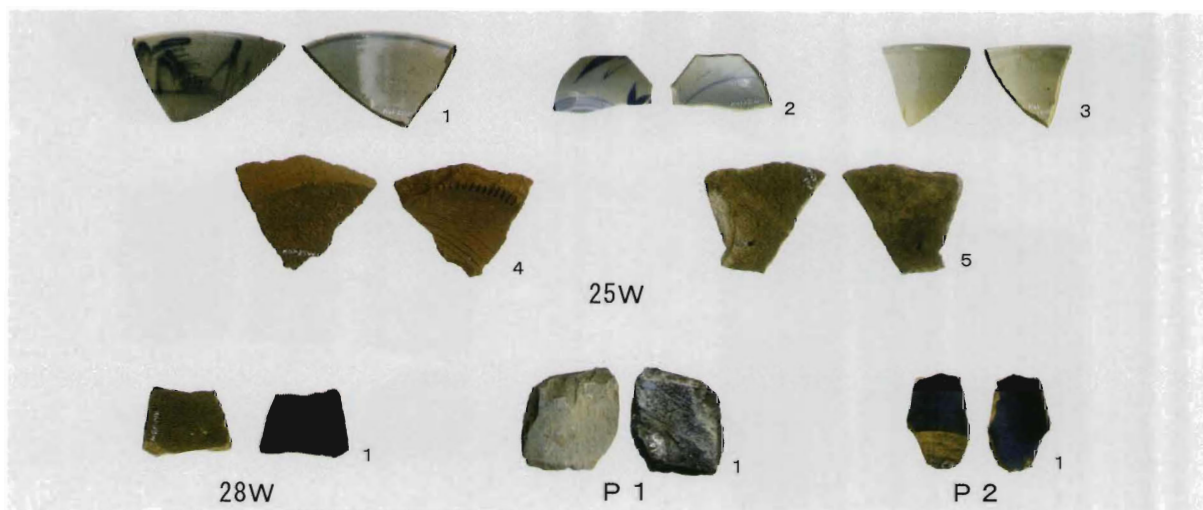


2. 157号住居跡出土遺物

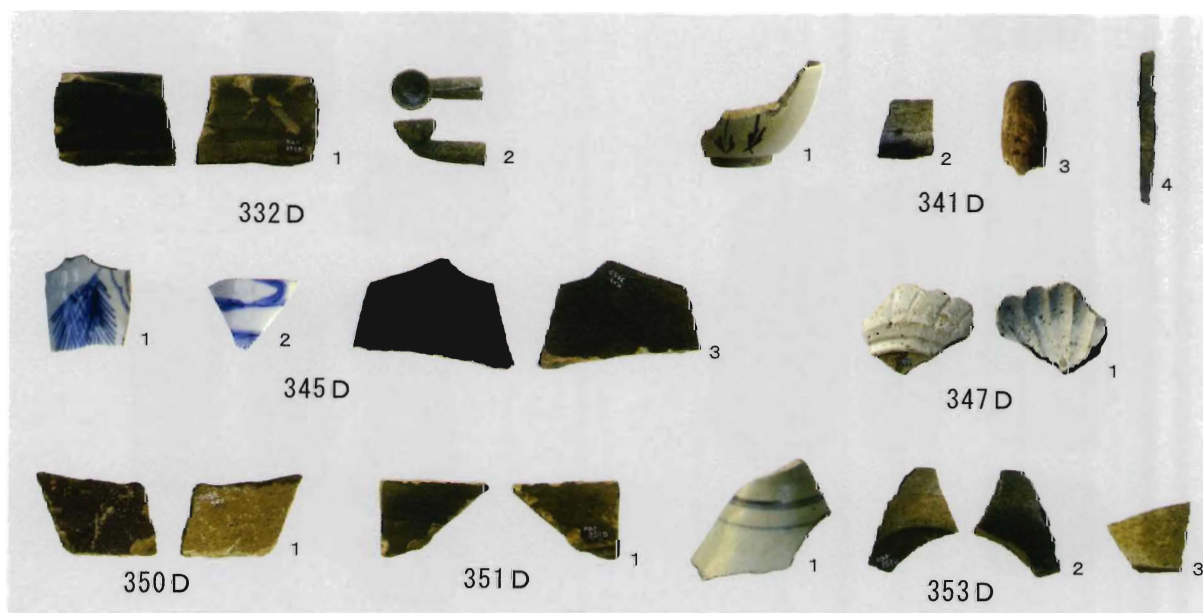




1. 155号住居跡・33号溝跡出土遺物



2. 井戸跡・ピット出土遺物



3. 土坑出土遺物



333号土坑出土遺物



1. 1号道路状遺構出土遺物



2. 遺構外出土遺物



1. 表土剥ぎ風景



2. 357号土坑



3. 359号土坑



4. 158号住居跡遺物出土状態



5. 158号住居跡貯蔵穴



6. 158号住居跡カマド



7. 158号住居跡壁溝



8. 158号住居跡



1. 159号住居跡遺物出土状態



2. 159号住居跡遺物出土状態



3. 159号住居跡



4. 159号住居跡新旧壁溝



5. 160号住居跡遺物出土状態



6. 160号住居跡遺物出土状態



7. 160号住居跡間仕切り溝



8. 159・160号住居跡掘り方



1. 356号土坑竪坑部



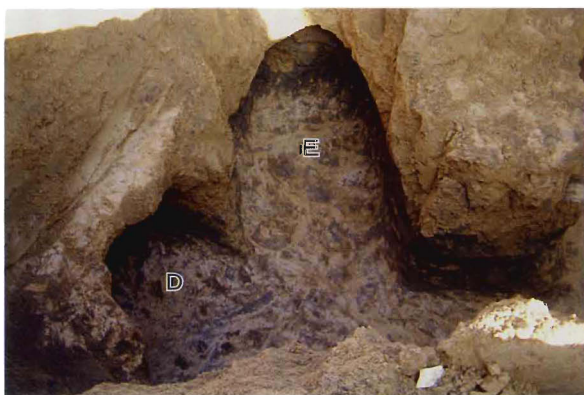
2. 356号土坑（東から）



3. 356号土坑（西から）



4. 356号土坑（北から）



5. 356号土坑（南から）



6. 356号土坑主体部A



7. 358号土坑粘土出土状態



8. 358号土坑



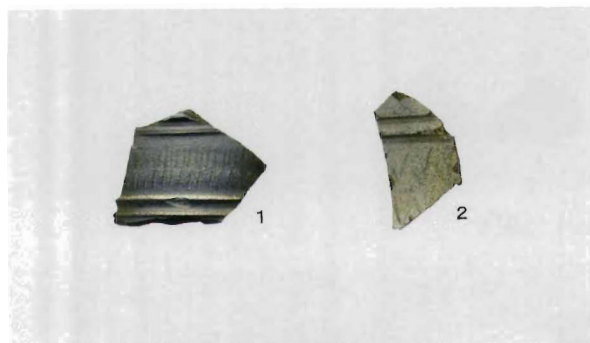
1. 359号土坑出土遺物



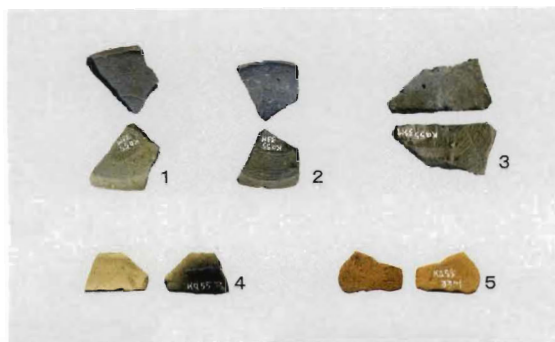
2. 158号住居跡出土遺物



3. 159号住居跡出土遺物



1. 160号住居跡出土遺物

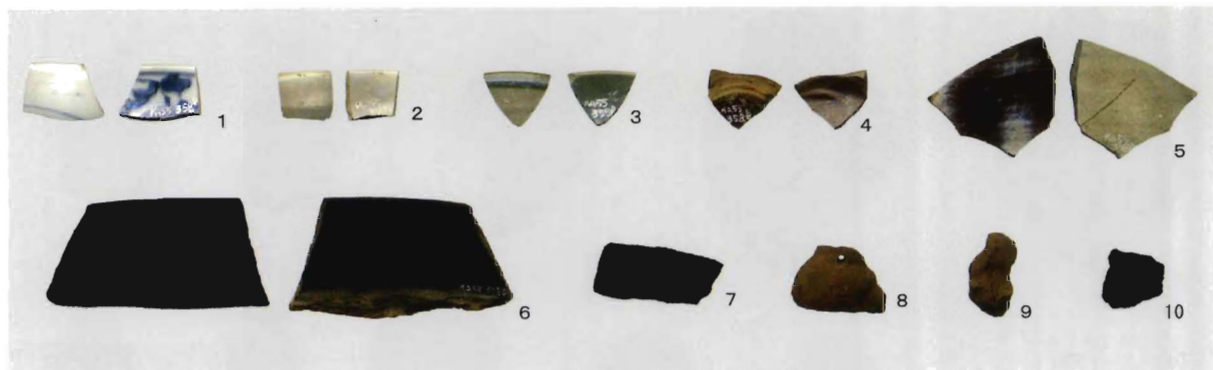


2. 33号溝跡出土遺物



3. 356号土坑出土遺物

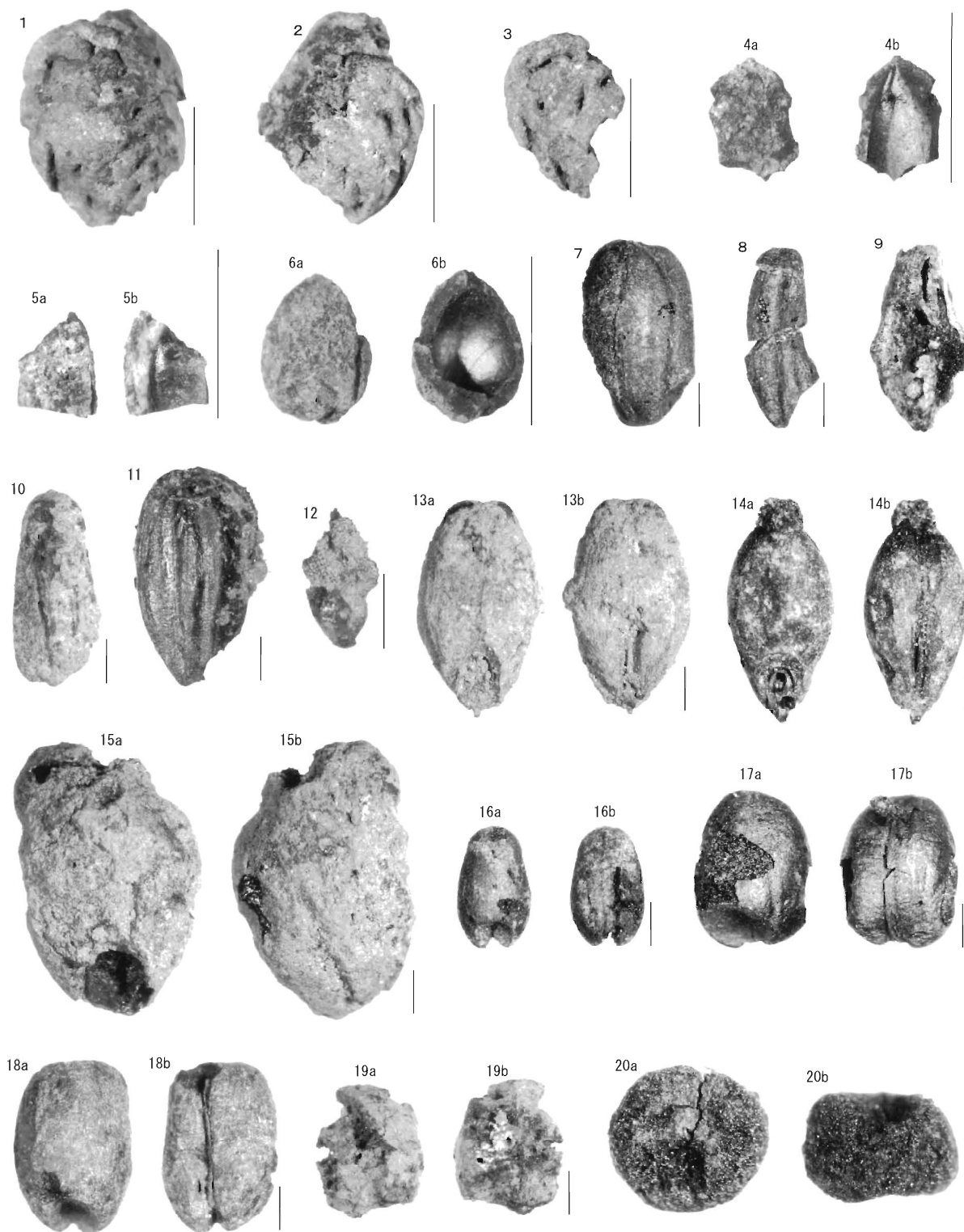




1. 358号土坑出土遺物

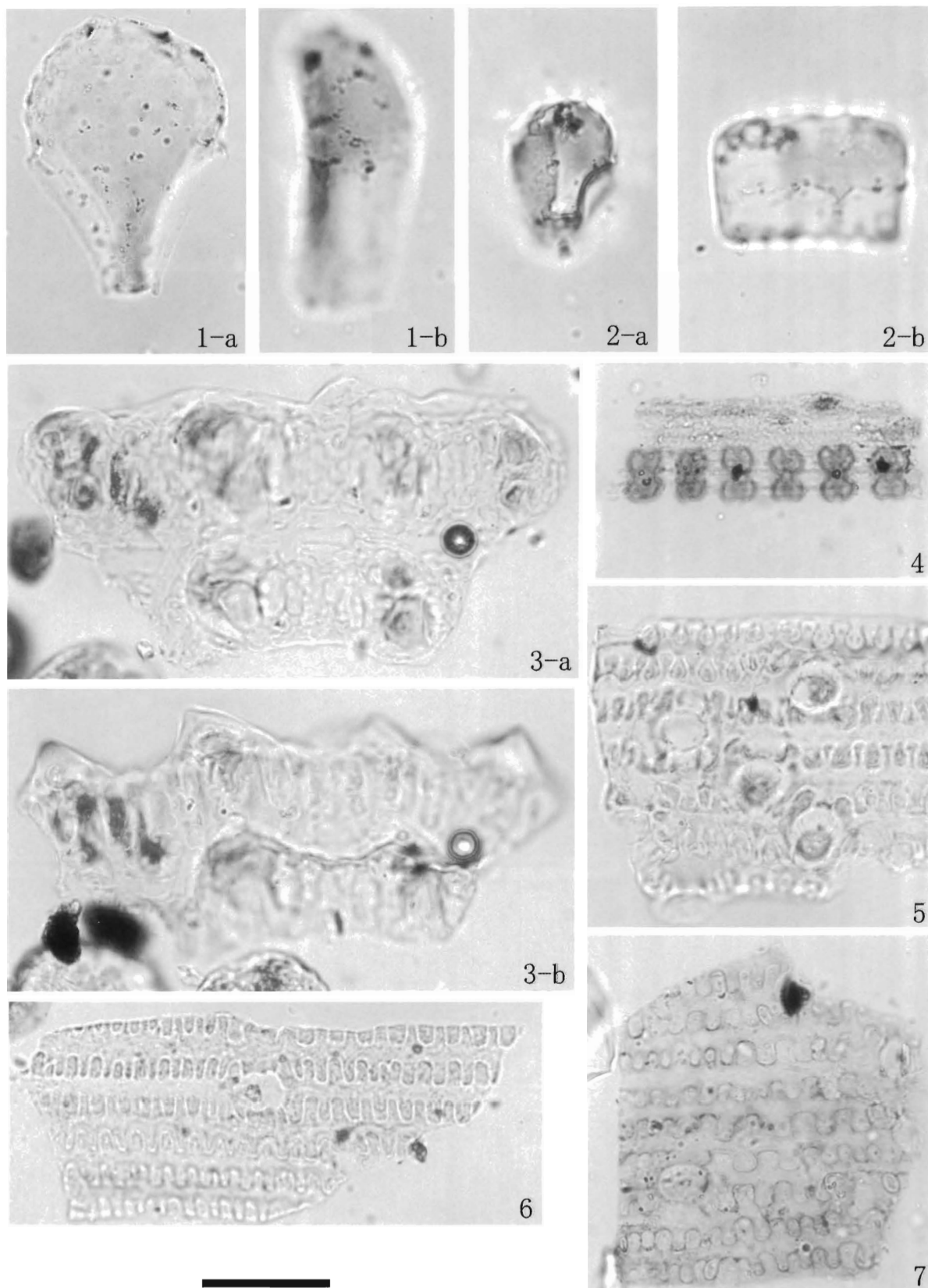


2. 遺構外出土遺物



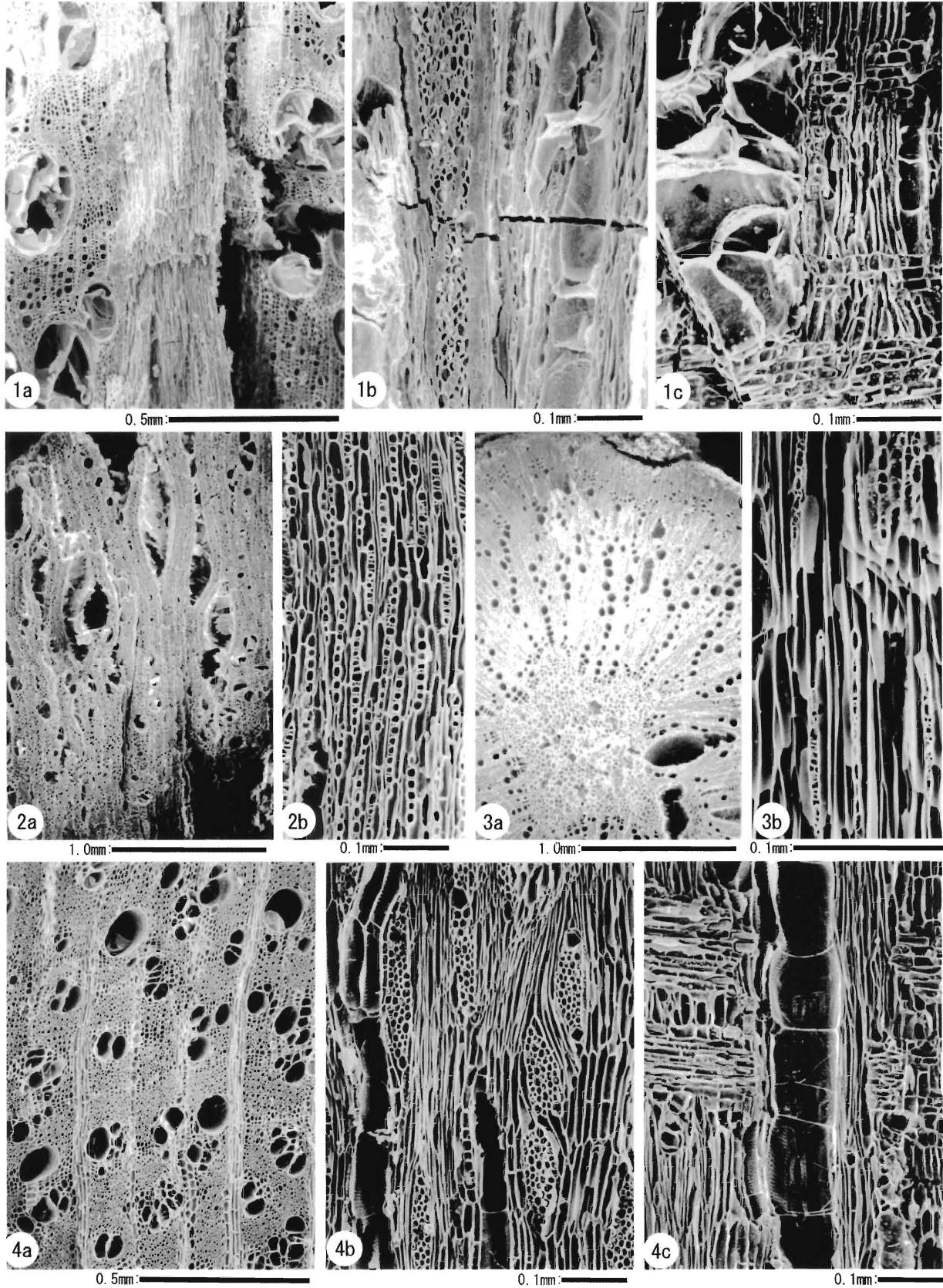
出土した炭化種実（スケールは1～6が1 cm、7～20が1 mm）

- 1.2. モモ、炭化核（156H） 3. モモ、炭化核（158H 種1） 4.5. サクラ属、炭化核（159H 種1）  
 6. サクラ属、炭化核（159H 種2） 7.8. イネ、炭化胚乳（157H） 9.10. イネ、炭化胚乳（157H）  
 11. イネ、炭化胚乳（159H 種3） 12. イネ、炭化穎基部（152H） 13～15. オオムギ、炭化胚乳（152H）  
 16～18. コムギ、炭化胚乳（157H） 19. ムギ類、炭化胚乳（152H） 20. 虫えい（157H）



植物珪酸体 (scale bar : 0.03mm)

1・2 : イネ機動細胞珪酸体 (a : 断面、b : 側面) 358D 3 : イネ穎部珪酸体 (一部破片) 158H  
 4 : イネ型単細胞珪酸体 (一部破片) 5~7 : ムギ類? 穎部珪酸体 (一部破片) 5・7 : 158H 6 : 156H



城山遺跡第55地点出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c: コナラ節 (158H) 2a・2b: クリ? (358D 試料1) 3a・3b: クリ? (358D 試料3)

4a-4c: ケヤキ (358D 試料2) a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん 16							
書名	志木市遺跡群 16							
副書名		巻次						
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第38集					
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成20年(2008)年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやま いせき 城山遺跡 (第46地点)	しき しかしわちやう 志木市柏町 3丁目2644-3・5	11228	003	35° 49' 53"	139° 34' 08"	20030228 ～ 20030430	348.29	個人住宅建設
しろやま いせき 城山遺跡 (第55地点)	しき しかしわちやう 志木市柏町 3丁目2644-1	11228	003	35° 49' 51"	139° 34' 09"	20041012 ～ 20041201	115.10	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
しろやま いせき 城山遺跡 (第46地点)	集落	縄文時代前期末葉 縄文時代 古墳時代中期 古墳時代後期  平安時代 中世以降	住居跡 1軒 土坑 1基 住居跡 1軒 住居跡 4軒  住居跡 1軒 溝跡 1本 土坑 23基  地下室 2基 井戸跡 4基 道路状遺構 1基 ピット群	土器・石器  土師器・土製品 須恵器・土師器・ミニチュア 土器・土製品・ガラス小玉・炭化種実  須恵器・土師器・鉄製品 須恵器・土師器 陶磁器・土器・土製品・石製品 陶磁器・土器・石製品・銅製品・瓦 陶磁器・土器 陶磁器・土器・銅銭	縄文時代前期末葉の住居跡(2J)は市内では2例目の検出である。			
しろやま いせき 城山遺跡 (第55地点)	集落	縄文時代 古墳時代後期  平安時代 中世以降	土坑 2基 住居跡 3軒  溝跡 1本 土坑 1基 地下坑 1基	土器 須恵器・土師器・土製品・不明土製品・炭化種実 須恵器・土師器 陶磁器・土器・土製品・瓦 陶磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・瓦				

志木市の文化財 第38集

## 志木市遺跡群 16

発 行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発行日 平成20(2008)年3月21日  
印 刷 株式会社 白 峰 社